



TITLE:

耗羨提解の研究：『雍正史』の一章 としてみた

AUTHOR(S):

安部, 健夫

CITATION:

安部, 健夫. 耗羨提解の研究：『雍正史』の一章としてみた. 東洋史研究
1958, 16(4): 454-608

ISSUE DATE:

1958-03-31

URL:

<https://doi.org/10.14989/148087>

RIGHT:

耗羨提解の研究

——『雍正史』の一章としてみた——

安 部 健 夫

目 次

一、地丁錢糧と火耗・羨餘

- (a) 地丁錢糧とその銀七錢三微支制
- (b) 制錢徵支の無實化と銀納の一般化
- (c) 「銀の通・錢の滯は吏の寶・民の賊なり」
- (d) 火耗銀兩——その技術的側面と稅務的側面
- (e) 火耗・羨餘すなわち耗羨の種別

二、康熙期——州縣官の耗羨の私収

- (a) 親民官則ち州縣官における公と私
- (b) 順治帝の滿人的善意と火耗の禁斷
- (c) 賊留令を無視させる火耗銀兩の誘惑
- (d) 三藩の亂による財政難と官吏給與の惡化
- (e) 陋規の常識化と火耗私収の公認
- (f) 私収された火耗の三つの使途の分析
- (g) 清初官僚機構の二大支柱と火耗の役割
- (h) 小民・貧戸の犠牲における火耗の私収

三、雍正期——司庫への耗羨の歸公

- (a) 實りなき康熙期の耗羨歸公の動き
- (b) 陋規・捐俸の禁止と楊宗仁の提解法
- (c) 諾峨の提解法をめぐる君臣間の論争
- (d) 督撫の任意事項としての提解法の實施普及
- (e) 耗羨提解の三類型と各省における加耗率
- (f) 雍正帝の滿人的善意と加耗の低減・平等化

四、歸公派と歸官派との抗爭

- (a) 乾隆初期における耗羨の歸民・歸官・歸公論
- (b) 歸公派の勝利と耗羨提解法の存續
- (c) 耗羨の正項化と清末の漢人的康熙の復活

一 地丁錢糧と火耗・羨餘

丁銀（人頭稅）を地畝に攤入^{くひい}れて徵收し、負擔の公正化をはからうとする言わゆる地丁銀制度の全國的な擴大、樂戸

(山西省)・惰民(浙江省)丐民(江南省)など、不當に非人間的な取りあつかいを受けてきた賤民たちの戸籍上の解放、滿漢兵丁の窮迫した生計を救済するための營運生息銀兩制度の設定など⁽¹⁾。これらとならんで、雍正帝がつよい確信をもつて斷行し、その成果についてみずから、朕の踐祚より以來、この舉は「實に善政」に屬せり(二〇八頁)との誇りをほこつた諸政策の一つに錢糧耗羨^{こうせん}の提解がある。それまでは州縣官が民衆から徵收しつ放しであつた錢糧の耗羨、とくに主として地丁錢糧の耗羨(後釋)を藩庫、すなわち、州縣などより上級の機關で財政を擔當していた布政使の司庫に提^{きだ}し解^おらせるという方式なのである。

(a) 地丁錢糧とその銀七錢三微支制

「錢糧」というのは、清初の人・顧炎武のいわゆる「今の賦を言うものは必ず錢糧と曰う」であつて、要するに國賦ないしは稅課のことに外ならない。

中國における賦稅は、古くはただ、粟(もみこめ)・帛など農産物ないしは農家の手工業製品をもつて納められていた。八世紀後半、唐の楊炎が兩稅法を行うにおよんで、始めて「錢」を徵し、間々また「糧」すなわち米・麥・豆な

どを徵した。そのご「民間より官に輸するの物」すなわち、賦稅をよんで「錢糧」とするようになったゆえんである。

下つて宋・金のころから銀を貨幣として使用する傾向がさかになり、元・明時代、とくに十五六世紀・明のころ以降、賦稅(田賦・丁稅)の在來「錢」で納めさせていた部分を「銀」で納めさせるようになって、賦稅は依然として錢糧とよばれた。「それ錢は錢なり。糧は糧なり。亦た惡^いんぞいゆる銀あらんや」⁽²⁾。理窟からいえば確におかしな話だけれども、しかしある名詞が、そのもと指示していた實體からズレた所にあるものを意味するようになり、甚しくは、そこにあつた具體的なものが一おう捨象されてほとんど抽象的な意味で使われるようになる。そうしたことは、それほど珍らしくもなくザラに見られる現象である。いまの場合などもその一つで、錢糧もしくはその省略形としての糧——たとえば「無^{シツ}以^テ錢^ヲ赴^イ糧^ニ納^{ムル}糧者」という場合の糧は、一面、錢であることもあり、銀であることもあり、米であることもあり、錢と米・銀と米であることもあつて一おうの具體性を保持するとともに、他面、それらの物貨とは不即不離の關係において賦稅一般、ひいては、収入お

よび支出をふくむ財政的經費一般を表わす言葉にまで抽象化されてきていたのである。またそのように解するのでもない限り、關稅錢糧とか鹽課錢糧とか、本來の意味での「糧」的なものには凡そ縁とおそような財政収入が、時おり『會典』その他の清代文獻にみえ、また織造・銅觔・河工等項錢糧とか、すでにマンシュ語化したチャリアン calian (軍人に與える錢米)⁵⁾——(文學かぶれの旗人に示しをつけるため、文官になつた彼らに「その俸祿を停め、披甲(兵士)の例に照らして給するに錢糧をもつてする」といわれる場合の錢糧)^{チャリアン}——とか、主として財政支出にかかわりある錢糧の出てくるのを理解することが困難であらう。

清代のあらゆる錢糧のうちでも、私がいま取上げようとしている問題に直接關係のあるのは、前述のように、錢糧中の大宗として、それに次ぐ關稅とともに正供もしくは正項をもつて目されていた地丁錢糧、なかでも、現物稅である漕糧分と存留糧分とを除いたいわゆる「地丁銀」の部分である。(なお、丁銀の地畝攤入の詳しいいきさつについては、在來の諸研究⁷⁾に對して十分な検討を加えたうえ、もし必要とあれば別に章を設けて考察されねばならぬが、ここ

では便宜、地丁銀の名一つでもつてその攤入以前の田賦・丁稅をも表現させておくことにしよう)。

地丁銀もしくは丁地銀は、くり返すまでもなく銀で納められていた稅種である。ただ、清代地丁錢糧の貨幣部分が、いつでも、すべて、銀でばかり納められていたかと言うに、そうではない。ごく初期には、そのほとんどすべてが銀で納められていたらしい。ところが順治十四年(一六五七)になると、戸部は、直省(天下各省)では、錢糧を收納するのに多く銀を収めている。現在、錢(制錢)が多く滯滯しているが、「せひとも」上下に流通させねばならない。ついでには銀と錢とを兼ね収め、「銀七錢三」をもつて準として、銀は盡數^{ことごとく}く「中央政府に」起解し、その錢は「各地方への」存留の用にあてて永く定例とされたいと奏請した。⁸⁾ 奏請は裁可された。『康熙會典』戸部十五、庫藏二、錢法の條に、同十四年の題准として、「錢糧ヲ徵收スルニハ銀七錢三トシ、銀ハ儘^{もと}ク起解シ錢ハ存留ノ用ニ充ツ」という形に要約された成例がその成果なのである。こうして地丁錢糧は、その全額の三割が一見、錢で納められるようになったかに見える。ただ不思議なことに、同じ『會典』の戸部八、賦役一、徵

収の條には、これまた同じ十四年に覆准された成例として、「直省ノ存留ノ錢糧ハ銀七錢三ノ額數ヲ按ジテ収放ス」というのを掲げている。「収放」は徴収と支放すなわち支拂いの意。この場合はどうみても存留錢糧の三割でなければならぬ。康熙二十四年關係の統計數でいうと、全天下の地丁銀數は大約二千八百萬兩、そのうち存留銀兩は、内在する錢納部分をも銀に換算しての數字であらうが大約六百萬兩。その比率はだいたい七對二である。この比率には年次による移動があり、とくに國初には後項の數字が大きめであつたけれども（二四一頁）、さればと言つてそれが、十對五以上にまでなつていたとは思えない。となると同じ三割でも、全體と部分とでは錢納部分の大きさがひどく違つてくる。二つの三割部分を一致させ、いな近似させることすら數學的には不可能である。

問題の題准と覆准と——それらの間の矛盾はしかし、見せかけほどに深刻なものではない。康熙二年、すなわち二成例の發布後五六年目に續修された『山東省荏平縣志』をみると（卷一、賦役）、そこにはまず、丁地存留の全數をあげて七千九百六十五兩九錢四分だとする。ついで搭錢せんとせんの

方法を述べて次のようにいつている。

文を奉ずるに銀七錢三もて徴支せよと。闔縣ぜんけんの地丁ならびに新增・潤耗・班匠および臨倉（臨清倉）改折、ともに銀二萬九千三百三十六兩九錢四分に照依し、每銀一兩につき、銀九錢一分八厘五毫を徴し、錢八十一文四毫を徴す。

この場合、銀・錢の比價はもちろん、法定どおりの銀一兩につき錢千文のわりである。全縣の地丁その他（といつても數的には「その他」は小さくて問題にならない）の徴收豫定額のうち千分の八十一・四を錢で納めさせると、二千三百八十八兩二分六釐となる。一方、丁地存留分の三割を計算すると、これも二千三百八十九兩九錢八分二釐。ほとんど完全に一致する。康熙五十四年の序をもつ『山東省日照縣志』ともなると、計算もできあがつていて一層はつきりしている。チャイニーズ・アキュラシーで、「兩」以下・「文」以下ともに十數位というのを程々に打ち切り、見やすいようにして、要所をそのまま摘録すれば次のとおりである（卷三、錢糧）。まず徴收關係。

以上丁地歸一。……實徵并新增共二萬八百二十五兩八

釐。内奉文。該徵銀二萬二百五十七兩八錢九分八釐。

該徵錢五百六十七串(貫)六百一十文五毫。

ついで存留支放分關係。

(1) 起運折色脚價——銀一百二十兩六錢二釐。

(2) 里甲夫馬・工料——該銀二百五十七兩七錢四分九釐。該錢一百一十串四百六十三文九毫。

(3) 官俸・役食・雜支——該銀一千六十六兩六錢七分五釐。該錢四百五十七串四十六文五毫。

存留支放分のうち、第一のものは銀建て一本の綱目であつて計算に關係はない。要するに、第二——(ついでながら、(2)の場合の里甲は、その本来の意味はともあれ、徐文弼のいわゆる「衝にはこれを驛站せきといい、僻にはこれを里甲りかという」⁽⁹⁾のそれであり、したがつて里甲夫馬・工料は後記の『會典』その他の文献の「驛站」經費に相當する)——および第三の銀建て部分の集計一千三百二十四兩四錢二分四釐と錢建て部分の集計五百六十七串五百一十文四毫(徵收分と約百文の差)との比率が——その綱目の立て方からみると、このばあい直接的には、康熙七年(一六六八)の覆准にいわゆる「存留・驛站(2)にあたる)・官役俸工・雜支等ノ項ハ俱

ニ銀七錢三ノ例ニ照ラシテ収放セヨ」に依據したのであらうが、ともかく七對三であつたのである。

けつきよく例の順治十四年の題准と覆准との間の矛盾は、題准の方の表現がすこし舌足らずであるために起こつたことであつて、より嚴密には、存留錢糧中の三割錢建て部分を確保する必要上、あらかじめ銀一兩についての銀錢搭配の割合を算出しておき、それによつて地丁その他の錢糧の徵收を行ふといふべきであつたのである。

存留(地丁)錢糧、すなわち地方留置き分の經費の銀七錢三徵支制はこのようにして實施された。しかし、初めからの目的である錢法の通融には、この程度の措置ではなかなか追つつかない。康熙十年にいたつて清廷は、錢建て徵支制の一だんの徹底をはかつた。すなわち、直省の存留錢糧は「數ニ照ラシテ錢ヲ収メ」させることにし、制錢を取めないものがあれば違制を以つて論じるといふ方針を明らかにしたのである。⁽¹⁰⁾この場合の「照數收錢」も實はすこしくあいまいな表現である。ただ、同じころ「鼓鑄の末議を敬陳するの疏」を上奏したと思われる姚文然は、年來、部中の錢法を疏通するのを見るに、存留錢糧をもつて一槩に

錢で収めて錢で放はなわせている。用心のほどは甚だ周で立法は甚だ善ろしいと言つてゐるし、また事實、康熙十二年および十七年の兩序をもつ『(山東省)萊陽縣志』によると、この縣では——當然その十年かその後まもなくの事でなければならぬが、存留項下の官俸・役食・里甲夫馬・雜支等に支出すべき項の共に徵銀二千六百四兩七錢四分にあたるべきものを、「鼓鑄を復せんことを請う等の事のため」の部文(戶部公文)を遵奉して俱に「錢」で収放することになつた。問題の一句が、全額を錢で収めよという意味であつたことは疑いない。當時はまだ地丁錢糧全額に對する存留分の比率の高めであつたところである。この新しい方式でいけば、その全額における銀納分と錢納分との比率は、問題の七對三はおろか、それをも上廻つて錢納分に優勢であつたのではないかと思う。少なくとも有りえたと思われ

る。

この新方式はしかし、いわば繪に描いたモチも同然であつて、實際にはほとんど行われなかつたらしい。一時的・地方的にはなるほど行われた。もしくは行われかけた。萊陽縣の場合がそうであつたし、また顧炎武が、かれと緣故

のふかい山東省の德州——(康熙初期から十年代にかけて屢々この地を訪れたばかりではなく、十二年には同州の州志を訂した)¹⁰¹——について、州の賦(の全額)¹⁰²二萬九千兩を實に「銀二錢八」の割りあい徴収したと傳えているのも、¹⁰⁴文獻の年次からいつて若干の疑問がないではないけれども、¹⁰⁵恐らく萊陽縣の場合と同じ時期のことではなかつたかと考えられる。のちの場合の銀二錢八は、錢糧全額についての比率としたら、あまりにも錢の方が大きすぎる。あるいは存留分のみの比率であつて、その場合の百パーセント錢建て徴収が困難なために、一步後退してこの程度に止めたのであつたかも知れぬが、ともかく時期的にはこのころの事態を傳えるものではなかつたかと思う。いずれにせよ、新方式の實施は、たとえ實施されたとしても一時的・地方的に止まつたものと見られる。

その最もよい證據に、かの萊陽縣では、存留分の全額錢納に關して、さつそくその實行の困難さをうつたえ出たのであつた。前引にすぐつづく記録によると、同縣は驛站の賠累の苦を敬陳して、議して「銀七錢三の舊制を酌復して」應付に便ならしめられんことを請い、「驛站關係の」里甲夫

馬銀の二百六十九兩七錢九分七釐だけは、銀七錢三によつて銀一百八十八兩八錢五分八釐・錢八十串九百（原文磨減）三十九文三毫を徴支し、これを除いて、官俸・役食・機支に支すべきの銀二千三百三十四兩八錢四分二釐を下剩（原文）そうという。下剩（あまつ）してどうしようと言うのか、原文では語尾がはつきりしないけれども、それは當然、これだけは全部錢建てで徴支しようという事であつたと見なければならぬ。實際はしかし、これさえ満足に行われなかつた。行う必要がなくなつたのである。續いて奉じた部文では、この部分をも銀七錢三によつて徴支し、銀一千六百三十四兩三錢八分九釐・錢七百串四百五十二文七毫とすることを認めるに至つたからである。けつきよく萊陽縣は、前二項（里甲等項と官俸等項）をあわせて、共に銀一千八百二十三兩二錢四分八釐と錢七百八十一串三百九十二文とを徴支することになつたが、しかも、その實際の徴収にあたつては、せんげん闔縣の民糧地丁ならびに増添本色時價など、ともに實徴の銀六萬三千二百五十八兩六錢八分五釐に照依して通融合盤（ひとまとめ）に計算し、花戸（納稅戸）の名下で、毎銀一兩について銀は九錢八分七釐を納め錢は二十二文三毫を納めさせたのであ

つた。數字に違いこそあれ、方式としては全くあの荏平縣の場合と一致する。銀七錢三の「舊制」はみごとに「酌復」されたのである。康熙十一・十二年のころ作られた『山東省沂州志』卷二、政事部、錢糧の項、「丁地存留」の見出しに注して「以下の支銷は文を奉じて俱に銀七錢三もて支給す」というものは、たまたまその酌復早々の制度を記録したものとすることができよう。

地方官への手引書としては最も有名なものの一つである、黃六鴻あらわす所の『福惠全書』は、康熙甲戌（三十三年）の自序のあるところから見ると、大たいその二三十年代の實情にもとづいて書かれたものと考えていい。この書のうちに、卷六・錢穀の部に「地丁搭錢」の一條があつて次のように説かれている。すなわち、地丁錢糧は、七分は銀を徴し、三分は錢を搭かえる。もともと國寶（制錢）を流通させようがために考えついたことであつて、制錢十文を紋銀一錢とした。しかも錢はただ存留項下で銀七錢三の割りあい支給し、「中央政府への」解款には用いない。だから徴収した錢は押しなべて支出の項となし、銀から換算して發給する。雜項稅課（關稅鹽課をも含むか）ともなると、いずれ

も起解されるものなので各處で大がいに銀を徴し、ただ地丁にばかりは錢を取めている云云と。地丁〔存留〕錢糧のいわゆる銀七錢三徴支制が、少なくとも制度としては、このころまでの間に一おうの安定性を獲得していたことを看取することができよう。

(b) 制錢徴支の無實化と銀納の一般化

制度としての安定性はしかし、必ずしも常にその實行性の保證にはならない。形式だおれで、とかく具文を事としがちであつた舊中國の官僚政治の場においては、ことさらそうである。問題はむしろ、その銀七錢三徴支制が制度どおり、額面どおりに實行されたかどうかであるが、この點に對する見とおしはすこぶる否定的である。

あとでどうなつたと言ふのでもない。初めからどの程度まで實行されたのか、からして大へん疑わしい。第一、康熙元——五年の間に錢法に關する上疏を行つた趙廷臣は、錢糧を徴収するからには、協餉と起解の正款とは銀を納めるのを除き、その餘の存留雜稅は銀七錢三をもつて収め、兵餉と俸工とも亦た銀七錢三で放えばよい。そうもしないで、兵役に散給するには錢をつかい、稅糧を徴収するには

錢をつかわないでは、どうしても錢法の能く行われるはずがあらうかと、事さらしく述べたてている。第二、顧炎武が山東省德州におけるすばらしい錢納の實績を指摘したのも、實は、省内の他邑がみな銀納を主としていたあいだの、稀少な特例として擧げ立てたものに過ぎない。第三、順治・康熙時代に作られた地方志、とくに今の問題の解決に寄與するところが多いはずの縣志の數は、必ずしも少なくない。銀七錢三徴支制がもし着實に行われたものだとするなら、それは當然、この重要な制度を遺漏なく記載しておいたものと考えねばならない。ところが實際において、その制度に觸れること『荏平縣志』のごとく『日照縣志』のごとく『萊陽縣志』のごときもの、さらには『沂州志』のごときものは、思つたよりも遙かに少ないようである。少なくとも私の見ることでできた範圍内では、四方志（山東に片寄つてゐるのは特徴的だが）はほぼ五部中の一部か四部中の一部といった程度の稀少例であつた。——これらを綜合して考えると銀七錢三徴支制は、その理由はどこにあつたにせよ、また、日照等の諸縣の見ごとすぎる算式を單なる机上の空論と決めてかかるのは酷に失するにもせよ、全

體としては、初めから餘り熱意をもつては實行されていなかったと見るのが本當ではないかと思う。

この見解はさらに、雍正期から乾隆期にかけての、つまり、銀七錢三微支制にとつては後續期の、地丁二錢納の實態を知ることによつても、一そう確かめられることであろう。

雍正七年（一七二九）十二月のことである。當時、廣東總督をしていた郝玉麟は、某人の條奏にもとづく天子の詰問に答えた奏摺中の一節でこういつている。「粵東では貿易行使にこそ銀錢並用ということが有るけれども、しかし花戸（納税戸）には、かつて錢をもつて櫃（收税箱）に赴いて糧（賦税）を納めたものがなく、州縣にも亦た、錢を収めて串票（受取傳票）を發給したものであることを聞かない」と。

あくる八年五月にはまた、廣西巡撫の金鉞が、制錢いかにして流通せしむべきやの方策を考えながら、本年はさし當り、火耗（附加税、後に詳説）を徴収するさい銀錢どちらを納めてもいい事にする（許令銀錢兼輸）。將來は錢糧の徴収にあつて、二錢以内のものは皆な制錢で完納することを許す。このようにすればおよそ錢糧（納付の義務）をもつた

ものは制錢を便とするようになり、そのうちに必ず雜錢（びた錢）をみて棄物とするように成るであらうと議奏した。

そのころ廣東および廣西の地方に、地丁二錢納の事例が全然なかつたか、絶無にちかいほど稀れであつたことは疑いのないところである。單に兩廣地方ばかりがそうであつた譯でもない。安徽巡撫の徐本は、同十一年六月に徵糧の事宜に關する上疏を行つたが、そのうちの一項でかれは、小民零星の戸にとつて銀で錢糧を完めることは、「稱収のさいの折耗が問題になりがちなので」便利でない。まず銀一錢以下というところは、毎分につき制錢十文を完めさせ、銀で出したいと願うものは聴いたらどうかと主張した。當時、銀が樂にハカリにかかるのは、一分から上のことであり、釐ともなればハカリにかかりにくかつた。二三釐から四五釐の値段の買物となると、その程度の銀では秤折の數にも足らないので、用銀の場所では日ごろ紛競がたえなかつたという。徐本はまさしく、元寶紋銀のもつこの缺陷を突いたわけであつたのである。こうして議論の根據こそちがえ、結論はほぼ同じであり、結論の暗示するものも從つて似ている。この地方でも納糧の事態は似たり寄つたりだ

つたと見られる。ことに注意すべきは、かれのこの上疏の趣旨が裁可されて、自後の納糧事情を、しかも全国的に規制すべき地丁_{じてい}納納に關する一定例ができ上つたことである。同年日付けの議准事例に、

零星の錢糧、一錢以下の小戸は、銀一分ごとに制錢十文を完め、銀一釐ごとに制錢一文を完む。大戸の一錢以下の尾欠_{はした}並びに拆封の短少_{たんせう}は、概して制錢を完納するを准し、「もつて用銀の折耗を免がれしむ」。

とあるものがそれである。そのご三年、乾隆元年（一七三六）にいたつてこの成例は、おりからの錢價の昂貴とこれを惡用しようとする官僚・書吏輩の魂膽に對處するため、錢糧の一錢以上にあるものは必ずしも勒_{むし}に錢を交_かめしめず、一錢以下のもののみ舊例に仍照して、銀・錢その自便を聽_{きこ}すというふう_にに補足された_{こと}。

ともあれ、全國がこの種の定例を必要としたことは、またやがて、地丁錢糧の錢納というものが、全国的に行われていなかつたか、行われていても稀少だつたことに對する反證でなければならぬまい。そう思つて見ると、雍正十一年定例に關する『皇朝文獻通考』の記事はかなり示唆的であ

る。「國初この年（順治十四年）において銀七錢三の例を定めた」に直ぐつづけて——原文はそうとう意味の取りにくいものだが、大體のところ、「そののち銀で交_かめようと錢で納めようと、どちらでも人民の便利なようにさせた。雍正十一年には復た、民間の正賦（すなわち地丁錢糧）がおおむね銀で交_かめられていたので、安徽巡撫の徐本が奏して准_{ゆる}されたのは云云」といつて居るらしいのがそれである。もしこの解釋にして誤りがなければ、さながらこれ、銀七錢三徵支制の敗北史の告白に外ならない。この一文のうち、「人民の便利なようにさせた」——これはもちろん、ある特定な時點においてそのような含みをもつ法令が發布された、という意味での歴史的な事實であつたとは考えられない。要するにそれは、雍正期において正賦がおおむね銀で交められていた事實を、祖父・成例の一つとしての銀七錢三制の面_{オモテ}子を顧慮しながら、すこしでも合理的に解釋するために設定された論理的なフィクションにしかすぎない。私にいわせるなら、銀七錢三徵支制のときは、「初めから餘り熱意をもつては實行されていなかつた」のであり、この制度の實施成績に關するグラフが、もし描けたとするなら、

順治から乾隆にかけてのそのグラフ線の動きは存外に平板で、傾斜や起伏も、ある事はもちろん有つたにせよ、そう大したものではなかつたと思われるのである。

康熙十年の存留錢糧の全額錢納制を、私はさきに繪に描いたモチも同然だといつた。しかしこう見てくると、その母體である銀七錢三徴支制からしてまた、ほとんど繪に描いたモチに近かつたのである。

(c) 「銀の通・錢の滯は吏の寶・民の賊なり」

地丁の錢納制は、では次に、なぜ十分な効果を収める事ができなかつたか。その原因はどこにあつたか。徴稅者ががわにか、納稅者ががわにか。

その原因、すくなくとも主たる原因が、納稅者の側にあつただろうとは思えない。ミドウスのいわゆる「反亂の權利」、セツパ詰つたときにだけしか使えないこの權利以外に、なんら權利らしい權利、權力らしい權力に恵まれておらず、さればといつて、抗糧運動ブヤドに身を投じるだけの氣力も才覚も持ち合わせていなかつた當時の最大多數の民衆のうちに、問題のグラフ線の動きを、すくなくとも大巾に動かすに足る力が潜んでいたであらうとは常識的にも考えら

れない。かれらはただ、かれらにとつては一種の自然法則にもちかい、銀¹錢比價變動の經濟法則則の前に一喜一憂し、錢が高ければ銀で納めんことを思い、銀が高ければ錢で納めんことを思い、しかも實際問題としては徴稅者側の得手勝手な希望に添うよりほか、少しも思うようには成らなかつたというのが實狀ではなかつたかと思う。その原因の主たるものは、やはり徴稅者、とくに直接的な徴稅擔當者としての地方官、わけても後に詳説するような親民官としての州縣官の側にあつたと見られる。結論的にいえば、州縣官たち——全官僚層の、時には私的な、時には公的な財務尖兵・財政調辦者としてのかれらたち(後説)の、「銀」に對する欲求の強さが最も問題なのである。

銀に對する彼らの欲求の強さ、異常なまでの欲求の強さについては、大別二つの理由が考えられる。(一) その一つは、銀のもつ、價值あるいは「富」の蓄積手段としての非常な優秀さである。銀がごく小さい日常的な買物の媒介物、つまり特定の場合の流通手段としては大きな缺點をもつていたこと、これは前にも觸れ(一一六頁)、また後にも述べようとするところである(一二三頁)。この點に關するかぎり、

錢の方がはるかに好い。ところが富の蓄積手段と言うことになる、銀は、錢糧の地方から中央への起運の場合や、民間の高額の取引きの場合と同様、錢に對して絶對的な優位にたつ。もちろん、その輕量高價性のためである。明清時代の大官たちが、金・銀、わけても現銀の形でどのような巨大な富を築きあげていたかは、すこしく極端な例かも知れぬが、明にあつては嚴嵩（?—一五六八）たち、清にあつては和坤（?—一七九九）たちなど、失脚によつて財産沒收の憂き目にあつた大官たちの、財産目録を一見すれば直ちに了解のいくところであろう。詳しくは説かない。(二) 理由のその二は、銀で徴収する方が、錢でする場合よりも附加税を取りやすい。同じ法外なことをするにしても、名目が立ちやすく、彼らの拘わりに拘わつていたメンツが餘り傷われず、また、いささか残つていた良心にも安堵感があったえられる、という事ではなかつたかと思う。山東省德州の錢糧事情を伝える例の顧炎武は、「錢には火耗（附加税）の加がない」ので、民力は他邑よりも樂であつた。德州の官が皆な賢く、里胥が皆な善人だという譯でもない。勢いがそうさせるのだと言つてゐる（「錢糧論」）。また、雍正

十一年の錢納關係の定例にあつても、銀一文ごとに錢十文を収めるが、その場合には「耗羨（附加税）は一處に内に含ませ（連耗羨在內）」——という表現はやや判りにくいけれども、實際的にはつまりは「火耗を加えない」のが原則であつた。要するに、銀で徴収する場合にかきつて火耗を取るのが當然視されていたのであつて、このことも何程かは、徴税者の心を銀の方に引きつけていたのではないかと思われるのである。

二つの理由のうちでも、より根本的なだけにヨリ重要であつたものは、いうまでもなく前者である。顧炎武は、これまで度々ひいてきた有名な「錢糧論（下）」のなかで、長老たちに聞くと、近代の貪吏は唐宋の時より倍して甚だしいと言う。というのも、錢は重くて運びにくく、銀は輕くて持ちやすい。運びにくければ少し取つただけで十分ということになり、持ちやすければ多く取つてもまだ足りないという事になるからであつて、唐宋の吏が多く廉で今の吏が貪だという譯でもない。勢がそうさせるのだといい、その論旨を「銀の通・錢の滯は吏の寶・民の賊なり」の一旬に要約してゐる。吏「貪」の責めを銀のもつ輕量高價性

——人の面ではなく物の面——にのみ歸しすぎた感じこそあれ、まことに見事な分析である。貪官汚吏といえども、一方ではもちろん、銀・錢比價の變動という純經濟的な事象にも無關心ではありえなかつた。雍正十一年の定例に對して、乾隆元年の補足が行われねばならなかつたのも（二一七頁）、つまりる所はかれらが、錢貴——ある程度（銀納の火耗の利を上廻る）以上の錢貴のさいには、出来るだけ多くを錢で納めさせ、それを後でおもむろに安い銀に換えがちであつた。それを防止しようとするものであつたこと疑いない。そしてこの種の錢貴に對する關心は、先刻のべたグラフ線の動きに、なにほどかの起伏をあたえる結果になつたものと見られる。しかしそれは決して、その線の動きを、傾斜角度の相において左右できるほど強烈なものではなかつた。なかつたように私は思う。それを左右したのは主として、銀の通・錢の滯を實とした、徵稅者がわの「銀」に對する異常なまでの欲求の強さであり、それがその線の動きの始點を初めから、本來おかれるべきであつた場所よりも押し下げて位置づけ、けつきよく、順治から乾隆初期にかけて緩やかな傾斜をしか描かせなかつたのではないかと考えら

れるのである。

近ごろ岩見宏氏は、明代における田賦丁徭の銀納制の起因を考え、これまでの説に反してこれを官僚たちの銀に對する欲求に歸している。面白い考えだとして敬意を表したい。私自身もかつて元代包銀制の起因をたずねて、「金末このかた銀が一番ふつうに貨幣として使われてきたという歴史的な與件を、〔貴金屬に對する欲望の激しかつた〕モンゴル支配者とこれに結びついた西域商人とが巧みに利用したところに成立したのだ」と解釋しておいた。『欲望』説だという點では、互いに相通じるものに外ならない。清初にあつても、錢糧の銀納制を精神的に支えていた支柱が、同時にその部分的な錢納制の實施を妨げる最大の要素になるということは、決して有りえぬ現象ではない。むしろ十分に有りうる現象であつたのである。

(d) 火耗銀兩——その技術的側面と稅務的側面

清初の錢糧、とくに地丁錢糧はこうして、その大部分が銀の形で徵收されていたのである。もし、あの康熙十年の存留地丁全額錢納制が忠實に實施されていたとしたなら、この「大部分」は大分あやしくなる。同二十四年の統計數

ですら銀七錢二の割りになるが(二一頁)、順治時代には銀七はそのままで、錢五か錢六ぐらいいまでなつていたはずである。そうなると餘り、銀での徴収が「大部分」だともいいかねるが、しかしその制度がほとんど實施されなかつたことは前述のとおり。せめて、銀七錢三徴支制だけでも完全に實施されていたとしたなら、錢での徴収は最大限度、全地丁錢糧中の十三・四パーセントぐらいいまで伸びていたかも知れない。しかしこれも初めから完全には實施されず、後にはすつかり崩れてきたことは、これまた前述のところ。けつきよく、地丁錢糧の九十數パーセントから、時によつては百パーセント近くまでが銀で收納されておつたと考えられるのである。

一口に銀といつても、明代および清初に使われた銀には二た通りのものがあつた。馬蹄形に地金を鑄固めたいわゆる元寶銀と、洋銀もしくは番銀、すなわち、明末以來ヨーロッパ人の手を経てシナに輸入された外國銀貨(初めはスペイン銀貨(本洋)、後にはメキシコ銀貨(鷹洋、墨銀))とである。それらのうちでも、直接、國家財政の収支の用にあてられていたのは元寶系の銀であつた。元寶銀の最良質のものを

足色紋銀という。

元寶銀はもちろん、いわゆる秤量貨幣であつて計數貨幣ではない。そこでその實際の使用に際しては、切つたり鑄^とかしたりする毎に、多かれ少なかれ折耗、すなわち目減りの發生するのを避けることができなかった。康熙前葉の人である靳輔は、このことに關して興味のある計算を試みている。そのころ、江蘇・浙江等の省には、あらゆる村鎮に絲布・紬・鹽を収買する行市があり、また全天下にわたつて鋪面^{みせ}を開張^はつているものがあつた。それらを合計すると、うてい數百萬家には止まらない。そこでは、僅かばかりの交易にこそ錢を使え、すこし大きくなると皆な銀をつかつた。さて、その用銀のとき、あるいは大きな銀塊を剪^きり碎き、あるいは碎いた塊片を傾鑄^{かたて}しこむ。銀一兩を鑄かすごとに必ず二三釐の目減りをうけ、また剪碎の目減りが加わる。およそ大行^{たいぎやう}・大鋪^{たいふ}ともなると、毎日の目減りが數錢になるものもあり、これに次ぐものには、毎日の目減りが一錢ばかりとか、あるいは數分、あるいは一分ばかり等々というのものもある。今しばらく、每家平均、毎日銀一分を目減りさせるとし、また天下の行・鋪をあわせて止^ただ一百萬

家ということにして計算しても、毎日の目減り銀は一萬兩。毎歳ではそれが三百餘萬兩になる——というのである。

まことに不經濟な話であつて、一面、計數にこまかいシナ人らしからぬ事ではあり、他面、銀、とくに秤量貨幣としての銀の、流通手段としての用途における缺陷を暴露したものであるが、しかもこの缺陷こそ、ある意味では、徵稅者たちにとつての奇貨おくべきの附け目であつた。かれらはこの避けがたい目減り、とくに、納付された碎銀を火鑄するさいにでる目減りの補償を納稅者に負わしめ、あまつさえ、その避けがたい目減りという尤も至極な名目に便乗、安んじてその職務にともなう私的な収益、つまり役得を逞しうすることができたのである。このさいの目減りを普通「火耗」という。

いわゆる火耗の歩合いを、靳輔は、銀一兩につき二三釐とみていた。千分の二もしくは三ということであり、技術的な歩止まりを非常に高く見ていたわけである。顧炎武はこれに對し、いわゆる「火」耗は特だ百の一二のみといつてゐる。そのすぐ前文に「一州縣の賦は繁いのに、戸々にしてこれを収め、銖々にしてこれを納める。しかし細瑣のま

までこれを司府に上ることができないので、火に資らざるを得ない。火にかけると必ず耗がある」とあることから考へると、これまた、技術的に避けがたい火耗を問題にしていたものであること疑いない。それにしても靳輔の所傳と餘りにも違いすぎるが、どちらが正しいのであろうか。自然科學畑の人の意見を叩いても、あまりはつきりした返答はえられなかつたが、ただ、乾隆元年に錢糧銀納に關する上疏を行つた趙弘恩は、そのうちでこんな事をいつてゐる。すなわち、各項の錢糧は例として足色紋銀で収めることになつてゐる。ただ江蘇省では、糧銀を納めたり解つたりするのに、雍正六七年間から始められたことだが、必ず凸心鏡面——たぶん凸レンズのことであらう——にかけ、紋がなければ方めて足色（十分）と稱うことにしている。足色紋銀を傾くのに較べると、ほかに毎兩一二分の耗折を加えねばならない。俸餉・工料等の項に支放されるに及んでは、一兩は相變らず一兩の用に立つだけだ。むだだから凸レンズは止めてほしいという譯で、許可されたが、ともかくここでの一二分の耗折（折耗）から類推して考えるかぎり、今の場合にはやはり顧炎武説に理があるのではないかと思う。

斬輔は一ケタ勘ちがいでいたのかも知れない。

百分の一二、ないしは二三の技術的な折耗に便乗して、税務的には、どの程度の火耗が収納されておつたのであろうか。乾隆帝は火耗（耗羨）の實態についてこういう分析を行つてゐる。向來は州縣が錢糧を徴収する場合、銀色には傾銷の耗折（めくり）があり、解送には路途の盤費がある。そこで正項の外に火耗を徴収し、もともと定額はなかつたのだと。さきに「税務的」というのは、要するに第一次的にはその現銀運送の費用を見こみ、以下、第二次的・第三次的といろいろな費用を見こんでの収納のことなのだが、それが一體どの程度のものであつたかというわけである。

『六部成語註解』には、火耗銀のことを説明して、「碎けた〔銀〕錠を火にかけて鎔化すると、必ず銷耗がでる。例として徴取の時には兩ごとに二三分を加徴してこれに抵（あ）てて名づけて火耗という」と言つてゐる（『戸部成語』）。あたかも百分の二三がその税務的な収納分であつたような言い廻しだが、しかしこれではいかにも少なすぎる。これはやはり技術的なというか、銀匠（ぎんしょう）などの費用を加えた實質的な折耗の意味ではなかつたかと察せられる。もつとも、その實費

的な折耗部分のみを、税務的に収納して、補償にあてるといふ言わば眞ッ正直なやり方も、稀少な事例、むしろ原則的な方針としては全然なかつた譯ではないらしいけれども（後文一三六頁）。ただ一般的にみて、現實的な税務的収納のさいには、くわしくは後説のとおり、すくないところで毎兩につき五六分、もつとも常識的なところで加一（すなわち一割）といつて一錢かその前後、ひどい場合には加五すなわち五錢の火耗の附加が納税者に義務づけられ、もしくは強制されていたのである。これだけでも——というのは、州縣が錢糧を徴収する時には、えてしてオマケがつき、表向きの火耗は毎兩につき加一といつても、その實、戥頭（ていとう）とか併封（こまぎ）とか零星した附加分を合算すると、たちまち一錢三四分前後にはなり兼ねなかつたからだ——すでに技術的な必要額の二倍から二十倍ぐらいに相當する。

錢糧徴収の際のいわゆる火耗以外のオマケには、彈兎（はりふけ）の操作上ほとんど不可避的なものと、やや意識的な作爲の結果めいたものがあつたようである。戥頭・併封（二二六頁）ないしは併頭・平頭（二二六頁）・秤戥・併戥（二六三頁・二二一頁）・秤頭・掛平・敲平などと言われたものは、おそらく

はどれも同じものであつたか、違つてはいても大體は似たり寄つたりのものであつて、前者に屬していたものと思われる。例えば併頭について、雍正年間、山西省では民間が錢糧を完納するのに、何兩きつぱりという整數で完納するものは少なく、あるいは數錢、あるいは數分と零星に上納するものが多い。州縣は〔納稅戶のみナから封じた錢糧の〕封を拆いて、數十駄の秤収をもつて併せて百兩一平の彈兌とする。そのうちには、多餘なものも無くはない。これを「併頭」というが、これはもとより額外の加耗ではない。また駄を重くして秤収した結果でもない。零収めて總兌つたため自然にできた贏餘なのだというのが、よくその實態を説明しているであろう。要するに「積餘」ものなのであるが、前記、山西省の場合は、火耗のほかに銀百兩ごとに二兩の併頭の餘出があつたという。それらのほか——當時の用語では何と言つたか、ともかく、ハカリ差の補正分、その他これに類する附加分の徵収も、度量衡制に統一なく、銀地金の鑄造についても必ずしもはつきりした基準のなかつた往時のシナでは、程度の多少はともあれ、ほとんど不可避なことであつた。例えばこうである。すな

わち、民間からの完糧は皆がみな足色でというわけにも行かない。用つているのは俱に市の駄だ。これを紋銀・庫平に較べ、さらに火工の折耗をみこむと、民間の市駄・色銀(成色不足の低質銀)で庫平の一兩を完めようとする者からは、火耗銀の一錢七八分ももらねば引きあわなかつたのである。同様のハカリ差のため、表向きが加一三の火耗がともすると加二にも達しかねないでいた例も傳えられている(二二頁)。

併頭・ハカリ差などのほかに、「平餘」とか「餘平」「平銀」とかいわれるオマケ分もあつた。これなどが先に、「やや意識的な作爲の結果めいたもの」と言つたその部類に屬するが、要するに収放の間に軽く出して重く入れる——重をもつて入れるものを「収兌の餘」とし、輕をもつて出だすものを「支放の餘」といい、例えば山東省では、暗に庫官をしてその手を高下させ、每平(秤)「百兩」につき七八錢を多含させて平餘の數に符合させたというのがそれである。もつとも、雍正二年十一月九日の河南布政使「田文鏡の奏摺によると、各州縣の「拆解錢糧碎封歸併平餘」は大州縣で毎年約一千餘兩あり、小州縣でも亦た數百餘金あつ

たという。カッコ内の十字は讀解しにくいが、だいたい、錢糧を拆ひくいて司庫おくらに解おとれるようにするため、封を碎くだいて零細な尾數を歸併する際にできる「平餘」、という意味ではなかつたかと思う。だとすれば、平餘はまた、先述の併頭などと同じ意味に使われることもあつたと考えねばなるまい。いすれにしても餘平あるいは平銀は、雍正帝によると、大約、「耗羨」の項下から出ていたものであつたという（『實錄』一〇〇、八年十一月戊子）。

ここに例示した各種のオマケ分のうち、ハカリ差の場合は、その部分が明示こそなければ、疑いもなく火耗のなかに繰りこまれている。その他の場合についても、記録上、こうした類例がないではないかも知れない、ただ實際問題として、それらを識別し出すことは必ずしも容易ではない。また特に「火耗加二・加三」などと整數でいわれる場合は、語調からいつて通例、狹義の火耗のみを指したものとみられる。これからの行文でも、特別の指示のないかぎり、火耗は、そのオマケ分を含まぬ狭い意味でのものだと理解していただきたいと思う。⁴⁰

さて、同じ附加税としての火耗でも、ある一定の常識的

な限界を越えるものは「重耗」であり、重耗の強制徴収はさすがにいつの場合でも罪惡視された。魏象樞・湯斌など順治・康熙時代の大臣たちは、口裏を合わせたように、「私派」、すなわち勝手な名目を作つてその費用を民間に派わりあてることや、「勒詐」もしくは勒索、すなわち犯罪とか訴訟事をタネにして民間から財物を捲きあげることともに、いわゆる火耗を、財政經理の上での三大弊の一つに算えあげている。⁴¹ いわば罪惡視している。しかしこれなども要するに、一兩につき、一錢五六分とか四錢・五錢といった重耗を問題としているに過ぎない。普通程度の火耗は、法制的にはともかく（後説一三七頁）、すくなくとも習慣的には、取るべくして取り納むべくして納めるものになつていたのである。

地丁銀の姉妹税、つまり賦税の物納形態である漕糧——この漕糧の運搬と倉積みに際しても、ネズミやスズメによるある程度の目減りを避けることができなかった。中國では、賦税の本格的な銀納制の始まる明代以前から、この種の目減りに對し、またその目減りを名目にして、やはり加一程度の耗米が當然のことのようにして取り立てられ、

これを鼠耗・鼠雀耗あるいは雀鼠耗といつていたが、明代以後の火耗は明らかにその鼠耗の精神をおそい繼ぐものだと言ふことができる。

(e) 火耗羨餘すなわち耗羨の種別

火耗は、また耗羨ともいわれる。この耗羨は——清代の『實錄』や『硃批諭旨』を讀んでいると、時おりながら「火耗羨餘」という四字が相接して出てくるし、ことには鄂爾泰（六年六月十二日）のように、一方では「糧條の火耗」と「稅秋（夏稅秋糧）の羨餘」とに分けて書きつつ、他方ではこれを「糧條・稅秋の耗羨」とまとめている例もあることから、火耗・羨餘が一つに短縮されたものだともて恐らく誤りはあるまい。羨餘は贏餘・盈餘と同じくアマリである。清代の使用例について考えると、(a) 正項以外の、もしくは定額以上の収入を指したこともあり、(b) 定額支出項目の使い残しをそう言つたこともあるが、要するにアマリを意味する。歴史的には、唐の中葉、もとより當時の財政的危機に對處するためであらう。羨餘賞格を立ててアマリの多きを競わせてから、財政用語のうちに羨餘の一語が導入されてきた模様である。「錢糧論」での顧炎武はこの「羨

餘」の用法をやや限定し、州縣の徵收したあらゆる附加税部分のうちで、けつきよく節使（總督・巡撫）に貢がれたものを「常例」というに對して、直せつ藩司（布政使司）に解られた物だけをそのよゝに呼んでいる。火耗と熟して「耗羨」を成立させた羨餘は、當然この場合のように限定された意味での羨餘でなければならぬ。ただ漠然たるアマリではなく。順治末期に山西省臨汾縣の署令をしていた張光烈に關し、四大害の除去中の第一件として「火耗の重きこと正銀に半ばす。君ごとく羨餘を革む」といわれるものが、正しくそれに當る。結局このようにして、清代には火耗と耗羨とが全くおなじ意味に使われ、例えば加一火耗を加一耗羨と言いなおし、全提火耗を全提耗羨と書き改めても、その含意をそこなう心配は少しもなかつたのである。年別にいうと、ごく大まかな見當では、康熙時代まではより多く火耗の字面が使われ、雍正時代以後は、より好んで耗羨のそれが用いられたように思う。

火耗もしくは耗羨は、くり返すまでもなく、銀の形でする税課の收納にともなう附加税部分であつた。當然、地丁錢糧以外のあらゆる銀納税課についても、その伴隨が推

測されるはずであり、また事實、地丁につぐ大きな税種であつた鹽課や關稅にもそれらのあつた事が認められる。手近かにある史料をみても、例えば署扶風縣（陝西）知縣の陳恭が、「鹽課の耗羨」すなわち「火耗」を徵收するに重きと加三にいたつたといわれ、また、廣東省の太平「關」には加一の「火耗」、粵海關には加二の火耗が計有えられるが、從來は羨餘の内にはいつていなかった、などと言われているのが皆それである。とくに關稅の場合、正額とそれに對する贏餘とのほかに、別に火耗その他の雜項が加わつてゐるのは興味が深い（後説）。そのほか、地丁などのいわゆる正項・正銀に對して、雜項・雜賦・雜派などと一括されがちであつた、典當稅・契稅・牙帖稅以下の雜多な税目についても事態は同様であつた。それどころか、人々の耳目の及びがたい雜賦においては、附加稅のかけ方が時あつてか法外にひどく、正賦では十の二三だというのに、雜賦ではともすると十の七八にいたるという有様であつたことは、顧炎武のつとに指摘するところである。

にもかかわらず、その元稅の清朝財政において占めていた比重の大きさのゆえに、また従つて、その火耗によつて

生計を左右されたであろう官僚・胥吏層の巾の廣さのゆえに、あらゆる火耗・あらゆる耗羨のうちでも、清朝史の理解に對してとくに重大な關係をもつものは、依然として地丁錢糧の徵收にともなうそれらであつた。

* * *

私のこの「耗羨提解の研究」は、雍正帝の斷行した、主として——というのは、雜項錢糧のそれも提解分に加わつていたらしいからだ——地丁錢糧に伴なう耗羨の布政司庫への提解、そのものもつ意義をとくに精神史的な場において捕えようとする試みである。いやしくも歴史學的な試論なのである。事實はあくまで正確に緻密に捕えられねばならぬが、しかし私にとつて、事實はまたあくまで素材にすぎない。その事實、それらの事實が、精神史的な場においていかなる關係を保ちつつ、いかなる形で位置づけらるべきかが最大の關心事なのである。以下、そのような氣持で史料を整理していくことにしよう。

なお、この試論では、私は問題の範圍を加耗の客體としての耗羨、それも地丁錢糧の耗羨のことと官僚對象の給與體系のこととに限り、前述のような地丁以外の諸稅課に伴な

う耗羨的なものや、そのほか、加耗以外の官吏の利藪であつた私派・勒詐や、民の賊たる點では官僚に劣らなかつた胥吏・衙役のことなどには深入りすることを避けた。論旨の簡明を期せんがためである。しかしその反面、本文中に論及される官僚の収入や民衆の負擔については、それらが多かれ少なかれ、實際にあつたよりは内輪に見積られてゐるものであることを、あらかじめ注意しておきたい。

二 康熙期——州縣官の耗羨の私収

(a) 親民官即ち州縣官における公と私

耗羨の提解に關する雍正期およびその前後の記録を読みあさる時、われわれが直ぐ、しかも非常に強烈に印象づけられるのは、そこに見られる、というよりは感じとられる、鮮やかとも鮮やかすぎるような公と私との對照である。

「私」の方はただし、前述の「私」派(二五頁)のためにお株を奪われたせいもあつたのか、字づらとしてそう餘計に現われて来るわけではない。とくに康熙期にあつては、表むき「公」が問題にされなかつた程度において、「私」も問題にならなかつたのかも知れない。ただ、かつて康熙帝

の治世中には、火耗もしくは耗羨が州縣官たちの全く「私」的な収入となつており、少なくとも、社會通念として「私」物あつかいできるものだと考えられていた事實が、「事實」として繰り返えし報道されているのである。例えば、當の提解政策の立役者の一人である高成齡は、直省の錢糧には、正供の外に向きには耗羨があつた。多寡は同じでないけれども、皆な州縣官が入己してゐた。⁽¹⁾つまり自分の懐にねこんでいたと言ひ、また、そのころの某氏の言ひ分でも、耗羨は州縣官の應に得べきもの——權利として當然私物視できる金額であつた。さかのぼつて、康熙の中ごろ甘肅省肅寧縣の令をしてゐた黃世發については、公はちつとも民財を取りこまなかつた。ただ錢糧には舊例で加一二の耗銀があり、公も亦たこれを「収めはした」が自分の用には使わなかつた、⁽²⁾といつてその良官ぶりを讃えた文獻がある。その少し前、山西省武強縣の令をつとめた官朝京の傳記にも、當時の州縣官たちは、みな耗羨を自分の物だと考へていたことを記している。⁽³⁾これらのほか、類例は枚舉にいとまがない。乾隆初期の提解主義者・錢陳羣の言葉を借りるなら、要するに「康熙年間の耗羨は州縣〔官〕が私徴し」「官

より取つて官がこれを主どり司農(戸部)の會計には入れなかつた⁽⁴⁾のである。このような形で初めて字づらとしても私の字が出てくる。

「公」の方は、字面からして出かたが極めて頻繁である。公の觀念が薄かつたか、たとえ薄くはなかつたとしても潜在していたかのように思える康熙期にあつてはともかく、耗羨提解の氣運の動きだした雍正初年以後にもなると實によく出てくる。第一、耗羨の提解という事務的な言葉自体が、もちろんその政治的・社會的な意義を強調するためだが、ほとんど常に耗羨の「歸公」——「公に歸えす」と呼びかえられていたし、歸公の縁語にいたつては、充公・備公・辦公・公事・公務・公用・公費・公項・以公完公・以公濟公……と切りがない。耗羨の提解は文獻上、いつでもこれらの熟字によつて説得され、辯護され、解釋され、誇示され、時には修飾されていた。事例はこれから幾らでも出てくることであつて、ここで一々引證する必要はない。いうまでもなく、こうやたらに「公」の字が使われたのは、提解以前の事態を「私」と特徴づけて觀念したことに對する、あるいは、したことに於ける反定立的な現象だつたの

である。しかもこのことを今日もつとも克明に傳えているのは、皮肉にも、ある「歸官」主義者すなわち「歸公」の反對論者——これまた乾隆初期の提解・歸公主義者の一人であつた、御史・趙青藜の引き合いに出している彼の反對者側の言葉である。この御史はいう。

歸官の説をなす者は謂えらく、「公を以つて公を濟うには、上の人をしてこの一布置を多からしむ。私を以つて私に還えし、官吏をして自からこれが通融を爲さしむるは如何」と。これ亦た明主(乾隆帝)の聽を動かすには足らん。

と。簡単にいえば、お上は手間どれなことをしないで、官吏の好きなようにさせて置いたらどうかという反對者側の議論なのである。官立大學と私立高校——そういつた用法に慣れているわれわれ、この場合の歸官の「官」には、まどいを感じざるを得ないが、これは要するに「州縣官個人」の言ひにはかならない。「歸官」はけつきよく「歸私」と一致すべきものであつたのである。康熙帝がその晩年、火耗の入己を(州縣官の)「私事」として黙認していたことも注意されねばならない(一五八頁)。

州縣官における公と私、とだけいうと事は簡單なようだが、しかしこの問題をとくに「公」の面から少し丹念に掘り下げていくと、直接にはそのころ、別して雍正乾隆の人の抱いていた財政的觀念の中心的なものに突きあたり、間接にはさらに、當時における國家社會の組成の根本的な原理にまで到達できるのではないかと思う。くわしいことは以下必要に應じて隨時に論及するところ(例えば頁二〇・二一〇七頁等)にゆずり、いまは簡單にその要領をいうなら、全天下の財政的經費は、特殊な意味をもつ内廷の經費をのぞけば大別して二つに分かれる。「國家」の公務のために用うべき經費と、「地方」あるいは本地の公務のために用うべき經費とである。兩者は概念的にはつきりと區別される。(この場合の國家と地方との對比は、現時のわが國における國家公務員と地方公務員の場合のそのような、同一「國家」における官廳的なものと自治體的なものとを現わすいわば便宜的なものとは似て非なもので、同一「天下」⁽⁶⁾における王朝的なものと、民間的なものを現わす本質的な對比である)。財源的にも、前者にはいわゆる正項錢糧(「とくらかの雜項錢糧」と)が充當され、後者にはいわゆる公項錢糧(「と

とくらかの雜項錢糧」と)が充當される。公項はやがて耗羨である。けつきよく、今の場合の州縣官における公と私というのは、その耗羨を公項として地方の經費に提出するか、それとも私項としてポケットにねじこむかという、その間のけじめ以外の何物でもなかつたのである。

シナには昔から「親民の官」という考え方があつた。人によつてはいわゆる親民官のうちに知府をも加え、「國家」とともにこの民を理^{おさ}める者には、外にしては總督・巡撫・布政司・道臺・府・州・縣等の官がある、……しかし民と最も親しいものとなると、知府・知州・知縣にこえる者が⁽⁷⁾ない、などと言つてゐる例もないではない。普通はしかし、州縣の上級監督機關である知府を除いて、知縣と知州および——一面、その責めは知府に同じといわれつつも、他面、直隸各州には尙^なな承督・盤查・「親民」の責めがあるといわれた、直隸州の知州とを親民官だとしてゐる。

順天等の八府をもつて六部に直隸し、各省には布政使司を設けてもつて府・州・縣を統ぶ。州・縣は俱に府に隸し、縣は或いは州に隸し、州はあるいは省に直隸す(『康熙會典』戸部二、州縣一)。

この行政機構における州・縣および直隸州を、最も民に親切な官と規定しようとするものに外ならない。事實、これらの州縣官こそは、當時の知識人たちのいわゆる「國家」の、民衆に對する最先端の窓口業務者だつたのであり、その反面、「人民百中の九十に對しては知縣〔知州〕が即ち政府」⁽¹⁰⁾のわけでもあつたのである。必ずしも地位の高さ低さだけからではなく、地位的に縣より低いものでも、例えば司や府の首領官・各學の教職、ならびに巡檢・驛丞・稅大使・司獄などの雜職はけつして親民の官とは呼ばれない⁽¹¹⁾。

ある官職が親民官であるためには、民衆との接觸のしかたが何より問題であつた。知縣の職分については『清國行政法』(卷一下)はこれを、裁判・檢屍・租稅の徵收・警察および監獄・公共建物の營繕・教育および試験・賑恤の七種に分類してゐる。しかしそれらのうちでも最も重要なものは、あたかもそれらだけが彼らの職責だといわなければかりに、しばしば——『殊批諭旨』などには一々例示するまでもないくらい、しばしば、それらだけの對⁽¹²⁾の形で出てくる刑名と穀錢、すなわち詞訟の審理(裁判)と錢糧の徵比(租稅の徵收)とであつた。これらはそれぞれ、一省中の實際的政

務を分擔する按察・布政兩司の職につながりを持つ。重要さにおいては、それらが、彼ら州縣官の職分の一切であつたといつても過言ではなく、知府の一官のごときも、「屬縣の錢穀・刑名を統理するの責」⁽¹³⁾にあつたればこそその民牧であつたのであり、地方官には附き物の幕僚についても、書啓先生(書面代筆者)や教讀先生(子弟の家庭教師)など是有つても無くてもよし、刑名先生と錢穀先生とは「必ず一人ずつを要する」とされていたゆえんに外ならない⁽¹⁴⁾。州縣官が親民官——少なくとも一義的な親民官だといわれたのは、これらの二つの重要事務、なかんずく、各州縣の繁と簡とは惟だ錢糧・耗羨の多いか寡ないかにあるとまで考えられていた、その錢糧(とくに地丁錢糧)の徵比を直接手がけるべき「國家」の窓口業務者だつたために外ならない。バイロンプレナンのいわゆる「知縣は政府の單位なり、總て官僚制度の脊骨なり」⁽¹⁵⁾。この命題の成りたちうる眞の理由もまたここに在つたことは、いずれ説くに從つて明らかになつて來るであらう(とくに一八〇頁)。

民に最も親しいとか、刑名・錢糧事務を直接手がけるとは言つたが、しかし嚴密にいうとこれは必ずしも正しくな

い。

州縣官が民の父母としてこれと最も親切な關係にあるべきことは、確かに一つの理想ではあつた。ただ、現實は必ずしも理想と一致せず、多くの場合それとは懸けはなれ勝ちである。昔のシナの州縣官の場合もこの例にもれない。

この場合の官と民との直接を妨げていた要因としては、官の側には佐貳雜職（知州・知縣の下役）——（制度上、かれらが民間の詞訟を受理することは禁じられていたが、しかし實際上は、かれらも詞訟に干與し、これをタネにして任意に需索を行つていたことが傳えられている）——や、よく知られているような書吏・衙役（雇員・傭人）の介入があり、民の側についてもまた、極めてふつうに見られたらしい包攬（請負）者の存在を指摘することができ。包攬の現象は、べつに一章節を立てて考究してみてもよいほど舊シナの政治社會に特徴的なことの一つだが、ごく簡単にいえば要するに、文生員・武生員をはじめとする知識階層の一部、それ以外の地方の顔役、ないしは無頼のヤクザと何ら擇ぶところのない純職業的、もしくは半職業的な口入れ手が、無智で人のよい民衆を官もしくは官の媒介者に仲介しなが

ら、隙きさえあれば民を痛ぶり官を威かし、途中でたつぶり甘い汁を吸おうという譯のものであつたのである。康熙年間、湖南省湘鄉縣の縣令であつた周廷鳳は、耗羨と冗役とを革めて、訟者をして自から勾攝し相わけ、輸稅者をして自から兌（強兌）らしめたという。これはもちろん、直接的には書吏・衙役の利藪を塞ごうとしたのであつて、包攬者の動きを問題にしたのではない。ただ、書役たちの利藪はまたやがて包攬者たちの利藪だつたはずだし、もつと端的に書役すなわちこれ包攬者、たとえば詞訟包攬の専門家ともいうべき訟師・訟棍が、存外、各衙門の書役だつたというような事例も少なくなかつたと見える。けつきよく、いわゆる包攬者たちの最良・最大の活躍舞臺は——他の諸例から歸納した結果も同じなのだが、ここに見られるような、訴訟者と輸稅者のうごめく「刑名」と「錢糧」との世界にあつて存したのである。

州縣官はこうして、嚴密には決して、刑名・錢糧の事務を一から十まで直接手がけたわけではなかつたけれども、常識的な意味では依然として親民官であり、「國家」の民衆に對する最先端の窓口業務者であつた。そして彼らの二つ

の重要業務の中でも、國家の彼らに期待するところ最も大きく、彼ら自身も最も身を打ちこんでいたものは、先ほども少し觸れておいたように錢糧の徵收であつた。くどいようだが、この最後の點に關してもう一度、乾隆二年における内閣學士・凌如煥の發言に耳を傾けることにしよう。かれはいう。今の州縣官にその「所管の」錢糧のことを質問してみると、知らぬ者はない。錢糧の徵比には火耗の利益があるからに過ぎない。その「所管の」刑名のことを質問してみると、間々知つてゐるものもある。欽部の案件には遲誤の處分があるからに過ぎない。その教化の通塞を視てみると、もはや身家に利もなく、また功令に礙るといふこともないので、ぼんやりと復た意に留めないでゐるものが十に八九だ。よく清初の州縣官氣質を、平均人の姿において捕えたものだといふ事ができよう。

「耗羨提解の研究」については、そのように州縣官たちの強い欲求の對象であつた火耗が——もし禁令がゆきとどいてその物自體が無かつたのであれば止む、有つたかきりの話——私項としてかれらのポケットにねじこまれたか、それとも公項として地方の經費に提出されたか、そのどち

らであつたと言う基本的な事實を前提したうえ、そこに見られる、鮮やかとも鮮やかすぎるような公と私との對照を主軸にして論旨を展開していく以外に、他により適當な道もありえないように私は思う。

(b) 順治帝の滿人的善意と火耗の禁斷

火耗を州縣官の私項視したのは、清初順治時代以來の現象だつたという見方がある。「耗羨の名は何時に起つたかを知らぬが、わが朝では鼎を〔北京に〕定めると〔これを〕官に歸したので、民はその弊に勝えなかつた」という彭端淑の場合は明らかにそうだし、「本朝の定鼎してより後、耗羨の一項は尙おその舊を存した」という錢陳羣の場合も、本人としてはその積りであつたに違いない。

この見方は、少しは正しいけれども大きな所で間違つてゐる。事實として、國初にも州縣官による火耗の私徵入己の行われたことは否定しがたいようだが、しかし今の場合より大切なことは、入關早々の氣鋭な清朝が、明代以來のあらゆる弊政の改革に乗りだし、火耗についても私徵入己をゆるすどころか、火耗制その者の存在をすら許そうとしなかつた點であつて、彭・錢兩人はこの點を全く無視して

いるからである。歴史家ではなし、乾隆期の發言ではあり、無視して間違つたところでどうという譯でもないけれども、(この點さすがに、王慶雲(道光九年進士)の『熙朝紀政(『石渠餘記』)の「紀耗羨歸公」の記事にはソツがない。全般的にみてもこの記事は、在來あつたもののうちでは最もすぐれた耗羨歸公小史である)。

攝政王・睿親王ドルゴンに率いられた清の大軍が、北シナ——流賊李自成によつて明國を滅されたばかりの北シナを目ざして、降將・吳三桂の手引きを受けながら易々と山海關を越えたのは、順治元年(一六四四)四月二十二日のことであつた。睿親王の師は行く行く直隸省の北部を撫定し、五月二日に朝陽門から北京にはいつた。明の文武故官の城外に出て王の師をねぎらうものが少なくない。なかには、(香を焚き生花を瓶に挿して敬意を表するものもあつたと言われる。王はそこで武英殿に入り帝坐に陞つて假りに朝賀を受けた。越えて一日、王は令を下して崇禎帝のために服喪すること三日、もつて輿情を展べたのであつた。この歳の九月、瀋陽にいた幼帝の世祖は都を北京に遷し、翌十月一日をもつて、長えに中國に君臨せんことを布告したので

ある。^四江南の平定はほ成るを見きわめた清朝が、それまで便宜的に、採否とも民衆の氣ままにせさせていたマンシユウ風の辮髮——漢人の多數が「頭」よりも「髮」をと、命にかけて嫌いぬいていた剃頭辮髮の令を強行したのは、あけて順治二年のことであつた。

この間、元年七月十六日(壬寅)には、去就向背いずれとも決しかねていた中國民衆の前に、明末弊政中の尤物たる加派の廢止という大方針が明らかにされた。「前朝の弊政ともなると、民を厲しいたぐることも最も甚だしかつたのは遼餉の加派に如くものはない。ために民が窮して盜が起ると復た勦餉を加え、さらに各邊の抽練のために復た練餉を加えた。これらの三餉は正供に數倍したと思われ、小民を苦累……すること、遠きは二十餘年、近きは十餘年である。……さらに糧料(米・豆)の召買があり、名は當官平市やくしてかゝいれであつたが實は計畝加徴であつた」というわけで、順治元年を始めとして、凡そ正額の外の、それら一切の加派を盡く蠲免してやる事になつたのである(『實錄』六)。新らしい徴税の基準は萬曆初年(一五七三)の會計錄の規定に求められたといわれる。ヌルハチ(清太祖)マンシユウ國の勃興・後金國の發

展によつていわゆる遼餉、すなわち遼東（滿洲）問題處理のための兵餉等の、加派を必要としなかつた以前の狀態に引き戻そうとしたものに外なるまい。新主・清朝のこの加派排除の大方針が、當時の人心を收攬するのに最も力あつたであろう事は、名著『清朝全史』の著者とともにこれを信ぜざるを得ない。

加派の排除令は、直接には、二三の漢人ブレーンの獻策に刺戟されて出されたものと見られる。しかもその發令のほぼ一週日前、月の八日に、そうしたブレーンの一人と攝政王ドルゴンとの間に交わされた錢糧徵收に關する應酬は、今われわれの問題にしている「火耗」をめぐる、實に鮮やかに、漢人的な物の考え方と滿人的なそれとの對照を浮きぼりにしている。

天津總督『駱養性』啓して、明季の加派の錢糧を豁免し、ただ正額ならびに火耗のみを徴せんことを請う。攝政^{ホシノ}和碩^ノ睿親王 報じて曰く、「官吏^{トウシ} 賊^ニを犯さば、實を審して斬^罪を論^告」せんこと、前諭に甚だ明らかなり。啓するところの、錢糧の徵納に毎兩 火耗三分とは、正しく是れ貪婪の積弊なり。何をか舊例と云

うや。況んや正賦をすら尙お且つ酌蠲す。額外あに多取するを容^{ゆる}さんや。嚴しく禁革を行^しわ著め、もし禁に違つて耗を加うれば、即ち^{ただ}に犯^ニ賊をもつて論ぜよ」。これが『實錄（卷六）』にみえる、その應酬に關する記事の全部なのである。

この應酬においては、片や駱養性は老成した民族社會の良識と如才無さとを代辯し、片や睿親王は若々しい民族社會の善意と嚴格さとを代表している。後者はとくに、小民に對する善意と不正や惡に對する嚴しさとなのである。

周知のごとく、シナでは古來なん度となく、王朝の交替、いわゆる革命が行われてきた。多少例外も無いではないけれども、それらの革命の大部分は、つみ重ねられてきた國內的な諸矛盾の總決算としての意味でもつて現象したものであつた。あらゆる前朝末期の弊政は、新朝の成立とともに一掃され、少なくとも一掃しようとして懸けられるのが常であり、中には唐初のように道^オ・遺^オちたるを拾^オわぬ肅然たる政治——（近時の中國共產黨の革命は、從前のそれとはかなり性質を異にしてはいるが、それにしてもそれは、歴史的な過去においても、革命の結果として「肅然たる政治」

の出現しえたであろう可能性を、われわれに實感させた)

——を實現したことも無いではなかつた。このようにして明朝の命を革めるものは、たとえそれが李自成その他の漢人であつたとしても、彼らがその政權の長久を期するためには、彼らは彼らなりに明末の弊政を肅正せざるを得なかつたであらう。ただその際における彼らの良識には、民族社會の歴史によつて規定された自ずからなる限界があつた。今の場合その限界を代辯したのが駱養性であつて、稅務についていえば、「止だ正額ならびに火耗のみを徵收する」

——それが、彼もしくは彼らの考えつき得るギリギリの限界であつたのである。この場合の火耗は——率的には、もしこれが實徴のものなら、『福惠全書』に毎兩三分・五分というもの(一五一頁)とともに、ほとんど最低の實徴率だが(前文一二三頁)——「贓」と結びつけられているのも明らかとなり、私徴入己を認められていたそれに外ならない。いうまでもなく、これまた明代に行われた遺習の一つであつた。明代の火耗は、地方官より之を官家に輸し又は之を私藏に充てその制一でなかつたといわれるが、明末にあつてそれが私藏されていたことは疑いない。

一方、マンシュウ人の場合である。わが國の寛永二十一年(徳川家光將軍)というから、あたかも順治元年のことだ。越前の國の漁船が三隻、松前に赴こうとしてマンシュウに漂流し、乗組員は北京へ送られ、朝鮮をへて歸國した。彼らの歸國後、江戸で作製された見聞覺書の一節にいう。

「清國の御法度、萬事の作法、ことの外に明に正しく見へ申候。上下共に慈悲深く、正直にて候。……金銀取ちらし置候ても、盜取様子無之候。如何にも慇懃に御座候」。またいう「召仕候者をいたわり候事、子の如くに仕候。又主をおもひ候事、親の如くに仕候故、上下共に親しく見へ申し候」と。清朝の當路者、たとえば睿親王のときは、しばしば「わが朝の臣工は賄を納めず、私に徇えず、怨を修めず」といつた意味のことを繰り返しているが、これが單なる口頭禪でもなかつたことは、この覺書の立證によつても明らかであろう。同じ覺書によつて、「北京人の心は滿洲人とは違ひ、盜人も御座候。僞も申候。慈悲も無之かと見え申候」と極めつけられている漢人の場合とは對蹠的である。

この若々しい民族社會を背景にもつ清朝としては、火耗

三分の徴取をすら、私に徇えるものとして容認することができなかつた。老成した社會の良識と如才無さとは、この場合、若々しい民族社會の善意と嚴格さとに對して席をゆすらねばならなかつた。このようにしてでき上つたのが、

「官吏ノ錢糧ヲ徴收スルニ、私カニ火耗ヲ加ウル者ハ犯賊ヲ以ツテ罪ヲ論ズ」という形で『會典』に載録された順治元年日付けの題准である。賊罰に關して先の引用文にみえる「前論」とは、同年六月十八日(甲戌)、順天巡按柳寅東の啓言に對して下された攝政王の報に、「こののち官吏の犯賊には、實を審して立ちに處斬を行え。鞭責は寛に過ぐるを覺ゆるに似たり」(『實錄』五)とあるのを受けたものに相違ない。『明律』——枉法賊の最高でも絞罪に止まつたそれに比べると、はるかに厳しい。

しかも、このような厳しい制裁規定を伴つた火耗の禁が、自來ひとつの「成例」として、ついでは動かすべからざる「祖法」として、漢人社會、とくに漢人官僚社會の上に被いかぶさつて來ることになつたのである。明朝では、いな、明に代つたかも知れないいかなる漢人王朝にあつても、とうてい豫測し得なかつた事態に外ならない。

(c) 賊罰令を無視させる火耗銀兩の誘惑

問題はしかし、ここでもあの存留錢糧の銀七錢三徴收制の場合と同じように、その成例なり祖法なりが實行されたかどうかという事である。

私としては、いかに「頭」より「髪」を重視したといわれる漢人でこそあれ、みずから洗腦をおえ、剃頭辮髪して胡服に着かえた官人たちではあり、傳家の寶刀を頭上に振りかざされていた事でもあつたからには、少なくとも初め數年・小十年そこらは、相當嚴重にその成例を遵守していたのではなかつたかと思う。なるほど、元年十月にも二年三月にも、有司(州縣官)が錢糧を徴收する際には、ただ正數のみを取つて、分外に秤頭や火耗を侵漁してはいけないという同じ趣意の布告が發せられてはいる。しかしこれらは共に、新例の存在をとくに地方的に周知させようとする努力の跡を示すものに過ぎない。かえつて、王亮教という一御史に關しては、順治六年には命ぜられて兩浙地方を巡按し、同八年には復たび命を奉じて河南地方を按察したが、かれは單騎・邑に下り、みずから稅權を驗して「羨餘」すなわち火耗があればこれを懲らしたので、百城・風を聞

いて爲めに股慄したことが伝えられている。³⁰ 成例は一おう勵行され遵守されていたものと見える。

ただ、その初め小十年の範圍はと問われると、自信がなくなる。あるいはその新例が、當時の清朝の天下の隅すみにもまで周知させられるより前に、漢人たちの良識と如才無さが勢力を回復し、それどころか、才覺と惡智恵とにまで發達して、その新例——滿人の善意と嚴格さとの權化であるその新例を、集團的な力で威壓し無力にしていたのではないかとさえ疑われる。少なくとも順治十一年には、禮科給事中の季開生が、害民十大端の一つとして、天下の火耗の重いのは、銀一兩ごとに、加耗して五錢にいたるものもある。白糧は百石ごとに官耗が五十兩にもなる。百姓たちには、勉めて正賦を供するだけでも物力は已に艱しいのに、徭役の辦納で勞れは更に甚だしい、³¹ という當時の實情を指摘している。大々的に火耗の私徴が行われていたことは明白である。翌十二年一月甲辰、包賠（見在戸に逃戸の税をもありあてて）とか預借（前がり）とかの不正行爲とともに、「暗かに火耗を加える」ことをも嚴禁すべきむね詔旨が宣布され、犯す者は總督・巡撫をして糾參させることになつ

たのは（『實錄』）、いうまでもなく、こうした實情に對應するために外ならない。そのご三年、順治十五年の春に、郭文雄という人が江蘇省崑山の知縣となつた。彼の傳記によると、その謂わゆる「火耗は遠近みな什一」、つまり毎兩一錢というのが通り相場であつた。侯はひとり輕くして、火工・解費に給して足らぬ有様。そこで民は皆な輸を樂つて後れるのを恐れたという。³² 多かれ少なかれ、取るのが當り前になつていたのである。さらにその翌年、順治も終りにちかい十六年正月、于可託が疏言してこんな事を訴えている。すなわち、錢糧を催徴するのに、……今の貪墨な有司は止だ、多く徴すれば多く「火耗」を得られることを知つてゐるばかりだ。ついに年を按じて徴収せず、巧みに預徴の名色を立てる。今歳の徴求が未だ罷まないのに、來歳の追呼が旋て迫つてくる。一歳に二歳の錢糧を並徴するとうわけだ。……嚴しく禁止されんことを請うと。³³ 預徴・預借の導因をなしていたとは、恐るべき火耗の誘惑ではある。

銀の魅力・火耗の誘惑が、あらゆる法的制裁の威かくを越えて、「加派は別として」普通の錢糧徴収の事態を革命以

前のそれに近づけていたかに見える。後には銀七錢三微支制（順治十四年）を有名無實たらしめたものが、先には火耗嚴禁の令を骨抜きにしていたかに見える。こうなると、あの、清朝では定鼎とともに耗羨を「官に歸した」という彭端淑の判斷も、間違いだとはかりは言いきれまい。

にもかかわらず、一方マンシェウ人側の意氣ぐみを見ると、なかなかどうして、眼をつぶつて「歸官」の陋習を見逃がすところの騒ぎでなかつた。當然、相手の出方に應じてのことであろうが、順治十二年には、衙役の犯賊を問題にして、一百二十兩以上は分別して絞・斬にし、一兩以上は俱に流徙することに決め、また内外の大小貪官についても、受贓して十兩以上に至る者は、枉法と不枉法とを分かつたず、ともに家産を籍没して官に入れることを定めた。ついで十六年には、貪官の贓の十兩に止まる者は、その籍没を免じ、責四十板のうえ（北滿）席北^{シベ}地方に流徙することにした。これらの處置は、一見、これまでの態度——「鞭責は寛に過ぎよう」とする態度から一步後退したもののように見えるかも知れない。しかし事實はただ、規定をより實行し易く、従つてより効果的にしようとしたものに過ぎな

い。さればこそ銀の魅力・火耗の誘惑に憑かれた漢人官僚社會の代辯者たちは、これら懲貪の定例を目の仇にして、猛然と突つかかつても行つたのである。有名な徐乾學もその一人であつたかも知れない。彼はまだしも康熙期の人だが、早く順治期にあつても、朱之弼・林起龍などが、同様たつて懲貪の過嚴を難じている。

朱之弼の言い分はまた後で引證する機會があるであろう（一二三頁）。ここではただ林起龍の意見と、これに賛同した刑部等の官のそれと、それを駁撃した順治帝の裁斷との對照を『實錄』（十七年十一月戊寅）によつて示して置くことにしよう。

〔前略〕旨を得たり。貪官と蠹役との民を害するや、しはしば懲らすも憐^{あはれ}めず。嚴法を特立せざるを得ず。人々畏懼して貪心を省改するを冀^{はが}つて、始めて朕が懲貪救民の意に負^{おぼ}かざらん。いま〔鳳陽巡撫〕林起龍奏して稱^いう、止だ法の重きに緣つて以つて、人犯の死に抵^た〔るを恐れ〕て招^{いば}せず、贓を追^とずること甚だ少なきを致すと。爾等（刑部等衙門）會議して、仍つて律に照らして罪を擬し、贓を追して入れて以つて軍需を助けんと

とを請う。それその法を畏れて招せざるよりは、何ぞそれをして法を畏れて貪らざらしむるに若かんや。：朕は明らかに知る、立法すでに嚴なれば、貪官・蠹吏においては便とせざる所ありて必ず怨心を懷かんとを。但だ生民を軫念するや、即ち貪蠹の怨むところとなるも恤うるに違らず。若しかくの如くならずんば、貪風なに由つてか止息し、小民いつの日にか安せん。仍つて前諭に遵つて行せ著む。林起龍の奏するところと爾等の覆するところは俱に不合なるに屬す。嚴しく飭行せしむ。

順治帝の氣構えのうちには、依然として若々しい民族社會の小民に對する善意と惡に對する嚴格さとが見られる。この場合の帝の態度は、あとで、康熙帝の態度がこれとはどのように違つていたか、反對に、雍正帝のそれがこれとはどのように似通つていたかを學び取り易からしめるために、心して記憶されねばならない。

清朝では定鼎とともに耗羨を「官に歸した」、とそのようにだけ、何らの條件もなしにいう彭端淑らの判斷には、にわかに賛意を表するわけには行かないのである。

(d) 三藩の亂による財政難と官吏給與の惡化

火耗もしくは耗羨が名實ともに「官に歸した」、すなわちそれらが州縣官たちの全く「私」的な収入となり、少なくとも、社會通念として「私」物あつかいできるものだと考えられるようになったのは、康熙帝の治世にはいつてからの事であつた。鄭氏臺灣の經略といわゆる三藩の亂の鎮壓とが——というよりは、それらの經略と鎮壓とを遂行するために採られた財政的なやりくり算段が、事態を否應なく「歸官」容認の方向に追いやり、マンシェウ人的な善意と嚴格さとをして、漢人的な良識と如才無さ、むしろその才覺と惡智惠との前に膝を屈せざるを得ざらしめたのである。

明朝の遺臣・鄭成功が臺灣に據つたのは順治の末年（一六六二）のことであつた。成功はその翌年臺灣で死んだが、やがてその子・經がその父の遺志をついで臺灣を守り、彼の死（康熙二十年・一六八一）後、その子・克塽が島を擧げて清朝に降つたのは康熙二十二年のことであつた。この間、康熙十二年から十三年にかけては、いわゆる撤藩の令——北京朝廷が平西王（雲南）吳三桂以下、かつての降將および

その子孫からなる三人の西南藩王たちの請求を容れる、という名目の下に斷行した撤藩の令の發布を機として、いわゆる三藩(平西王・平南王(廣東)・靖南王(福建))の大亂が起つてゐる。「三藩の叛は、單なる政治上の意味をもつては解釋できず、實は財政の問題と關係するものがないではない……」天下の財賦、半ばは三藩に耗す」と。(清末の史學家)魏源のいうところはこの通りだ。たとえ三藩をして恭順自ら守らせたとしても、ついにこれを撤して財政を正經に歸せしめるの曰むを得なかつた所以である」。年少氣銳の康熙帝が北京にあつて親から方略を指示し、文字どおりしばしば寢食を忘れるほどの苦心經營の結果、ようやくこの清朝にとつては食うか食われるかの危機を乗りこえることのできたのは、その後九年目の康熙二十年のことであつた。動亂の範圍は天下十八省中の十省に及んだといわれる。

この重大危機の試煉を通して、清朝の政治は大きく轉回をとげた。軍事的にみて、いわゆる以漢制漢の名のもとに、綠營漢人兵の力に依頼せざるを得なくなつたのもその現われの一つだが、當面の關心じよう、視野を財政面に限つてみても、そこには大きな變化の跡が認められる。

變化の主題は二三これを指摘できるが、それらのうちでも、特に基本的な意味をもつものは、起運錢糧に對する存留錢糧の比率の低減である。國家經費、なかでも軍費の異常な膨脹のために、地方經費としての存留分を削減したところ——せざるを得なかつたことなのである。

この種の比率の低減は、實は必ずしも康熙をまつて始まつたことではない。順治の時にもかつてそれが行われた。康熙の名臣・湯斌の言葉に、順治の初めには錢糧の起(解)と存(留)とが相半ばし、考成(徵收成績評定)の例は尙お寛やかであつた。のち兵餉が急迫したために起解の數が多くなり、また十分考成の例を定めて、一分でも完まらなないと部議を追れ難くなつたとあり、康熙八年における朱之弼の上言にも、各省の存留錢糧は、順治中、軍需の迫急によつて曾つて裁減し、遵行すること已に久しいとある通りである。それが果たしていつ、もしくは、いつからいつに懸けての事であつたかを詳らかにし得なかつたが、ともかく順治中にも、その比率の低減の行われたことは疑いない。じつと張玉書の「紀順治間錢糧數目」という有名な財政報告書によると、順治十四年以後の額賦の入るところは、存留の項

款を除いて一千九百六十萬兩であつたという。當時の歳入そのものは、十四年で二千四百三十七萬兩〔弱〕。十六年で二千五百五十九萬兩〔弱〕。差し引き、四百七十七萬兩もしくは五百九十九萬兩見當が存留錢糧額となる。起運と存留との比率は、大ざつばに言つて四對一ないしは三・三對一に當り、「起と存とが相半ばする」状態からは、すでに著しく懸け離れていたのである。しかも清朝は、康熙七年にいたつてさらに存留錢糧の酌減を圖らざるをえなかつた。朱之弼が前引の文章にすぐ續けて、昨年、部臣は又た酌減を請うた。しかも存留の各款はもとと留めて地方の公用にするもので、一分を裁^たてば一分を少^かく。……なにとぞ康熙七年以前の存留數目に復せんことを請う。百姓は派累を免がれることができよう、と言うものがそれである。

當時の情勢をもつてしては、もちろんこの上言が許諾されたとは思えない。それどころか、歴史の流れはそのままするすると三藩の亂の最惡事態に突入し、清朝としてはその復元などと思ひも寄らず、かえつて、一その裁減を斷行せざるを得ない羽目に迫りやられたのであつた。大亂のさ中、康熙十七年三月、吏・戸・兵三部に下した上諭には、

「各處に兵を用い……百姓の困苦に念及して加派科斂するに忍びず、よつて諸臣の節次に條奏せるを允^よして」「新たに定めた各例の、殿に過ぐることに無くんばあらず」と帝のみずから認めるものを並べたてている。みな財政に關したもののだが、それらのうちの眞ッ先に「驛站・官俸・工食および存留の各項錢糧を裁減する」とあるものが、まさしくその「一その裁減」分にあたる。驛站・官俸・工食とは、すでに前文にもみえ（一二頁）、もう少し詳しくは、存留とは、驛遞・工食のごとく、俸薪・廩糧のごとく、鄉飲・祭祀のごとき諸費だとか、⁴⁰師生廩俸・驛站料價・夫役工食・祭祀寶輿の費のごときものだとか、⁴⁰説明されているのも明らかなおとおり、いわゆる存留錢糧中での代表的な支出項目であつたのである。しかもこの大亂中の存留裁減のいきさつについては、康熙四十八年十一月における、帝自身の追憶的な發言が最も簡にして要をつくしている（また一五七頁を参照）。

〔前略〕従前 各省の錢糧は、地丁の正項を除くのほか、雜項錢糧の京に解^おくもの尙お多かりき。三逆變亂より以後、軍興浩繁にして、ついに一切の存留項款を

もつて盡數く部に解れり。その地方に留めし者は惟だ「官俸・工食」等の項の必ず省くべからざるの經費のみ。又た經に節次も裁減し、數たる甚だ少なし。この外には一絲一粒だも、陸續として京師に解送せざるは無く、尾欠ありといえども、部中亦た必ず起解せしめたり。州縣の有司は、織毫の餘剩の以つて動支すべきもの無し〔後略〕。

この發言は、のちに引く陸隴其や、陳瓊の證言ともよく一致する。これらで見るといわゆる存留錢糧は、大亂中をとおして、官俸・工食および驛站といったギリギリの線まで切りつめられ、最悪の場合には、それらにさえ無慈悲に大斧えつが加えられておつたのである。

大亂がすむと、さすがにこの過嚴な處置は幾分ゆるめられた。二十年十二月癸巳の上諭にはまだ、軍興給らざるに因つて官員俸祿および各項錢糧を裁減し、ならびに各項銀兩を増したものが、依然舊に復しないことを憂慮している（『實錄』）。しかし、あとに引く陸隴其によると、大體これを機として復舊に向かつたものとみえる。けつきよく、康熙二十四年度の統計數字では、直省地丁錢糧中の起運銀

の總計は二千一百九十四萬兩〔弱〕、存留銀のそれは六百二十九萬兩〔弱〕（『會典』）。それらの間の比率は約三・五對一であつて、ほぼ順治十數年ごろの數字にちかい。しかしこの程度の回復では、地方政治にとつてとうてい満足できるものではなかつたことは、當時（康熙二十二年～二十九年）直隸靈壽縣の知縣をつとめ、清廉をもつて聞えていた陸隴其の「直隸の興除の事宜を論ずるの書」の一節に、康熙二十年より以後、再び恩詔を頒たれ、漸次に「存留の一項を」復〔活〕して奉いたので、海内には始めて起色あるにいたつた。しかも尙お、當然復〔活〕さるべくして未だ復〔活〕されないものがあると論じている通りである。さらに、彼のこの正論が必ずしも受け入れられない。受け入れようにも財政的な事情が許さなかつたらしいことは、前記、四十八年度における康熙帝の發言の續きに、従前は内帑の不足を恐れたために、外省の錢糧をもつて盡く収めて戸部に入れた。「今をもつてこれを觀ると、善を盡くしたものとも考えられない」。天下の財賦にはこの數があるばかりだ。内ですでに贏るとなると外では必ず紉ける。およそ事は豫しめこれに備えねばならない。もし各省の庫中に帑銀を酌留めておけ

ば、地方にとつて濟なすけになるように思う、といつて今さらのように前過を反省していることや、さらには雍正帝が、その八年九月丁丑の上諭〔實錄〕のうちで、「従前の」——というのはやがて康熙期の地方大官連が、本省への存留を少しでも多くするため、雜項税課はもとより正項の起解をも百万手をつくして澁しづつていた事實を指摘していることから察することができよう。

また事實、數ある地方志のうちには、康熙の初期二十年のあいだに、中央によつて地方存留分錢糧に對して加えられた財政的な掻き荒らしの爪跡を、實に生々生々しくその記事面に残しているものもないではない。『河南省〕延津縣志（康熙四一年序）』のようなのがその一例である。すなわち、それ（卷六・賦役）によると、(イ) 康熙十四年に新たに裁去、二十年にいたつて恩詔を欽奉して復活することを准まづされ、二十一年より舊に照らして支給された官俸の款項とか、十四年等（原作十四等年）に新たに裁去、二十年にいたつて同じく復活することを准され、二十二年より舊に照らして支給された各役工食の款項とかの、いわば完全復活組があり、

(ロ) また、十四年において文を奉じ、通融計算して四を裁

して六を留め、二十年にいたつて二分を復活することを恩准された、本縣驛站の款項のようないわば部分復活組があつたかと思うと、(ハ) 康熙四十年等に舊く裁去された款項や十四年に新たに裁去されたそれで、兵餉に充てられたまま未だに復活しない、いわば完全没落組も少なくなかつたことが分るのである。

存留分の削減を、康熙初期の、清朝政治の財政面における變化の第一主題であつたとするなら、その第二主題としてはさしずめ、捐納事例、略して捐例とか事例とかいわれている賣官行爲の大々的な施行と、その結果としての、錢糧事務の窓口業務者である州縣官の素質の惡化をあげねばならない。

賣官鬻爵は、シナでは古くから用いられた財政的補助手段の一つである。清朝でも一代を通じて時折りこの手段、いろいろの形でこの手段を使つている。なかでもその最初、すくなくとも大規模なものとしての最初の捐例は、よく知られているとおり、三藩の亂を機として決行されたそれであつた。その實行の経緯や成績の大體については、捐例反對論者の一人として、その停止のために重大な一役を

演じた宋德宜の、康熙十六年日付けの上疏に、

頻年 帑を發して師を行るに、度支 繼がず。皇上、
廷臣の請いを俯允し、例を開いて捐輸せしめ、もつて
酌便てきまつに時とき（蠲）を濟すくわれたり。天下萬世、ともに知つて
已むを得ずとなさん。例を開くこと三載、入るところ
は二百萬有餘。捐納のもつとも多きものは「知縣」に
如くはなく、五百餘人に至れり。始めは缺多くして得
やすきに因つて踴躍争趨せるも、今や、數年に非れば
選授し得ざるを見て、亦た徘徊觀望せり。宜しく部に
勅して期を限つて停止すべきなり。⁴⁹

とあるに依つてこれを知ることができよう。なお、この時
の捐例は、十八年九月庚子の康熙帝の言葉に、捐納ともな
ると各省ともに「これを」停止し、止だ粵西の事例を留めて
て平滇（雲南）軍需の用に資しているにすぎぬ（『實錄』）、と
言うものから判斷すると、恐らくは宋德宜の上疏が效を奏
して、その上疏後まもなく、便宜な地方から順次停止され
て行つたものであらう。

捐例の停止はしかし、直ちに捐納任官者の排除を意味す
るものではなかつた。五百餘人の捐納知縣のうち、どれほ

どが實授されたかは明らかでない。しかし彼らが踴躍争趨
したところを見ると、かなり多數が實授されたものと考え
られる。當時の縣數は全天下で、つまり一時的に清朝の支
配を離脱していた地方をも含めて約千四百（一六〇頁）。捐
納知縣のたとえ半數が受授されたに過ぎなかつたとしても、
清朝治下の諸縣における、捐納知縣の比重がいかに高かつ
たであらうか想像に餘りある。治安回復後はまた、いわゆ
る偽官偽職の空缺をうずめて、かれら捐納知縣が實授され
たという可能性も極めて高い。どちらにしても、天下の官
場は、これを機として著しく賣官者によつて汚濁されてき
たのである。

あえて「汚濁」という。もちろん、賣官者のすべてが貪
官・汚吏になつたと言うのではない。なかには汪輝祖——
『學治臆說』という官海指南書の著者として有名な、輝祖
の父の楷のように、貲を納めて河南省淇縣の典史（知縣の下
官）となつたが、廉俸よりほか取るところなく、ウソかマ
コトか、いつも屑くずにした蕎麥を米に和ませて飯にし、豆腐羹
をお菜にして（これを食ひ、着物は）妻妾が自分で紉はりし織として
給たまわせていた、といわれる者もないではない。⁵⁰しかし、こ

れなどは例外であつた。普通人からは、佐雜のくせに『循吏傳』にはいる積りか、とそう笑ひものにされたほどの例外中の例外にすぎない。普通人にとつては、貢官はいうまでもなく一種の投資、それも割りのよい投資であつたのである。しかもその資金はしばしば、京債（京師における借金など）といつて高利貸しの融通に仰いだ。その結果は知れている。丁泰という御史が、軍興（康熙十三・四年）以來、民生・便とせざる所の筆頭として「捐納者のごときは、あるいは官を得てもつてその債負を償う」という一條を挙げ、康熙帝も「これは一般論としてだが」、捐納の人はどうして盡な股實というわけにいかう。大體のところは稱貸した者が多い。百姓を股削らなかつたら、連負は何によつて償うことができよう、といつてゐる通りである。「汚濁」といわざるを得なかつた所以にほかならない。

捐例による官場、とくに徵稅窓口の汚濁を問題の變化の第二主題とすると、その最後の、つまり第三の主題は、いわゆる「設法」主義の擡頭と、これと表裏相應する俸工公捐の開始とである。設法とは要するに、「然るべく處置ありたし」という、わが國でもかつては好く使われていた、

あの極まり文句の中核となる一つの官廳用語にほかならない。

地方の存留錢糧は、回復したとはいえ、大體ギリギリの線まで切りつめてある。しかし、地方に行わしむべき公事がないではない。となると結局、中央の各部（主として戸部だが）としては、地方の督撫に對して「然るべく」と持ちかける以外に他に手段はない。となると結果はどうなるか。この間の事情に關して宋學——三藩の亂の直後、康熙二十二年から二十六年まで直隸省・通永道臺の任にあつた彼は、巡撫にあてたその「條議畿東十事」の第一條、「設法を停めて以つて加派を杜がん」の一項のうちに克明に次のように述べてゐる。

ひそかに惟うに、「加派」の弊は功令 首めより嚴なるも、しかも設法の語 時に部の文に見わる。それ「設法」の二字は即ち加派の別名なり。時々有司を申飭して里民に加派するを許さざれば、公家の務めは、おのずから應に議して公帑を動かすべきに、部咨の開するところは蓋多 官をして設法せしむ。

とするとどく部臣の設法主義をつく。「公務」は「公帑」での

叫びは特に注意されねばならない。言葉はつづく。

あるいは費すところ幾くも無くんば、猶お勉力めて措置すべし。乃るに遠くは西安の雇車・北口の運米のとき、近くは城垣を修葺するがとき、責して設法せしめざるは無し。それ雇車・運米の費は動もすれば數千を需む。通・薊等の城を修葺するの費は更らに鉅萬に盈つ。若し「捐俸」せしめんにも、通永所屬の官俸幾ばく有りや。……有司の功令に凜惕して加派を敢てせざるや論なし。即え加派せんと欲するも、亦た地圈せられ丁逃るるの區……に向かつて、錨銖を索取して以つてこの賁せざるの費に供する能わざるなり。

設法主義が「加派」への道であつたと同時に、「捐俸」へのそれでもあつたことは明白である。言葉はさらにつづく。

向年、雇車の一役は通省「公捐」し、尙お衆擎して舉げ易しとなす。最も苦しむ所のものは運米の役に如くはなし。……原と通省の公捐を議せるも、いま事竣つて已經に數載、究竟にいまだに允行を奉せず。……嗣後、部咨を准くるに「以設法責成各官」の字様あらば、伏して祈るらくは即ちに咨商を行い、あるいは、

「公格」を動發して以つて「公務」を辨せんこともて題請を賜わらんことを「後略」。

地方官吏の俸工——亂後、存留錢糧の復活にともない、一おう舊に復されたかも知れない彼らの俸工の陰には、いつでもその復舊を無實化するであらうような、この天引きの危険がさし迫つていたのである。事實、宋犖のときは、別の機會にだが、「養廉の薄俸を即し盡數く全捐すれば何ぞ事において補わん」といつて、全額天引のおそれさえあつた事實を暗示している。

設法の濫用と捐俸の盛行という傾向は、そのご康熙期を通じて變るところがなかつた。強まりこそすれ弱まることはなかつた。設法主義については、張玉書がわざわざ「設法の名色を杜がんことを請うの疏（『文編』三六）」を上つて（年代不明、康熙後半か）、毎年正供の賦額にはおのの抵銷がある。別項の費用があるとなると、部臣は輒もすれば、その督撫に敕して酌量「設法」せしめ、正項錢糧を動用するを得ざらしめるよう（『天子に』）請うと指摘し、康熙帝もまた、今（四十九年十月癸未）、部中・一事に遇うごとに輒もすれば議して地方官に「設法」料理させる（『實錄』）、と批難

しているのを参照すべきであらう。

設法主義は康熙の後半にも依然として加派・私派への動因、ないしは誘因であつた。ひどいやつは、一たび部文が下されるとそれに借端^{かくだん}けて侵漁し、もともと設處^{くせん}すべきところは十の一（一割加派）ですむはずなのに、「私派」するものは十の五にもなつたとさえ言われている（張玉書）。しかしこうした逞しさに徹しえないものは、けつきよく、身錢を切りッ放しに切るか、それとも、雍正帝のいわゆる「明らかに諸^{しよ}を官に取れば、官は亦た必ず暗にこれを民に取るのみ」⁶³を地でいき、表むき切つたことにして陰では「加派」で補いをつけねばならなかつた。その場合の身錢切りこそ俸工の公捐もしくは「捐輸」⁶⁴にほかならない。存留錢糧中での、恐らくは最大の款項であつたと思われる官俸・工食（役食）は、こうしてともすると、公務の辨理を名として事務的に差ッ引かれ勝ちであつたのである。（初めはやはり自發的な義捐という形をとつていたのであらうけれども）。捐俸の方式自體には、必ずしも一定の基準はなかつたように思える。康熙末から雍正にかけての例だが、甘肅省で行われたある帑項の捐補の場合には、文職は司（布政・按察）

道（道台）以下は俸銀を「全捐」し、武職の提（督）鎮（總兵官）から遊（擊）・守（備）にいたるまでの俸銀と、並びに各役の工食とはともに「七を捐して三を留め」た。⁶⁵また湖廣省では、州縣官以上が俸工（俸銀）を報捐し、雍正元年にいたるまで、「十有餘年」のあいだピタ一文の給發もなかつたという（一八九頁）。全般的な見通しからすると、康熙の後半、むしろ末葉には、少なくとも州縣官以上の文官の俸銀は、支給されない方がむしろ普通だつたとさえ疑われてならない。

要するに清朝の政治は、三藩の亂の重大試煉を通して大きく轉回をとげたのである。財政面に限つてみても、第一、全地丁錢糧中での地方への存留分が著しい縮少をうける。第二、しばらくの期間ながらも、捐納の事例が開かれ、二百萬兩の代償において州縣官らの素質を低下させてしまう。第三、設法主義の流行にともない、一方では加派・私派の、他方では官吏の俸工の公捐を一般化させる、といった諸傾向をその轉回の現象形態として指摘することができよう。

(e) 陋規の常識化と火耗私収の公認

この新らしい情勢のもとに、少しも生活的な重壓を感じ

す、少しも私欲の方向に押し流される危険を感じずにすむ官吏がもし有つたとしたなら、それは餘ほど幸福な資産家であるか、それとも餘ほど道德堅固な堅造であつたに違いない。

しかし現實において、清初の官吏たちは、すべてが皆な後に例證する張伯行（二六六頁）や、「臣の家は衣食ほほ足り、前に京に在つたときも、浙に在つたときも、臣の父が稍しく幫助してくれました」といつて、「家資をもつて官に居るものを幫助するのは、何とも情理の常でない」と雍正帝（六年九月二十五日）から硃批された時の徐鼎、のような資産家ではなかつたし、また——借金してその地位をえた捐官たちは言うにおよばず、その他の官吏たちも必ずしも堅造ばかりではなかつた。むしろ、環境に如才なく適應しながら、その生活を護持していくというのが、官吏のみならず、漢人が一般に歴史的に身につけていた智慧でもあつたのである。

この場合にも、彼らは實に見ごとな適應ぶりを示した。下地は好しでそれが早かつたのかも知れない。そのもつとも奇抜な例證は、毛奇齡の撰した、山東都運分司運判・俞

鳳章（康熙二十五年死）なるものの墓誌銘である。記事内容の日付けは、奇齡が京師にいた康熙十八年から二十四年までの間の某年、正しく三藩の亂の末期もしくはその直後のことであつた。その文にいう。

予（毛奇齡）の京師に官たるにおよんで、君は都運をもつて山東に分司す。聞くならく、その初めて至るや、司例の金錢ありしも、前官の格むるところと爲れり。君、直ちに御史臺に白して曰く、「分司に規例あるは猶お州縣に火耗あるがごときなり。州縣は火耗なければ以つて廉を養うなく、分司は規例なければ以つて貪を絶つなし。それ、この月進（月俸）給せず歲薪（手當）日に減するの時に當り、ひとり一人ありて、火耗を斷ち規例を黜け、母妻・子女・賓朋・奴客、および閣中幕下に效楮するものを挈えて、相ひきいて蟬となり蚯蚓となること、能くせんや。それその能くせざるを知つて、なお斤斤焉として惟れ規例、是れ黜くるは、これ不情には非ざるなり。詐なり。それ詐なれば何ぞ爲すべからざらん。それ詐なれば必ずこれを恒格の外に求めて、その規例たるや問うべからず。それ詐なれば、

何ぞ以つて國事を受けんや」と。臺使はその言を善しとしてその舊例の半ばを復するを許し、その言また稍と都下に傳わる(『類徴』二五〇、倭佐二、俞鳳章傳)。

この世智がらい時節に、ふつうの手當にはもちろん、隠し手當やヤミ給與にだつて、そうそう手出しをしないで居れますかと言うわけであつて、完全に、俗にいう尻をまくつた形である。

セミとなりミミズと爲りたくなかつたのは、もとより俞鳳章ばかりではなかつた。彼は決して官界の變り種ではなく、忠實かつ有能な代辯者であるに過ぎなかつたのである。じじつ、地方官への手引書としては最も有名なものの一つであるあの『福惠全書』(康熙三十三年序)には、いわゆる陋規の取りあつかい方について次のような指示をあたえている。すなわち、云うところの陋規とは、地方歴來の成例であつて自分からして創始したものではない。然も吏となる者には升斗の祿に限りがあつて、應酬の費には窮まりがない。もし一切の舊規をすつかり裁革めてしまふとなると固より美事には屬しよう。しかし……どうにも金のやり繰りがつかなくなつて、復た元に戻つてしまふでは、鮮終と

いう銷りを來たすを免がれまい。どうしたものであらう。自分(黃六鴻)の考えでは、陋規には、別段やめなくても好いものがある。その間を斟酌して、因るも革めるも相半ばするものもある。斷々乎として必ずやめねばならないものもある、と陋規を三種に分類しながら、その第一類のものについては、

火耗の一節のときは、毎兩に三分・五分、「これを」銖と積んでこれを黍と累ぬ。これを出すもの未だその難きを覺えず。これを取るもの、原より衆に因つて、以つて牙・雜諸税の稍しく贏餘あるものに及ぶ。なお遺秭・滯穗の利のごとし。これを得るも寧ろ貪となさんや。これ必ずしも革むべからざるものなり(卷三、蒞任部「革陋規」)。

と言つておるのである。黃六鴻は同書(卷三十)「條陳興革」の條でも同様の意見を繰りかえしている(一部後引)。

火耗は陋規の一つであつたのである。すでに「陋」規——陋劣な規例という。かつては陋規を收受することが法に觸れ、法には觸れないまでも、良心に痛みを感じさせる性質のものであつたことは疑いない。しかし、事態が三藩の

亂後のようになつてからも、陋規——とくに第一種のそれの收受に際して、良心に痛みを感じるような官吏があり得たであろうか。まず無かつたとみていい。もちろん、その例外者の存在を否定するものではないけれども。

しかもこの新しい時代の陋規收受者の心理を最もよく代表しているのは、『學治臆説』の著者としての汪輝祖である。かれは乾隆から嘉慶(十二年「一八〇七」死)にかけての人。ただその發想法からいえば、まさしく黃六鵠の亞流であつて十分にその代役をつとめるに足る。かれは州縣官の心懸くべきことのひとつとして、四種の帳簿を常づね備えておけという。正入簿と正出簿・および雜入簿と雜出簿とである。「雜」と名のついた方は、いうまでもなく私簿・私冊である。不肖の州縣が月に「私冊」を立てていることを、やや不機嫌に告げているのは雍正帝だつたし、おなじころ、怪しげな符徴で錢物の出入を記入した胥吏たちの底簿のあつたことも別に傳えられている。私冊・私簿そのものは、雍正・康熙はおろか、明代以前からあつたのであろうが、ともかくその私簿のうちの雜入簿について輝祖が、

銀の平餘・穀の斛面、および歲ごとの額有の「陋規」

等の項を記す。應に己に入るべきものは、鬼神に質すべく人の共に知るところ、必ずしも諱さざるなり。もし額外に婪索すれば、これを贓私となす。以つて簿に入るべからざる者は、もつて人に對すべからず。即ち以つて心に問うべからず。鬼はこれを瞰、神もこれを鑒。悖入悖出は、自愛するもの必ず爲すを肯んぜず(『文編』二、守令中)。

といつてゐるのは大へん興味がふかい。(ここに耗羨・火耗の名が見えないのは、それらがすでに歸公されて正入簿的なものになつていたからにすぎず、強いていうなら、平餘(二四頁)が、かつての耗羨等に相當する)。彼および彼によつて代辯された官吏たちは、「應入己の陋規」という發想に對して、われわれが今日「行うべき惡徳」という表現に對して感じるような矛盾を、少しも——ではないまでも、ほとんど感じなくなつていたのである。重かれ輕かれ、良心の一種の麻痺状態だといふことができよう。

もちろん、このような麻痺状態に關しても、前述のように例外者は存在した。清官とか循吏(一四六頁)とかいわれた一群の人々がそれなのである。

康熙間のいわゆる清官・循吏には、大物としては、魏象樞・湯斌・陸隴其・于成龍・趙廷臣・趙申喬・張伯行ら國史に傳せられた人々があり、行政の末端・親民官のうちにその人に乏しくなかつた。全體の前では一と握りにも足りない少數派だつたとはいえ、いちいちその、清官・循吏ぶりを紹介するには多すぎるほどの人数である。ただ、いちいちそれを紹介してみたところで、この際ほとんど無意味にちかい。またそのうちの目ぼしいものは、あとで引用する機もあるであろう。ここではただ、循吏系の親民官の一二をとつて例證しておくに止めたい。それも主として火耗の問題に焦點を合わせながら。魏令君というものがおつた。康熙七年ごろ、江蘇省・青浦縣の令となつたが、彼は任地につくと、吏の請いに従つて錢糧徵收の徵期を加減し、また「火耗」を絶つて分毫の羨りをも無からしめた。民は喜んで期日とりに集まつてくる。その限に及つたものに、彼は皆な勞らつて價をあたえ、限に及わなかつたものには彼は蠲免して「お前は筭だ」といつたと言われる。また、康熙十七年に河南省・登封縣の令になつた張燠は、その地方で久しく、ひどい私派火耗が行われていた實狀に鑑み、

翌年着任とともに縣衙の前に大きな石碑を建立させた。その文にいう「奉旨永除私派、天監在茲」と。

これら少數派の行爲なり主張なりは、ではあの大多數者——俞鳳章の心を心とし、黃六鴻の頭を頭とする大多數者には、果たしてどのように受け取られたのであろうか。

大別して二つの受け取り方があつた。一つは實際的なそれであり、他は學者的、とくに道學者的・朱子學者的なそれなのである。第一のものは要するに、そんな事をしたつて始まらない。むだだと言うのであつて、例えば黃六鴻の、

〔前略〕それ興革の大、あに輕議して審處を加えざるべけんや。さらに近時の私例をもつてこれを言わん。州縣を見るごとに、新硲みずから勵み、聲譽を博してもつて上游に重んぜられんことを務め、錢糧の「耗羨」・衙門の舊規もて一切裁革す。百姓も始めは廉父母と稱せずんばあらず。餽送應酬・妻子饕餮・幕友脩俸・意外の補苴、交相急を告げて設備に従しなさに追ふや、ここにおいてか、復た往昔裁革せるところの者を取り、漸次に施行してもつて怨謗もこも作るを

致す。それ今の復するところは、即ち向の裁^{さき}するところ、何の増益かその間にあらん『福惠全書』三〇。

「それどころか、民衆はもうその裁革した段階になれ切つてゐる。それを急に元に復えすとなると、その復元したものは、いま創設したのと同じことではないか。民の怨謗しないことを望んでもできるはずは無い」——というものが、よくそれを代表する。第二のものは、むしろ、人間論的に清官・循吏の實態、その偽善性を突こうとするもので、例えば嚴虞惇（康七生、康五二死）の「沈位山に與うるの書」の論旨のようながそれである。

〔前略〕當今の時勢は日に衰薄に就く。官に居るも一事の爲すべきなく、錢を要むるに過ぎざるのみ。……僕

また、今日 稱するところの好官を見るに、纔かに任に到つて、便^{すな}わち「陋規」を減じ「常例」を革^やめ、清節を標榜し聲譽を矯飾す。しかもその實、私門 旁竇、暮金 日に進んで、人は皆なこれを「清官」と謂う。

世を欺いて名を盗むこと尤も恨むべしと爲す。

「自分の見るところでは、眞正の清官は湯潛庵（弼）先生ただ一人だけだ。清にして物を絶たず、和して随わない。……

：願わくは君もこれを以つて法となし、今日のいわゆる刻薄苛躁の一流は、切にこれに效^なわないようにせよ」——これがその要旨であつたのである。この訓示によつて薰陶された位山『沈近思が、のち雍正期にどのように行動したかは、後節で明らかにするであらう（一九八頁以下）。

清官『循吏的な少數派の行爲や主張は、これら多數派の考え方、重壓の下に、日毎に自信を喪失して空虚なものとなり、その現實との隔たりのゆえに、次第にみずからを戲畫化していかなばならなかつた。

この大勢を前にしては、さすがのマンシュウ的な善意と嚴格さも、立つ脚のな^えと、その揺めきとを感じざるをえない。事實それらは揺めいたのであつた。ただそれらが一舉につまずき倒れ、漢人的な良識と才覺・惡智惠のまえに膝を屈したかというに、必ずしもそうではなかつた。焦點を今の問題に絞つていえば、順治元年の火耗嚴禁の令が、依然、成例・祖法として、清朝當局者の頭上に被^かいかぶさり、これをその心裏の奥深くで鼓舞していたからに外ならない。

清朝當局がよろめく足を踏みとどめた一線は、いわゆる

「大法小廉」の説教によつて、官吏たちの貪婪——黄六鶴の場合の第二・第三、ことに第三の陋規の收受、のときを妨ぎ止めようとするに在つたと見られる。「大法小廉」とは『禮記』に基づく言葉で、要するに、大臣は法を重んじ、小臣は廉を知るといふ風だと國は榮えるという意味であつた。康熙二十七年正月のこと、舊臘、江西巡撫に任官したばかりの王隨が陛辭に參上した。その彼に向かつて康熙帝はこういつている。巡撫は地方の大吏だ。操守が大切である。大法なれば小廉で、百姓は俱な福を蒙らうと。清代、政治標語として使われた「大法小廉」のうちでは、もつとも早いものの一つであらう。この時の二人の間の問答は興味あるものだが、なかでも帝が王隨に諭した言葉に、身は大吏なのである。尋常の日用を一つも費わすにすむ道理が、どうして有りえよう。もし一文・一毫でも家から自給するとなると、勢いとして、できない相談である。ただ操守が廉潔で、何を考えるにも百姓を愛すればこそ、というようなら、それが「良吏」だとあり、また、大吏たるものは安靜にせねばならない。……凡そ貪汚の屬吏は、まず訓誡せねばならない。もし始終 悛めないうようなら、そこで糾劾

すれば可いのだ、とあるものは、いわゆる「大法小廉」の眞意が、どこにあつたかを物語るものとして注意されねばならない。

「大法廉臣」。そのもとの意味はともあれ、少なくとも清代政治標語としてのそれは、大臣——自身、清にして「物」を絶たない程度が手頃だとされていた大臣は、いわゆる「害はその太甚なるを去る」の限界内で法律を堅持し、それによつて小臣の廉潔を期待する、という意味あいのものであつたのである。康熙二十四年、山西巡撫の穆爾賽が降三級の懲誠處分をうけた。所屬の州縣官たちが、毎兩加三・加四にものぼる過度の火耗を入己していた、それを見逃していた罪過を問われた結果にはかならない。(見逃してもよい範圍はやはり加一であつたのであらう)。この場合は、大臣自身が法に當てられたわけだが、しかし、これも廣い意味での大法小廉主義の一變形と見なすことができる。

その後この大法小廉の考えは、多くの人によつて、多くの機會に説教され主張された。一々引用するまでもない。ただ四十年代(四十二年以後)に、偏沅(湖南省長沙)巡撫の

趙申喬——清官派の旗がしらの一人である彼が、屬下の衡山縣の不正事件を調べた記録には、かなり生き生きと、彼ら清官派と自餘の多數派との對照が映し出されている。一顧の價值があるであろう。

〔前略〕ただ〔衡山縣の〕詳〔文〕を査するに稱う。今春以來、火耗一錢六七分を酌取して以つてその〔漕項等の費の〕用に敷^{たく}わせりと。それ火耗一錢六七分は重からずとなさず。該縣の季ごとに入るところは約一千一百餘兩。多からずとなさず。即ち曰う、該縣は毫も取るところ無しと。而もこの一錢六七分の火耗は必ず用いし處あらん。

良識あるいは常識にしたがつて取つたぐらいでは、取つたことにならなかつた譯である。少なくとも多數派官僚にとつては。清官派の身にして見れば、だが、そうはいかない。言葉はつづく。

本都院（巡撫）下車の月、只だ署井の一杯の水を飲むのみ。法なるや、法ならざるや。大は法にして小は不廉。これ該縣の謂わゆる、冥頑不靈にして顧憚を知ること^な。罔きものなり。

これは賣り言葉に買ひ言葉なのであらう。

大法にして小廉なれば、この一錢六七分の火耗、應に減すべきや、減すべからざるや。該縣はすでに、實に據つて披瀝すと云えるに、並つて、四月以後、上諭を遵奉し、作何して加耗を力減するかの處をもつて明白に聲説せず。あに大法にして小不廉なるや。そも或いは大なお不法多くして小また敢えて不廉なるや。

清官派がややヒステリックなのに對し、多數派のこの一人が、落ちつき拂つてゐるかに見えるのは印象的である。後者にしてみれば、山は見えたという所であらうが、事實、火耗の問題に關するかぎり、この時にはすでに山は見え、むしろ峠を越えておつた。おつたように見える。

その峠ともなつたものは、四十年前後に一部の人人から提起された明取火耗の試案が、疑いもなく、暗收入己を好しとする多數派官僚の反對によつて、苦もなく押し切られてしまつた事件（後説）ではなかつたかと思う。

この峠を越えると人々は——風俗史上、何らかの機縁で、これまで隠し所とされていたものを、公然人前に露けだし、て憚らなくなる事があるのと同じように、火耗、とくに昔

からの通り相場であつた（一三八頁）いわゆる加一の火耗のごときの收受を、人の耳目を憚るべきものとはしなく成つてしまふ。趙申喬ののこした別の公文のうちには、軍需支出のため庫項に穴のできた時の始末に關して、

〔前略〕四十三・四年の俸工は已に捐して嶽廟を修めたり。その庫項は虚懸すべからず。署布政司張仕可の詳に稱う、各州縣は、「加一火耗」の内、五分を扣捐して軍需の用項を清補せんことを願えり。兩院（督・撫）に通詳して批准さると〔後略〕。

とある。州縣は堂々と毎兩火耗一錢中の五分だけは捐納しようといひ、署藩司はまた堂々とこれを詳文にのぼせる。その一例という事ができよう。同じ文書の少しあとでは、申喬自身が爺提督某から、彼が四十二年の到任いらい七年间、毎年、火耗八千八十兩ずつを抽したと參劾されたことを傳えて、陳辯これ努めている。この清官も、加一程度の「物」のおコボレは敢えて「絶つ」ことをしなかつたのであろう。官吏、とくに州縣官における清者と一般者とさらには貪者とのけじめは、要するに、火耗をまっ正直に加一の範圍に止めるか、「加一」を、よりカサ高な火耗のため

の單なる隠れミノ・護符と考えるか、初めから加一の節度などは無視して、搾れるだけは搾る氣でいるかの違いであつたのである。

四十年前後の峠を境として、皇帝によつてこそ最も端的に象徴さるべきであつた、マンシェウ的な善意と嚴格さは完全に膝をついてしまふ。善意はともかく、惡、とくに政治的惡に對する嚴格さはほとんど姿を没する。

康熙三十六年五月、帝が山西・陝西兩省の火耗私徵狀態を指摘し、ことに同三十九年九月、河南省のそれを指摘した時の語調には——もちろん相手が毎兩二三錢とか、「甚重」とかいわれるような重耗であつたせいもあるが、まだしも嚴しさが看取される。ところが四十年代以後にはそれが變つてくる。『會典』の「禁革私耗加派」の規定——これが三十九年を最後に雍正二年まで空缺であるのも、その一つの現われかも知れない。

もつと具體的な諸例を示しておこう。四十八年十一月、すなわち王慶雲の『熙朝紀政』（一三四頁参照）に同じ目的のために引用されている、河南巡撫鹿祐に對する諭旨におくれること、僅かに二カ月のことである。たまたま科臣

(諫臣)の郝林が各省の虧空錢糧に關して條奏した。これにもとづいて帝が大學生等に諭した言葉の一節には、次のように見えている。

凡そ事の深く究むべからざる者、はなはだ多し。即ちば「州縣の一分火耗」の如き、亦た法の取る應^べからざるどころ、尋常の交際の二十金も亦た、法の受く應^べからざるところ。もし盡くこの法をもつて一概に人を繩^たらざると。さば人みな罪を獲て手足を措く所なからん。

ここに一分火耗とは、三十九年、火耗の「禁止」に關する帝の嚴命を受けた新任河南巡撫の徐潮が、令を下して「一分」を過ぐるなからしめたと傳えられる、その一分とともに、加一すなわち一割のことであつたと見なければならぬ。けつきよく、その一節は、加一火耗の私徴がほとんど公認されていたことへの明證なのである。おなじころ趙申喬が湖南に關して、天子が特に諭旨を頒つて、盡く私徴を革^やめしめられ、又た官の廉を養う手段がないと貪に口實を與えることになるので、「火耗を量留してもつて各官の交際・日用の需にせしめられた」といつている。必ずしも局地的な諭旨とみる必要もないであらう。ついで五十四年十

二月五日、陳瓚が福建巡撫に調任された。翌日かれは帝にお目どおりして聖訓を仰いだ。帝が、福建には「加耗」があるかと尋ねる。瓚は、臺灣の三縣では、錢糧を徵収するのは「火耗」はありません、と答える。もちろん、福建本土ではあります、と言うことの婉曲な言い廻しにすぎない。そこで帝はいう。

加耗はむろん好いことではない(原不好)。もし禁絶したら、恐らく州縣官は又た何かと悪いことをして錢を取るだらう。従前、各州縣には「存留」という一項の銀兩があり、まだしも「公費」の出處があつた。のち存留銀兩をそつくり戸部に歸^{かへ}すことに決まつて、州縣では費用の出る所がなくなつた。もし加耗をすつかり禁じてビタ一文でも許さぬとなると、どうしてやつて行けよう(恐行不去)。

帝はさらに、こう追つかぶせている。「清官」に作ることもとより結構だ。だが朝廷に替つて仕事をテキパキやつてのけてこそ、好いのだ。ただ徑^{くわい}徑^{くわい}とみずから守つていたところで、何の役に立とうと。陳瓚が、「加一火耗ぐらいは大目にみるべきだらう(似尙可寬容)」という帝の言葉に

對して、直ちに、「しかし明諭してその加添をお許しになつてはいけません」と應じて、帝になるほどと思わせたと伝えられるのは(『實錄』二九九、六十一年九月戊子)、當然この時のことではなければならぬ。

同じ陳瓚がその後一年あまり、五十六年二月に、福建省・惠安知縣田廣運等十二員に對し、破格の奨勵ありたきむね推薦の疏を上つた。その理由とするところは、彼らが催科によく撫字を寓し、重戢を用いず、「火耗を加えず」、擲移・虧空なく、起解の錢糧は歲内に全完したからであつた。

康熙帝はこの時こういつている。この奏は大へん善ろしい。錢糧を徵收するには「惟だ少しの火耗を加える」だけだと、百姓は輒納し易くて、錢糧は斷じて欠缺するにはいたらないのだと。田廣運らはみな首尾よく議叙にあずかつたという。少しの火耗——加一程度の火耗は、火耗を加えずと言つても少しもおかしくないほど(一五五頁參照)、政治的『社會的』にはその私徴の公認されたものであつたのである。

私は二度まで火耗の「私徴」について、默認とはなく「公認」という言葉を使つた。ややパラドキシカルだが、事實は事實だから仕方がない。康熙六十一年十月甲寅、す

なわち帝の死の直前の上諭には、定例では、私派の罪は甚だ重い。火耗の一項は特だ、州縣官には供應が甚だ多いので、正項の外において、ほんの些微ばかりを加えてその不足を助けているので、原とも「私事」に屬するといつて(『實錄』)。公然、藩庫に収めさせるといふ處置までは取れなかつたけれども、ともかく帝は、その州縣官の私事としての火耗の徵收、したがつて入己を、數量的には條件つきでといえ言わば「公認」する立場をとつていたのである。王慶雲流に表現するなら、「公義」をもつて人に責めるためには、まず「私情」を恤れむのが聖主の道だという心づもりからでもあろう、帝は「明諭」こそ選けたれ、默認というには餘りにも大つびらな態度で火耗の私徴を許していたのである。少なくとも四十年前後からあとでは。

三分の火耗をすら斷然禁絶させようとした順治帝と、加一火耗の私徴は公認しようという康熙帝と——時勢の移ろいの激しさに、いまさらながら驚かざるを得ないであろう。集團の力はしばしば法を無力にする。この場合も要するに、多數派漢人官僚の集團的な威力が事態をここまで持ちこんで來たのである。乾隆帝によると、康熙年間に當つて關差

(税關への欽差官)には各々專員があつた。彼らは恣意に侵蝕し、但に贏餘がないばかりではなく、正額にさえ足らなかつたが……而も「當時の風氣は俱に缺額を視て分の當然のところとしていた」という。往時の官場の空氣を察するに足るであろう。五十四年十二月八日、康熙帝はあの陳瓊にはなむけしてこう言つてゐる。お前の請訓について、説うべきことは昨日みな言つてしまつた。つまるところ、清官に作ること、もとより結構だ。ただ、清で刻だと、人々がおちおち、できないのではないかと恐れる。要は「清にして刻でない」のが好いのだと。「清而不刻」——かの道學者嚴虞惲のいう「清而不絶物」とどこが違ふのであろう。強いて違ひを求めるなら、前者がやや抽象的で、後者がやや具體的だというだけで精神的には同じものである。

康熙帝がその晩年、五十年の長い治世を回顧して、ひとり漢人をもつて難治となすと述懐したことは餘りにも有名な話である。ほとんど敗殘者のせりふにちかい。じじつ、火耗問題をとおして見られる帝は、これまたやや逆説的な言い方ながら一箇の敗殘者だつたのであり、マンシェウ人的な善意と嚴格さとは、帝の晩年、寛容の聖主という美名

の代償において、漢人的な良識と如才無さ、もしくは才覺と惡智惠との前にもろくも膝を屈したのである。

(f) 私収された火耗の三つの使途の分析

絞斬の極刑によつてよろわれた、マンシェウ人的な成例・祖法を見ごと骨抜きにしてしまふ。恐ろしい漢人官僚集團の威力ではある。それにしても、何が、うちから彼らを鼓舞してこの威力を振るわせていたのであろうか。

持つて廻るまでもなく、それはその漢人官僚集團のもつ特殊な性格——これは大事なことだが、歴史的社會的に規定されてマンシェウ人による支配の以前、すなわち明代、あるいはそれ以前から持ちつづけてきたと思われる特殊な性格であつた。國家の公的な行政組織である「以前」において、また「以上」に、彼ら同志のあいだの全く私的な企業組合、といつて悪ければ一種の生活協同組合であつた。でもいふべき、往時のシナの官僚機構にまつわる特殊な性格であつたのである。簡単にいうなら、古いシナの特殊な政治社會のうちでは、官僚たちが、いわゆる「國家」からして公的に、十分な生活上の保證を期待することができない。しかも彼らには、セミヤミズになるのが嫌やなど

ころか、よりよい日常、豪華な生活への欲望が人一倍によい。銀の魅力・火耗の誘惑といえども、つまりはその欲望充足のための前提的な現象にすぎない。けつきよく、彼ら〔明代・清代いつの場合の「彼ら」であつてもかまわぬが〕は、つよい共通利害の打算と感情とのもと、彼ら同志の暗黙の合意の上に、ほんらい公的な行政組織であるべきであつた官僚機構の性格を、全く私的な一種の協同組合の方向にねじまげ、それによつて彼らの所期の目的を達しようとしていたのである。

漢人官僚集團のもつその特殊な性格をより具體的に知るためには、何をおいてもまず問題の火耗、州縣官によつて私徴入己された火耗の行衛、つまりはその使途を追求せねばならない。火耗問題研究の眞の重要さも、實は掛かつてこのところにこそ存したのである。

清初、とくに順治後半から康熙期を通じての州縣官たちが、事實上、平均して毎年どのぐらいの火耗を入己していたかは、精密にはともかく、大體のところなら簡単に割り出すことができる。『會典』によると、康熙二十四年代の州縣數（土州縣をのぞく）は、直隸州二十七、州百八十八、

縣一千百五十九、計一千三百七十四。雍正二年のそれは、直隸州六十五、州百五十一、縣一千二百十一、計一千四百二十七。まず大體千四百と押えていい。一方、地丁錢糧の額徴數はとなると、康熙二十四年のそれは、かつて記しておいた起運銀と存留銀とを合計するなら、二千八百二十三萬兩（弱）（一四三頁）、田賦銀（二千四百四十五萬兩弱）と徭里銀（三百二十九萬兩強）との合計數では、それよりすこし少なくて二千七百七十四萬兩。雍正二年のそれは、それぞれ三千二十八萬兩（強）と二千九百六十五萬兩（強）とである。二種の計數の差違（四十九萬兩と六十三萬兩）のよつて來たところを明らかにしなかつたが、この程度の差違では、どちらに依つたところで結果にちがいはない。要するに二千八・九百萬兩程度であつたとしてよいのである。

けつきよく、清初の州縣官が「國家」の正供・正項として徴収せねばならなかつた地丁銀數は、一州縣あたり、毎年、平均して約二萬兩であつたと見られる。數ある州縣官のうちには、そのさい全然火耗を私徴しないか、しても毎兩五分・七分といった程度に止めておいたものも絶無ではなかつたかも知れない。しかしそのような風變りな清官中

の最清官の数ともなると、全體の前ではそれこそ九牛の一毛であつたのである。多數のものは、いわば社會的な通念・常識となつていた「加一」もしくは「一分」前後の火耗を私徴し、さらに相當の多數者が、加一五・加二程度のそれにまで手を出していたものと考えられる。康熙十九年、直隸巡撫の于成龍によつて疏劾された青縣知縣の趙履謙は、額賦銀一萬餘兩を徴するに際して火耗三千餘兩を多収していたという。加三の火耗である。さすがに、加三・加四の耗銀をものする猛者もそう多くはなかつた事と察せられるが、それにしてもその少なさは、いわゆる最清官連の少なさと果たしてどちらがどちらであつたのであろうか。それより問題は、その加耗率の平均値である。正確なことはもちろんつかめるはずもないが、大體「加一五」前後、たとえば康熙四十年代に湖南省衡山縣の知縣が、季ごとに火耗銀約一千一百兩、年に積もれば四千四百餘に取つていたといわれる場合の、毎兩につき一錢六七分といつたところ（一五五頁）などが、案外その平均値に近かつたのでは無いであらうか。もしそうだとすると、清初の州縣官が、正供の徴収に附隨して私徴入己していた火耗銀は、一

州縣あたり、毎年、平均して三千兩から三千五百兩ぐらいであつたと見なければなるまい。ひかえ目にみて。

毎年三千兩から三千五百兩。米價をやや高めに、石六錢（二四一頁参照）として換算しても、五千石から六千石。十對六の割りで日本の石に直してみても、三千石から三千五百・六百石となり、封建期の日本にひきあていうと相當な大身なみの石高である。では、かれら州縣官は、この収入分を一體どのような使途に消費したのであろうか。彼らはそのすべてを、私家の生活費ないしは奢侈の費用に廻わし、もしくは、貯藏し、蓄積してしまつて居たのであろうか。むしろ、そうする事ができたであらうか。

そうは行かなかつた。まず彼らの私冊（二五一頁）である「雜出簿」の款目を調べてみよう。汪輝祖によるとこの帳簿は、(1) 捐せねばならぬ（應捐）、(2) 贈らねばならない（應贈）どうしても省くことのできない者。(3) および日用の費^づわねばならぬ（應費）各項とを記すためのものであつた。かれらの全収入——必ずしも火耗分だけだとはいわぬが、少なくともそれを主たる成分とする彼らの全収入のうち、土地や商業に投資し、あるいは現銀としてカメにでも入れ

て藏したかも知れない蓄積分（廣義にはこれも「應費」のうちに算えられよう）をのぞいたものは、だれの場合もほとんど例外なく、これら應捐・應贈・應費の三つの用途に向けて支出されていたと見てよい。應捐の支出とは——これまで引用した文献のうちに例證を求めるなら、さし當り、康熙帝が州縣の費用つまり「公費」のために、何ほどの加耗は大目にみてもよいという場合の（二五七頁）、州縣の費用に役立てることである。應贈のそれとは、やはり康熙帝が、火耗を量留してもつて各官の交際・日用の需にさせたという場合の（二五七頁）、「交際」の需のための支出に外ならない。應費あるいは日用應費の支出については多く説明を費すまでもない。これこそ純粹の私家の生活費としてのそれであつたのである。念のため、さらに他の一つの文献のうちにその例證を求めるなら、のちの火耗提解政策の立役者の一人・諾岷の『清史稿』本傳に、明らかに康熙年間の實狀を傳えて、

各直省の賦を徵するや、正供の外、舊くは「耗羨」あり。數の多寡は定めなし。州縣は、(イ) これをもつて上官に供し、(ロ) 地方の公用に給して、(ハ) その餘を私

せり。〔上官も亦、往往公用に藉りて州縣に徴して提解せしめ、因つてもつて自私せり〕。

というものを擧げておくのが適當であろう。

そこで問題は、それらの三つの支出項目の間に割りあてられていた、數的な比率はどうかと言うことである。これについては康熙四十年ごろ廣西巡撫を勤めていた彭鵬——（これも清官派の一人で、二十七年には、居官清正、民の錢を愛しないというので特に銀三百兩を恩賞されている）——が、まことに面白い事例を傳えている。かれの疏文に

よると、そのころ粵西の州縣では、何かにつけて私派を行之巧みに名色を立てて「均平」といつていた。……州縣の大きいものは銀三千兩を派し、中下のものは一二千兩であつた。不肖の官吏は、先ず均平を徵してから後で正課を徵するありさま。ひどいものになると、均平は徵収して入己し、いざ公事があるとなると別に科派を行うのもあつた。均平を派しないものは、又た盈あまを火耗に取つて、明加・暗加・偏針・脫圈などの弊があつた——という。要するに廣西には、私派とはいえ、性質じよう火耗とまぎらわしい「均平」というものがあつたのだが、これに關して彼が、

均平の一項は「公事」に費すもの十の二にして、「餽送」に費すものは十の六・七（一本作「十の六」）なり。

と言つてゐるのは、意味深重である。公事に費すものが應捐の支出にあたり、餽送に費すものが應贈の支出にあたることは論をまたず、残る十の一・二（十の二）が應費の支出として日常生活の用途（および貯蓄）に向けられたものであつたこと、これまた言うまでもあるまい。しかもわれわれは、これをもつてそのまま火耗の場合を類推することができよう。

この比率をみると、人によつては、その應贈餽送の部分の多すぎることゝ怪しみを感じるものも無いではないかも知れない。確かに多いことは多い。しかし、そのご雍正帝が火耗の歸公を斷行した場合、それがどのような使途に振り向けられたかを調べてみると、かつての應贈餽送分に相當する、直接的な徵稅窓口業務者でない上級機關への配當分の比率がひじように高い。詳しくは後節にゆずり、ここでは一例だけを擧げておくなら、雍正七年、福建巡撫の劉世明は、省内の火耗の處置について次のような試案をもつていた（二月二十五日奏摺）。すなわち、通省の地丁錢糧は

毎年ともに一百五萬兩、每兩加一の割りで火耗（他に糧米養耗九萬有餘その他あり）を取るが、これに併戰をあわせると每兩につき一錢四分となる。全附加稅を十四股に分ける。そのうち四股だけが「知縣の養廉に存し並びに該縣の公用に充」てられる。汪輝祖流にいわば、これらこそ應費と應捐との二項に外ならない。のこる十股のうち、一股は直屬上官である知府の養廉に分給され、八股は布政司庫に歸入される。餘つた一股は連絡費・運賃などの雜費だから、しばらく無視してもよい。司庫に歸した八股は巡撫・布政使・按察使・道台などの養廉に分給され、無著の虧空の捐補がこのうちに含まれるが、要するにこの八股と知府への一股、あわせて九股が應贈の一項に相當する。結局この場合も、「雜費の一股をのそけば」應費・應捐部分が一處で十の三、これに對して應贈部分は十の七となり、彭鵬の所傳と期せずしてほとんど一致する。その所傳の應贈部分が「多すぎる」という心配は少しもない。

私としてはもちろん、だからと言つて、この州縣官の雜出簿中における應贈部分の比率——清初、おそらくは明代およびそれ以前からの、ふるいシナの官僚機構をその基底

において特徴づける、この重要な比率（家計表における食費の割合に關するエンゲルの系数をまねて、「彭氏系数」と呼んでおくのが便利かも知れない）がいつでも十の六七であつたなどと言いはるつもりはない。より高かつたことも、より低かつたことも有つたであらう。時と處と、そして人との如何によつては。しかしここでは便宜、それを十の六と踏まえて議論を進めていくことにしよう。

そこで三つの支出項目のより具體的な分析だが、まず第一には、州縣官にもつとも身近かな意味をもつ應費日用の項から始め、ついでその本職と密接に關係する應捐公事の項におよび、最後にもつとも問題の多い應贈餽送の項、いわゆる彭氏系数の項に觸れておきたいと思う。

(一) 應費日用の項。一州縣官あたりのこの項の平均支出額は、全體の十の二として、毎年六百兩ないしは七百兩であつたことになる。しかもこの金高が、彼ら一家の生計に對してどんな意義をもつていたかを知るためには、われわれは先ず俸薪、つまり俸祿・柴薪などといわれた、彼らに對する「國家」正規の給與狀態に一べつを與えねばならぬ。

清初の官吏に對する給與體系は、明代のそれを參酌しながら、順治の初年から四五年前にかけて、大體作り上げられたものであつたのである。京官たると外官たると、文職たると武職たるとによつて、給與額高に多いか少ないかの開きこそあれ、原則としては、官職品級の高下によつてそれぞれ一定の俸銀および祿米（京官のみ）を與えるとともに、別にその職任の種類によつて、これまた、一定の公費（京官）とか柴薪（外官）とか呼ばれる諸手當を與えることになつておつた。とくに京官文職には、その乾隆二年らしい、正俸と同額の恩俸¹⁰が加増給與されるようになったが、この特典は清初にはまだない。

そこで問題を州縣官の場合に限定することにしよう。清初、彼らが一體どのくらいの給與を國家から受けていたかというに、まず各州知州だと從五品官、その資格で彼らは俸銀を年に八十一兩受ける。ほかに順治四年以後は、手當として薪銀が年に四十八兩、心紅紙張銀が三十兩、修宅家伙（家具）銀が二十兩、迎送上司傘扇銀が十兩つく。メめて百八十九兩になつた。知縣になると少なくなる。京縣知縣だと正六品官で俸銀は六十兩、各縣知縣は正七品官で四十

五兩。手當はどちらも同じで、薪銀は三十六兩。以下の三種は知州のそれらと同額である。メめて京縣の場合は百五十六兩、各縣の場合は百四十一兩となつた。ただし、そのうち修宅家伙銀二十兩は、州縣とも順治九年に眞ッ先に裁廢されてしまふ。けつきよく州縣官たちの年間俸銀収入——彼らの正入簿に堂々記録さるべきであつたこの種の収入は、順治十年前後でいうなら、大約百二十兩から百八十兩とまりであつたのである。

この程度の俸銀収入は、彼らの家計に對して、どのような影響力を持つていたのであろうか。これについては、清初の漢人系名宦の一人である魏象樞の意見に耳を傾けることにしよう。朝廷が懲貪の法を行おうとするなら、必ずまず、廉を養うための祿を制すべきだとする主張の一とこまに外ならない。

今、一品より九品に至るまで、毎歳の「俸」入、多き者も二百兩を過ぎず、少なき者は三四十兩に過ぎず。このほか京官には「公費」あり、外官には「柴薪」ありといえども、俱に幾くも無きに屬せり。いやしくも俸を加うるに非ずんば、何をもつてか廉を養わん。

この上疏はその趣意からみて、順治十二年における懲貪令（二三九頁参照）の發布の前後に、かれが吏科給事中としての資格において行つたものと見てよい。とすると、そのころでもすでに、その程度の俸銀収入では、州縣官をふくむ官吏一般が、とうてい人並みに暮らしを立てることができなひと考えられていたわけである。國家の給與狀態はしかも、このような象樞らの意向にもかかわらず、それ以後わるくなる一方で改善されることはなかつた。『會典』によると、早くもその翌十三年には、在外文官の柴薪（銀）・蔬菜燭炭銀（後者は運使・各道以上の官にのみ給與）がともに裁去され、ついで康熙七年には、各官の心紅紙張銀も裁減をうけ、知州および知縣のそれは十五兩に切りつめられてしまつた。柴薪銀などがこのとき一度に全部裁去されたかどうかは、康熙四十年代の湖南省關係の文獻に、「今年、柴薪は〔旨を〕奉じて革められ、又た火耗もなし」などという語が見えることからすると少し怪しいけれども、大勢としてはそのとき一度に裁去されたものと見なければならぬ。けつきよく、州縣官の正規の俸銀は、毎年、七十兩から百二十兩見當という惨めなことに成つてきたのである。

惨めとはいえ、丸まる手取りになるなら未だしもであつた。その俸銀が、とくに三藩の亂後は、公捐の名のもとに、しばしば初めからその一部もしくは全部を差つ引かれるようになったこと、これまたすでに前述のとおりである（一四八頁）。「海^{しほ}りに内外を歴^し官^しし……、常^{じょう}俸^{ほう}のほかかつて一錢^{せん}だも受けず、寸絲粒粟も皆なこれを家中に取る」——とそういわれた張伯行のように、物質的にどうか、環境的に恵まれた官吏はそうザラにあるものではない。州縣官どころでは、とくにそうである。かといつて誰れしもセミヤミミズにはなりたくない。他に生計の資を求めざるを得なかつたゆえんであつて、そのさい、歴史的^{歴史的}社會的^{社會的}な習慣じよう最も良心の抵抗をうけずにすむ路線が、これを火耗の私徴に求めるものであつたのである。小民に對する善意のゆえに、貪官に對しては厳しすぎるほど厳しい態度を示したマンシェウ人といえども、とくに三藩の亂後は、この國家給與の貧困さに對しては目を被うわけにいかず、いな應なく、加一程度の火耗の私徴を默認する、というよりは公認する方向に向かわざるを得なかつたのであらう。

それにしても入己の火耗は、應費の分だけでも正俸とは

ほとんどケタが違い、後者の六倍から十倍ちかくなつてゐる。米價との釣りあいからいうと相當の大金だが、これを加えた場合の彼らの生計は一體どうなつたことであらう。

州縣官自身については、直接、あまりはつきりした結論を得ることができなかつた。しかしその他の文武官僚の場合から類推すると、大體の見當ぐらひは着かぬこともない。

一般的にみて、清初（順治—乾隆初年）の官僚の生計について最も特徴的だと思われることは、意外なほどのその家眷・家口の數の多さである。家口といつても、必ずしも血縁者ばかりではない。狹義にはともかく、廣義の場合には、いわゆる家人（奴僕的なもの）・奴僕から恐らくは幕賓・親友などにいたるまで、要するに州縣官が、情誼からにもあれ、事務のためにもあれ、その衙署に居をあたえて扶養してやらねばならなかつた人口を含めて指したものであらうが、ともかくその數が非常に多い。これは雍正期の武官の場合だが、副將から守備ぐらいまでの將校で、家口は大約「數十人」を下らず、千總・把總の微員でも八口ぐらひはあつたといふ⁹⁹。またある將軍は、自分の家口は親丁はただ

二子あるのみで、合家でも四十餘人に「すぎない」と稱し、他の將軍は事もなげに、自分の全家は「二百餘人だ」と奏上している（後引）。同じ時期の文官の場合は、そのもつとも極端な事例を、湖南按察使・遲維臺の一家のうちに認めることができる。彼の家口は衆多で約「五百餘人」にのぼり、全部を衙署内には収容できなかったたので、半ばは衙門の外にあつて住まわせたと伝えられる。まるで一大隊である。

では、この大家口を擁する當時の官僚たちは、その家計を維持するためにどの程度の収入、とくに銀でのそれを必要としたであろうか。

家口數に大小があつたばかりでなく、生活態度も一人ひとりについて區まちだつたのである。一概にはいえないけれども、何天培——さきほどの第二の將軍で、蘇州巡撫事を署理していた彼は、雍正元年十月十九日（養廉銀制以前）にこう言っている。雑多な規例は到任いらい禁絶したが、ただ布政司衙門には臣への規例銀が〔年に〕四千兩ある。このほか亦た些小の陋規もないではなく、陸續とつて日用につかつている……ので、衣食に事缺かないと。別に將軍と

しての實入（いわゆる親丁名糧）があつたのか無かつたのか、その點はつきりしないが、もし無かつたのだとすると、四千兩あまりで二百餘人を養つていたことになる。一人あたりの經費、年約二十兩たらずである。同じころ（元々二年）江西布政使の任にあつた石成峨は、自分の家口——この場合の家口は狹義のものであつたらしいが——は「衆多」なので、日用薪水のためにも「四千餘兩」が必要だと主張している。ついで三年五月六日、當時陝西糧道をしていた許容は、彼の署内の幕賓・親友の束修、家人・夫役の工食、ならびに大小家口（狹義）の衣食薪水のために、「毎年」ほぼ「三千兩」を必要とするむね上疏を行い、そのご六年ばかりの頃の雲南廣西總督・鄂爾泰の意見では、かれの家口のための薪水の資は、毎月五百金として年に「六千金」もあれば十分だということであつた。

これらにも増して興味を引かれるのは、雍正の中ごろ直隸全省提督・楊嗣と正定鎮臣・魏麟とのあいだに交わされた親丁名糧（武官の養贍家口從僕の費）に關するセチ辛い問答である。會審のため涿州におもむく途中、提督がばつたり鎮臣に出會つた。鎮臣がまず、自分の食つてゐる親丁名糧は

定額（六十分）に足りない。自分の家口は「四十餘人」だから、六十分いっぱいにして貰うと、どうやら養活せるのだからと大いにぐちる。提督は答えていつた。自分が正定にいた時には、三十分糧でかつて「百十餘人」を養つていたのだ。いま貴鎮は四十餘人、それで反つて養活がたぬわけがあるのかと。⁸⁴この場合の一分つまり兵丁一人分とは、馬兵（毎月銀二兩）歩兵（二兩五錢）各半の原則でいくと年に二十一兩だが、楊鯤關係の他の文書に、八十分を二千三百兩とするものから逆算すると二十八兩七錢五分となる。⁸⁵後者には他の要素が加わっているのかも知れない。いま中をとつて約二十五兩とすると、三十分では七百五十兩になり、六十分では千五百兩になる。鎮臣は一人あたり二十兩足らずでは苦しい。四十兩近くはぜひ欲しいという。提臣は、だが、一人七兩足らずでもやれた實例があるじやないかと返す。——州縣官と武官とでは、祿米のある無しだけでも條件は違つてくるわけだが、しかしこれなどは、前者の生計を考える場合に少なからず参考になるのではないかと思う。

けつきよく清初の州縣官の生計は、その扶養すべきであ

つたいわゆる家口・家人の数を、ごく控え目に見つもつて平均三四十人と押えたところで、年間六百兩ないし七百兩の金額では、たとえ養活できない程度ではなかつたにせよ、決してゆとりの有るものとは言えなかつたのである。

（二）應捐公事の項。われわれの平均人的な州縣官に割りあてられた金額は、この場合もやはり年間六百兩ないし七百兩である。

本項は別の言葉でいうと公費（銀）もしくは公用（銀）に相當する。もつとも同じ公費とはいへ、中央政府の戸部に起運収庫された正項錢糧のうちから支出され、かつその性格じよう、外官の柴薪に見あつていた京官のいわゆる「公費（二六五頁）」とはやや異なる。また晩年の康熙帝によつて、従前、各州縣には存留という一項の銀兩があり、まだしも「公費」の出處があつた（一五七頁）と述べられた場合のそれも、實は、順治十三年に裁去された外官の柴薪（一六五頁）を念頭においての發言ではなかつたかと疑われてならない。ここでいう公費とは、かえつて最近、われわれの協同者の一人である岩見宏氏によつて見事に分析研究され、簡明には「公事または公務を辦理するための費用」だと定義され

ている場合の、その公費を意味するものに外ならない。雍正期的な意味での公費といいかえても好いであろう。

ところでその「公事または公務」の公事だが——（もちろん一口に公事とはいえ、文官と武官、同じ文官でも民政擔當者と關稅・鹽課その他の特殊事務の擔當者、同じ民政擔當者でも親民官と上級監督官とで違つてゐる點も多かつたわけだが、ここでは主として民政關係の文官、とくに親民官の場合を念頭に置きつつ、論を進めることにしよう）

——その主要なものは、すでに岩見氏も多くの文獻についてその事例を指摘しており、またかつて康熙四十年において直隸巡撫の李光地が、前任者、および彼自身の參劾した數名の「州縣官」の錢糧虧空事件に關連して、虧空を承審するものの處分を嚴定されんことを請うた上疏のなかで、きわめて直さいに、

近ごろ虧空 多し。大槩は、(イ) 城池を修め、(ロ) 倉廩を蓋い、(ハ) 河渠を濬え、(ニ) 學宮を葺する等の「公事」の那移に藉口して詞となせり。あに操守謹まず、錢糧を虧蝕する人にして、反つて能く政務に留心すること此くの若くならんや。

と斷じてゐるのでも明らかなように、(イ) (ロ) (ハ) (ニ) の四項であつた。概して營繕・土木關係の事業なのである。

この場合の四項の公事は、その文脈上、地方の正項錢糧つまりは存留錢糧で賄われていたかのように受けとられるかも知れない。また、康熙帝は前述のように——結果からみると、あるいは帝の思い違ひだつたかも知れぬが、「存留」の一項をかつての公費の出處だとみていた。いわゆる公事——(イ) (ロ) (ハ) (ニ) の四項をその主要なものとする公事の性格、とくに財政史的な性格を正しくつかむためには、まずこの點の疑問から正してかからねばならぬが、私としてはやはり、それら四項の公事たる本らい存留錢糧をもつて賄われるべきものではなく、従つて李光地らによつて參劾された州縣官たちも、文字どおり公事への一時的な「那移」に「藉口」して正項錢糧を着服したというに過ぎなかつたように思う。その理由とする所はこうである。

康熙期の地丁の存留分は、全天下總計、毎年ほぼ六・七百萬兩見當（一一頁・一四三頁）。その全部が州縣に遺留されたわけではなく、小部分ずつは布政司庫に集めて全省的用途のために存留されたが、今しばらくその點を無視す

ることが許されるなら、千四百州縣では一州縣あたり平均五千兩足らずとなる。しかもこの平均五千兩たらずの州縣存留分錢糧は、前にも數件の實例が出ており（一一一頁）、また他にも相當數の例證（一例後出）があるように、原則としては官役俸工・驛站（里甲夫馬）（ふつうはこの項の經費が比較的に高額）および雜支の三項目に對してのみ支出さるべきものであつた。それらのうち前二者については問題がない。それらの使途は明らかにいわたる「公事」的でない。問題になりそうなのは「雜支」の一項だが、實はこれも、各壇廟を祭るとか、廩生の廩糧をまかなうとか、要するに廩糧・祭祀・賓興・鄉飲の費（一四二頁參照）といった性質のもので、當面の四項とは性格的に關わりがない。けつきよく存留正項錢糧の支出費目のうちには、四項の公事費に見あうものを見出すことができないからである。

問題の四項の公事のもつ財政史的な性格については、かえつて、例えば康熙末葉に編纂された『（山東省）壽張縣志』に、「丁地存留」の條に直ぐつづけて「徭役」の條を設けているようなのが、その解答を與えてくれるのではないかと思う。

この場合の丁地存留は、この地方の特殊性にもとづく河道夫食銀（一七八兩、内三四三兩は司庫起運、實存一四四〇兩。○錢以下それぞれについて四捨五入）を除くと、あとは例によつて官俸役食銀（一九七五兩。實存一五二七兩）・里甲夫馬銀（四九五兩、實存二九八兩。例外的に少ない）雜支銀（九七兩、實存七四兩）と三項に分けられていて、合計實存一千八百九十九兩。州縣平均分以下である。これに對していわたる徭役の内容には、たとえば漕河の週流挑淺の費がある。毎年一次、小挑にあう場合の淺夫の費用で、一名あたり錢十二千（千文＝貫、貫＝銀一兩）、二十八名の割りで計算して共に大制錢三百三十六千文を用意し、管河主簿に交付して給發することになつてゐた。しかもこの種の費用は、「並つて丁地錢糧内から出たのでは非かつた」という。大挑の年（五年に一度）にあうと、さらに守口夫五十名を増さねばならない。一名あたり錢四千文で、計大制錢二百千文である。また、毎歲知縣みずから河院の衙署を捐修する銀としても十三兩五錢が計上されている。壽張縣にはこれらのほか、小縣にも似ず「徭役」條目下の經費が多く都合十三細目にもぼつてゐるが、それらはいずれも「地丁錢糧内には並つ

てこの項で開銷^{けっさう}されるものがなく、向^{まう}には民より出^でていたものと思われ、しかもそれらのうちの相當數のものは、知縣・滕永禎の來任した康熙五十一年いらい、彼の捐俸によつて賄^{まか}されたものであつた。私のいう、州縣官の「應捐公事」中での主要なものである(イ)(ロ)(ハ)の四項は、少なくとも性格的には、丁地存留條下の諸項目にはなく、かえつてこの場合のような「徭役」條下の諸項目に相當するものだと考えて間違ひはあるまい。そしてこの意味からすると、岩見氏が「公費的なものの源流をさぐると、人民の徭役に歸著する」(前引論文)といつてゐるのは極めて當を得た結論だと思ふ。同じ公費の語に、他にも別個の用途のあつたことはしばらく論外として。

壽張縣の場合は、引證した分だけでもすでに、いわゆる公費的なものの合計が銀で五百五十兩ほどになる。その他をいれると軽く二千兩を突破する。われらの平均的な州縣官が、その應捐公事の項下に用意してゐた六百兩、ないし七百兩、それだけで果たして、その公事を満足に仕とげることができたかどうか。引きあいに出された壽張縣の場合の特殊性——漕運の河道に沿うていたため、いわゆる公

事が平均量より遙かに多かつたらしい一事を十分考慮にいられたところで、それは少なからず疑わしいわけだが、しかしともかくわれらの州縣官、義理にも公事・公務などには熱心であつたとは言えない彼らは、足りなければ足りないで公捐・私捐の手もないではなく、何よりの儲け口である「私派」の口實にでもできれば尙おのこと結構であり、表面上は一應その程度のはした金で何とかお茶を濁してゐたのではないかと思われるのである。

それにしても、いやしくも「公事」と名づけられるもののための費用が、州縣官私家の生計費とそこそであつたとは恐れ入つた話である。これまた舊いシナを特色づける特徴の一つとして記憶さるべきであらう。

(三) 應贈餽送の項。最後に、前二者——應費日用と應捐公事との二項にもまして、シナの政治社會に特徴的な應贈餽送の項に移ることにしよう。この項に關するいわゆる彭氏系數の平均値は六十パーセント。すなわち、全火耗收入の過半數であつて、われわれの平均的な州縣官においては千八百兩ないし二千百兩となる。

この途方もなく巨額で、少なくとも今日におけるわれわ

れの常識を絶する「つけとどけ」の現象、すなわちその行為的な面からは多く餽送・餽遣・餽献・贈遺——婉曲には交際などと呼ばれ、實體的な面からは規例・規禮・陋規・陋例ないしは苞苴・賄賂その他の言葉で呼ばれている一箇の政治的・社會的な現象は、もしこれを系統だてて徹底的に研究してみようというなら、別に一章を立てて見たところで、それだけでは恐らくまだ十分とは言えないであろう。それほどにも間口のひろく、文献もゆたかな分野でそれはあるのである。しかし現在の私には、この分野をも徹底的に研究するだけの餘力がない。今はただ、主目的である火耗の問題を理解するのには是非とも必要だ、と思われる範圍内にその検討を止めておきたいと思う。

いわゆる陋規のうちには、時に「こころづけ」的なものも含まれるが、ここでは筋を簡明にするため、それを「つけとどけ」的なものに限つておこう。

すでに付け届けである。規禮・陋規の餽送が、下僚から上官に向かつてなされたものである事はいうまでもない。今の場合でいえば、州縣官からその上官に付け届けられたのである。そこで問題はどのような餽送關係が、發生的に

みて送り手・貰い手いずれの發意に始まつたかということである。もちろんこれは、文献によつて確定できる問題ではない、文献以前の問題だが、私としては、清初の官僚たちが「毎歳の俸入、多きも二百兩を過ぎず……京官には公費あり、外官には柴薪ありといえども、俱に幾くも無きに屬」するで(二六五頁)、上官連といえども特別の例外をのぞけばすべて經濟的に窮迫していたこと、しかるに彼らは州縣官に對して、絶大な權力を振るいうる地位にあつたこと——これらの二つの理由から、極めて常識的な結論だが、貰い手がわの意欲がその餽送關係の發生を促したものと見ている。この意味において、文献的な日付けこそおそれ、雍正期の河東總督田文鏡が、

上司の需索 已まざれば、各屬の供應 實に難く、小民に向かつて耗を加え派を加えざる能わす。自愛の州縣〔官〕あり、初めて仕籍に登るや、正にその幼時の學ぶところを發抒して以つて君に致し民に澤まんことを思うといえども、しかも臨むに貪得 厭くなく、分釐饒さざる上司を以つてすれば、廉を改め節を易え、大いにその平生の守るところを喪つて唯々として以つ

て命に従わざるを得ざるなり（六年九月八日奏摺）。

と論じて雍正帝を感動させ、また、從來は大法なれば小廉、上が行えば下が效つた。州縣が耗を加え派を加えても、その利は全く州縣の手にはいらず、その罪は全く州縣の官に在るのではない。巡撫・布按兩司より道・府・直隸知州・同知・通判にいたるまで、皆なその責めを辭することができな⁶⁰いと言葉するどく述べているのは、論旨に多少のいき過ぎはあるにもせよ、いわゆる餽送關係のもつとも本源的な實態を突いたものと言うことができよう。順治以來、他の人人の間にも同じ趣旨の發言が少なくない⁶¹。

しかしその一方ではもちろん、規例の送り手側の發意による餽送關係もあり得なかつたわけではない。下官は必ずしも常に受動者であるばかりではなかつた。順治十一年に刑科給事中兼大理寺丞の林起龍が、「州縣官が上司に媚^こび事^{つか}えて耗費、貲^{はか}らざるの狀」を疏陳しつつ嚴飭して禁革されんことを乞うたのも、そうした見方に立つての上言にちがいない。とくに清廷による嚴しい徵食の令の發布は、い⁶²つそう下級地方官吏の心理を餽送の方に驅りたてたらしい。その間の事情をかの朱之弼はこう説明している。すなわち、

この令、一たび出でて、天下には復た清官あらざらん。何となれば「有司（州縣官）の令の嚴しきを畏るるや、皆な民財を攫取してもつてその上官に媚^こび」、上官は朝廷の禁を挾んでもつて恫喝し、これを下に求めて至らざる所なく、貪らざらんと欲すといえども、勢い能わざればなり。清官これより變じて貪官となり、小貪これよりして變じて大貪とならん⁶³。

と。この發言には、意識的にもあれ無意識的にもあれ、漢人地方官のために、その經濟的立場を擁護してやろうという底意が働いていたように思われる。しかしともかくこの場合のように、參劾被罰をおそれる下級地方官が、主動的にその上官に對して餽送を行うようになる——時には縣官たちが、その直接の上司（府）を制壓、自己の非違について有りのままな事實で審結させないため、いわゆる遠交近攻より上層の權勢（督撫）に央托^{たうた}むようになることも、決してあり得ぬことではなかつたのである。

いわゆる餽送の現象には、こうして、上からの請求によるものと、下からの發意に基づくものとの二類に分析でき、發生的には前者がより本源的ではなかつたかと思われるが、

しかし現實的には、いわゆる魚心あれば水心であり、持ちつもたれつである。それらの二類の要素はほとんど例外なく相表裏して現われておつた。しかもこれこそ、後年、「康熙年間のまねをしてその〔耗羨の〕自取を聴いたら、必ず私相に餽送するようになるだろう」といわれたその餽遺・餽送の常態ともいふべきものであつたのである。

餽遺・餽送の常態を物語る文献はひじょうに多く、一々例示するまでもない。その代表的なものとしては、例えば『實錄』順治十二年一月壬子の條に、

有司（州縣官）の賢否は全く督撫の舉劾に憑つて、督撫は又た耳目を司・道・府・推（推官）に寄す。層層開報するは原と詳核を期するなり。近ごろは乃るに「上下扶同し」、「餽遺」の厚薄・情面の大小をもつて貪廉を顛倒し、循良をして上達するを獲しめず、姦慝をして反つて優考を膺けしめ、勸懲公ならず、吏治これによつて大壞せり。

とあり、また、康熙十七年における工部侍郎田六善の疏言の一部に、

臣おもうに、吏治を清めんと欲するも極めて效を奏し

難し。今日、官「督撫」に至れば、敢えて誰何するもの莫きの勢いに居り、大賢に非ざるよりは縦放ならざるもの鮮なし。「道・府」年ごとに規例若干なるに、

再た搜括を行う若干なれば、道・府所轄の官民は、これを道・府に賣るが如し。「州・縣」年ごとに規例若干なるに、再た嚇索を行う若干なれば、州・縣所屬の士民は、これを州縣に賣るが如し。

というものを舉げることができよう。餽送行爲を介して、いわゆる「上下」が、いかに緊密不可離に結ばれていたかを知る事ができるであろう。

私はこれまで、規例・陋規などの言葉を比較的ルーズに使つてきた。ここでもう少し嚴密に規定しておくなら、それらは要するに、上述のような餽送行爲が上下の衙門、もしくは大小の官吏のあいだに長年にわたつて繰りかえされ、いつしか道筋は踏みかためられ、金額もほぼ固定化し、ついには政治的・社會的に公認ないしは默認された慣習となつた結果、その贈収について誰れをもが「鬼神に質すべく人の共に知るところ（一五一頁）」として、ほとんど良心の苛責を感じないようになつていた「つけとどけ」のことに

外ならない。「常例・例規」などの語にはことさらそのニエアンスが強い。ただ、ここで注意すべきは、それらの常例・例規だけが、州縣官の負擔せねばならぬ「つけとどけ」の全部ではなかつたことである。田六善の言葉にも規例以外に搜括・勒索の行われたことが告げられていたし、また嚴虞惇も、陋規・常例のほかなる現象として「暮金 日に進むの」有りさまを述べていた（一五三頁）。また、順治十六年正月壬子の浙江道監察御史・仵邵昕の奏言中にも、近ごろ聞くところでは、有司が上官に餽送する際には、「常例」よりして外、「暮夜の金」がまたこれに數倍する。かつ小事の註誤によつて恫喝勒索されるので、勢いこれを民間に取らざるを得ない。その貪なきを望んでもできない相談だとはつきり斷言している（『實錄』）。われらの平均人的州縣官の應贈餽送の千八百兩ないし二千百兩は、當然これらの常例、ならびに暮金のためには、たゞ使われたと見て誤りないであらう。暮金は時としては、火耗ではなく「私派」で賄われたかも知れぬが。

われらの州縣官の財布はすっかり空になつたが、しかしわれらの探索の手はまだ緩めることができない。州縣官の

上官たち——いわゆる督・撫・司・道・府・推たち、なかんずくその上層者たちの懷中に納まつた火耗の使途、もしくは行衛をつきとめて置かねばならない。

康熙二十四年と雍正二年とを標準にとると、當時全天下の總督はともに七人（總漕・總河二總督を除く）、巡撫はともに十七人。大ざつばな話だが、一人あたりの監督下の州縣數は平均してそれぞれ二百と八十とである。一州縣官あたりの應贈餽送の火耗徵取分が毎年二千兩前後。そのうちどの程度が常例・暮金などの形で督撫に廻されたかは、確實には知りようもない。いま假りに控え目に見つゝもつて四百兩づつとすると、督撫の受取り高はそれぞれ毎年八千兩と三千二百兩見當となり、多く見つゝもつて六百兩づつとすると、それぞれ毎年一萬二千兩と四千八百兩見當となる。實際には、例えば總督には四百兩で巡撫には六百兩といつた風に、一州縣あたりの率にしては總督により少なかつたのかも知れない。いずれにもせよ、督撫には、形ばかりの本俸以外に、火耗の分け前としてだけでも——（というのは、彼らにはそのほか、武官としての資格において幾らかの親丁名糧（一六七頁）がついたばかりではなく、鹽規とか茶規とかい

つた特殊な陋規の實入りも少なくなかつたからだか——
 毎年三四千兩から一萬兩前後の副収入があつたわけだが、
 ではこの巨額な火耗の分け前は、一切これらの生活費・奢侈費に振りむけられ、ないしは、家計の將來のために土地もしくは商業に投資し、もしくは現銀として死藏されてしまつたのであろうか。

そうではなかつた。乾隆十年、御史の柴潮生は前々代を回顧しながらこう言つてゐる。さきの康熙年間には法制が寛略であつた。州縣官は地丁錢糧のほか自分勝手に「火耗」を徴収し、その陋規や匿税についても亦た、「政府で」かれこれ突つきまわすと言うことはなかつた（未盡剔釐）。上司はこそぞと分肥し、「京官」はこそぞと勒索し、遊客はこそぞと染指した。分肥すれば與めに蒙蔽かくしだてをしてやり、勒索すれば與めに游揚かたもろをしてやり、染指すれば與めに交通關ゆきしりなしをしてやる……と。すなわち、「地方」の上司のみならず、いわゆる京官までが火耗の分け前にあすかつていたのであり、しかもその場合の餽送は、柴潮生の文面のあいまいさにも拘らず、州縣官から直接おこなわれるよりは——もちろん、そうした事が全然なかつたと言うのではないが——

督撫司道のような上級の官僚の手を通して行われるのが普通であつたのである。

康熙十八年七月三十日（壬戌）のことである。康熙帝は滿漢大學士より以下・副都御史より以上の大官連を左翼門に召集し、侍衛官を遣わして上諭を口傳させた。折からの地震を天の警告として臣下を誡めようとしたのであるが、その一節には次のような言葉を見いだすことができる。

民生は困苦すでに極まるに、大臣・長吏の家は日に益々富饒なり。民間の情形は未だ昭著ならずといえども、近ごろ、家に衣食なきに因つて子女をもつて入京賤鬻するもの、數うるに勝たうべからず。その明驗にあらずや。これ皆な地方の官吏、上官に諂媚して百姓に苛派し、「總督・巡撫・司・道」又た轉じて在京大臣に餽送し、天生の限りある物力と民間の盡くし易き脂膏とをもつて、盡く貪吏の私橐に歸するなり。小民愁怨の氣、上天和を干おがし以つて水旱・日食・星變・地震・泉涸の異を召まねくを致せり（『實錄』八二）。

さらにその翌月の十一日には、九卿たちが上諭に遵つて當面の問題についての對策を議覆し、督・撫・司・道などの

官員がその赴任に際して在京大臣各官に謁見したり、あるいは任所から人を差して問候させたり、及び〔督撫たちの〕在京の家人や提塘（各省の駐京情報所）人が大臣各官の家と來往したりする場合は、その督撫司道と出首を行わない大臣官員とをもつて俱な革職する。若し〔家人たちの來往を〕知らない者は二級を降すに止める。……その在京大臣各官が督撫司道らと彼此餽送しあつたり、及び人を差して遠く任所に赴かせたりする場合も、大臣各官ならびに舉首を行わない督撫司道をもつて亦た俱な革職する。もし、事に因つて（特定の目的で）營求し、苛派して大臣官員に餽送するものがあれば、餽送・收受の人をもつて俱な革職して拏問する——ことにしたいむねを上奏した。この強硬方針は裁可されて直ちに各省に通知された。もちろん私としては、この新例が忠實に實踐されたなどとは思っていない。例によつて晝がいた餅に終つたのであろうが、ただこの新例は、「餽送」を媒介とする督・撫・司・道と在京大臣各官との結びつきを、その様相と程度とに關して親切丁寧に解説してくれるものとして珍重さるべきだと思う。

康熙十八年といへば、吳三桂はその前年病死し、いわゆ

る三藩の亂も峠を越していたとはいへ、清朝にとつては財政上、まだまだ苦しい眞ッ最中であつた。内外各官とも、只では懷中加減のさびしかつたこと言うまでもない。となると、康熙帝の指摘したような督撫らの在京大臣に對する餽送のごときも、あるいは一時的な特例ではなかつたか、と疑われる向きもないではないかも知れない。事實はしかし、決してそうではなかつた。これについても例證は少ないが、ここでは金額のはつきりしている一例だけを舉げておくことにしよう。順治十七年六月癸巳のこと、浙江道監察御史の季振宜が大學士の劉正宗を劾奏した。しかもその理由として振宜はこういつている。正宗がかつてその兄の喪のために休暇をとつて郷里（山東省）に歸ると、巡撫の耿焯が香奠だという名儀で「三千金」を餽つた。正宗がすぐさま受取つた（逕行收受）ところからみると、「平日の收受」がどのくらいだつたか判つたものではない。山東巡撫の餽獻がこうである。山東の司道府縣の餽獻がどのくらいだつたか判つたものではない。この調子でいくと、天下の巡撫・司・道・府・縣では又たどのくらいだつたか判つたものではないと（『實錄』）。山東巡撫（順治十一―十五）の耿焯

は、江寧巡撫（順治七・八）の土國寶とならんでその方面では惡名の高かつた官僚たちである。あまりよい例とは言えぬかも知れぬが、ともかくこれによつても、督撫らの在京大臣に對する餽送が、決して三藩の亂中の特異な現象でなかつたことは明瞭であろう。じじつ順治中にも、各衙門の大小官員のあいだには、いわゆる私交・私宴とともに、慶賀・「餽送」の風習が根づよく行われ、再三の禁令にもかかわらず、一向下火になる模様もなかつたのである。

われらの州縣官によつて私徵入己された火耗の行衛は、ともかくこの程度までは追跡することができる。しかも現在の目的のためには、この程度の追跡では十分であろう。それが當時の官僚機關の、あえて隅すみにまでとは言わななくても、ほぼ全面に行き渡つて、大小官吏の懷中を暖めていたことを確かめることができたからである。

(g) 清初官僚機構の二大支柱と火耗の役割

清朝のほう、大な官僚機構——マンシュウ人の參與を除いて骨格そのものは、明朝のそれをそのまま襲つたものだが——のもつ際だつた特徴の一つは、それが特殊な社會的結合關係の網目で緊密におおい盡されていたことである。

それも網目は一と色ではなかつた。康熙帝が、これら、地方に關わりある事務や官員の賢否を、諸臣の知らないわけがあるうか。鄰省の大吏でさえ知らないことはない。あるいは「師生」「親友」にかかり、あるいは「同年」に係り、あるいは「子弟・親戚」がその省で役人をしてゐるために、彼此たがい隠して上聞しないようでは、どうして事件の發生を豫防することができようといひ、また雍正帝が、お前らのような科甲出身の大員は數えきれない。……皆な「同年」「故舊」「老師・門生」のために掌扯爭相、偏袒姑容して名を沽り譽を釣してゐるといふ、師生・親友などの結合關係がみなそれである。

なかでも特に注意を要するのは、乾隆帝によつて、從來、師生・同年の袒護朋比は最も惡習であつたと喝破された、それらの二項である。同年が、同じ年度に科舉試験をパスしたものの同志のことであつたことは言うまでもない。これに對して師生すなわち老師・門生の關係とは、順治十四年正月戊午の上諭のうちに、事こまかに、

〔前略〕師生の稱謂に至つては、必ず道業 相成り、授受 自るあり。あに權勢に攀援して無端に親暱すべし

んや。近ごろは乃るに陋習 相沿い、會試・鄉試の考官 取るところの士、及び殿試の讀卷、廷試の閱卷、學道 考試の優等、督・撫・按の薦舉せる屬吏、皆な門生と稱す。往往にして事先に干謁して 徑竇百出、事後に酬謝して賄賂 公行せり。甚しきは平日 全く謀面せず、一旦 同方に仕宜し上下相關の分あるに至つて、輒かろしく師生の稱に妄託せり。あるいは屬官 名を借りて媚びを獻じ、勢に附して炎に趨き、あるいは上官 權を恃んで相迫り、恐喝して要挾す。彼此 利を圖り、相煽して風を成し、恬として恥ずるを知らず(『實錄』一〇六)。

と述べられているとおりである。雍正期の文獻によると、監貢生や屬員が門生として地方官に投拜する際には、少なくとも百兩前後、多くは千二百兩・千六百兩といつた禮銀を送りとどける習慣があり、また一たび門生が外職を陞授されるのに遇うと、老師・世兄から同年・故舊に及ぶまでが親しく「探望」を行うこともあつたという。探望とは、要するにタカリに行つたという事なのであろう。

師生・同年をその代表的なものとする特殊な結合關係の

綱目と、下は州縣官から上は督撫・在京大臣におよぶ、耗分け前の餽送を條件とする、他の特殊な結合關係の綱目——これらはいわば、清初のほう、大なる官僚機構を、その見てくれに消したい特徴を押しつけながら、左右からがつちりと抱きかかえていた二大外殻のようなものであつた。あるいは二大支柱と言ひ換えても好いかも知れない。それらの兩者は、たとえば化合物における分子と他の分子とのように、現實的にはもちろん複雑に絡みあつていたことと思われるが、少なくとも原理的には一おう別々のものであつたと見られる。前者がより人間的、より隨意的な關係であつたとするなら、後者はより機械的、より不隨意的な關係であつた。前者をもし人體生理における神經系統に譬えることが許されるなら、後者はむしろ循環系統にこそ譬えられるべきものであつたであらう。しかしともかく、それらは相寄り相助けながら、清初の官僚機構を強力に支えておつたのである。

問題はその支え方であつた。いやしくも「國家」の官僚機構なのである。それは當然「公」的な原理によつて公的に支えらるべきであつたと、今の普通の人なら考えたいと

ころであろう。「近代國家」における官僚機構が大體そうであるからには、實際的にはしかし、清初の官僚機構はほとんど公的に支えられてはおらなかつた。主としてはその神經系統と循環系統とがともに「私」的な性格を多分にもつていたせいであつて、官僚たちにとつて私利の存するところ、國家意志に基づく公けの諸制令、たとえばかの存留錢糧の銀七錢三微支制を有名無實化し、火耗の徵收や、私交・私宴、ならびに餽送に關する嚴しい禁令をまんと骨抜きにすることのできた、集團的な威力のよつて出てくる源泉だつたのであるが、中でも特に注意を要するのは、私がこの節で追求してきた、火耗關係の諸現象をおして見られる循環系統側における極端に私的な性格である。體軀自身のもつ一おう公的な性格にもかかわらず、その循環系統は全く私的な原理の上に立ち、私的に血を造り、私的に血を配するという生理が平然と營まれておつたその事なのである。清初の政治社會の實態、より一般的には舊いシナの政治社會の實態を理解するためには、是非ともこの特異な生理現象の性格を知つておく必要のあること——このことの重要さは、いくら強調しても強調しすぎることはないで

あろう。

清初の官僚機構における循環系統の元締め——造血器としての心臓部は、在京大臣ではなく、各省督撫でもなく、かえつて「國家」の錢糧事務の末端に位する窓口業務者としての州縣官たちであつた。「知縣は政府の單位なり。總て官僚制度の背骨なり(二三頁)」。いつ、だれによつて提起された命題であるにもせよ、この命題は、「知縣すなわち造血者」とみる時においてのみ、單に清初ばかりでなく、暫時の例外をのぞく清代のあらゆる時期を通じて動かしがたい迫眞性をもつ。

州縣官からの輸血によつて始めて生氣を保ちえた、その^いば、大なる官僚機構は、その私的な性格のゆえに、多くの場合^いい^わゆる「國家」と峻しく對立した。制令の無視がそのなによりの例證である。康熙帝がその晩年、その長い治世を回顧しつゝ、ひとり漢人を難治となすと歎じたことは有名な話である(前出)。英明で聞えた帝にしても、帝の前に帝に向かつて立ち^いはだかつていたこの餘りにも巨大すぎる建造物——漢人どもの^いば、大なる官僚機構からして、常に重苦しい壓迫感を受けざるを得なかつたのであろう。

(h) 小民・貧戸の犠牲における火耗の私取

最後にこの節の締めくくりの意味で、問題の火耗——一種の附加税とも見ることでできる火耗が、税種として果たして社会的にどのような意味をもつていたか。より端的には、それが「小民」に對してのみより、大きな犠牲を強いる、いわば大衆課税的な性格を、いちじるしく濃厚にもつていた事實を明らかにして置くことにしよう。

まず税制上ではどの程度の戸を小民・小戸というかが問題だが、大まかには、一戸あたりの年平均の納税額を算出し、その前後かなりの厚みをもつた納税額層にあるものを、それだと見なしても大した誤りはないのではないかと思う。その年平均の納税額は、康熙二十四年および雍正二年の地丁銀兩では大差がなく、ともに、毎戸、一丁でなら一兩二錢、毎戸一丁半でなら一兩八錢となる。この意味からすると、乾隆年間の所論ではあるけれども、孫嘉淦が、從來は錢糧を蠲免するに際し、貧富を論ぜず、ただ田を計して派鋤していた不合理を突こうとして、自分が一軒一軒指査したところでは、額徴銀が五兩以上にあるものは、即ち「富戸」に屬している。五兩から一兩にいたるものは均

しく「小戸」とする。數錢・數分から一分數釐のものとなると全く「貧戸」に屬しているといつてゐるのは、やや高目のきらいはあるが、ほぼ清初を通じての納税戸の格式の標準にする事のできるものであらう。

全納税戸のうちで、富戸・小戸および貧戸がそれぞれどのぐらいの比率を占めていたかは明らかでない。しかし常識的にみて、小戸ないしは貧戸の占める比率が壓倒的に高く、税額の絶対數においても、けつきよく小戸・貧戸の負擔額の方が、富戸のそれに比べてより大きかつたことはほぼ疑いのないところであらう。丁税と地税とが概して別々に取られていた雍正以前においては尙おさらである。附加税としての火耗の私徴額についても同様のことが言えるであらう。ただし、私がここで指摘したいと思う火耗の大衆課税性とは決してこのこと自體ではない。かえつて、康熙期の顧炎武によつては、

〔前略〕その〔火耗を〕取るや、兩には薄くして銖には厚し。およそ徴収の數、兩なるものは、必ずその地多くして豪にして力あり。もつて吾（州縣官）の短長を持すべきものなり。銖なるものは、必ずそれ窮せる下戸な

り。多くこれを取るといえども、敢えて言わざるなり。ここに於いてか、兩の加は十の二三なるに銖の加は十の五六なり〔後略〕（「錢糧論」）。

と證言され、乾隆期の錢陳羣によつても、聞くところでは、康熙年間の耗羨は州縣が私徴したが、「鄉愚」が多く輸して「紳紳・胥吏・豪強」にはその自便を聽すのが普通（往々にあつたという）と陳述されている、そのことを指すものでは、火耗の一項が「紳衿」の場合には加一ならびに加一五であつたのに對し、「百姓」には並びに皆な加一六および加二不等であつた事實を傳え、陳時夏もまた、江蘇省——浙江省とともに税の重い反面、耗の輕いところだつたといえるが——では、「紳衿・富戶」に對する火耗は、一兩につき六・七・八分不等にすぎなかつたのに對し、「百姓」の場合はそれが、包収の侵漁、銀匠の傾折などで、實際じよう一錢有餘に達していた事實を認めている。順治・康熙時代の遺制であつたこというまでもない。

紳衿・豪強はもちろん、多くは官僚たちの親類・縁者だつたのであり、彼らの社會的な影法師のようなものであつ

た。胥吏はこれに對し、彼ら官僚たちの好くいえば補助者、わるくいえばダニのような寄生虫であつた。火耗の徴収に際し、これら紳衿・豪強・胥吏に對して手心が加えられたのは當然のことであらう。加えられなかつたとしたら、むしろおかしい。しかも「紳衿に一分を免去すれば百姓に一分を加派する」¹¹⁰は自然の勢いであつた。その手心によつて逆に迷惑を蒙らねばならなかつたのは小民・百姓たちである。その迷惑についても、多くの場合、彼らが「敢えて言わなかつた」ことは事實かも知れない。しかし彼らとしても、内心は一分でも一釐でも火耗の輕からんことを願ひ、火耗の禁絶ともなれば雙手を舉げて喜びあつたであらうことは想像に餘りある。康熙三十八年のことである。湖北省襄陽府地方では、道臺名儀の揭示が出て各州縣の火耗・雜派が嚴禁されることになつた。喜んだのは民衆である。なかでも南漳の民・帥仁傑ら數名は、これを石に勒して永禁せしめようとした。結果は貪虐な知府のため、鎖拿送監されて拷問枷號を受けることになつたが、その事についてもまた怨聲が沸騰したという。同じ康熙の四十年代、湖南省茶陵州では李知州がまず私かに等子（みだう）を改めて、毎兩加一五

六の火耗を加える。その後任として州事を署した邊通判になると、火耗がさらに三分も多い。たまりかねた州民は衙門を取り圍んで署知州を辱罵したと伝えられる。¹¹²ともに、火耗が大衆課税としてかれらの生活を壓迫していた反證だとみることができよう。

ただし、上には上があつた。必ずしも課「税」とはいえないけれども、火耗以上に大衆の生活を壓迫していたのは、あるいは「私派」であつたのかも知れない。これまでも度度引用した趙申喬が、湖南省寶慶府について「豪強は私派の優免さるるを利とし、火耗のもつて偏ねく饒^ゆされ難きを恐る。棍蠹¹¹³は私派の烹肥を剥ぎ、火耗の分潤するに従^よし無きを恐る」というものがそれである。もしこれが寶慶府のみに當てはまる現象でなかつたとするなら、私派こそは大衆の生活を壓迫する最大の癌であつたと考えられねばならない。

火耗は實に、この私派について、小民・百姓大衆のやせ肩——毎戸年平均二兩足らずの正項納税額、それだけでは、足許の危うかつた彼らのやせ肩に對してのみ、より強く、より重くのしかかつていた負擔として記憶さるべきで

あろう。清初のほう、大な官僚機構は、數錢・數分ないしは數釐という、彼ら小民・百姓大衆のそれこそ血の出るような火耗の累積を私して、氣まま勝手にその根に培わせながら、然と高くそびえ立つていたのである。

三 雍正期——司庫への耗羨の歸公

(a) 實りなき康熙期の耗羨歸公への動き

雍正期の火耗すなわち耗羨の問題に論及する前に、順序として康熙期における火耗公許への動きと、その動きのたどつた運命に觸れておかねばならない。

上には厳しい火耗嚴禁の祖法・成例がある。下にはしかし半公然たる州縣官による火耗の私徴が行われている。この不徹底でもあり不愉快でもある状態に對して、いつまでも、だれからも、一向に批判らしい批判が起らぬとなると、餘ほどおかしい事である。さすがの康熙期漢人官僚——缺額を視て分の當然のところとしていたような（一五九頁）彼らの間にも、四十年前後を機として、そのような状態に對する批判めいた動きが現われてくる。その第一は、前にも述べた廣西巡撫彭鵬の上疏である。彼は着任と同時に、そ

れまでその地方で行われていた均平その他一切の陋規を禁止しようとしたが、ただそのための前提条件として、州縣官がすこしくその廉を養えるだけの方法は講じてやらねばならない。そこで彼は、「勅して徵糧の内において、明らかに加一の火耗を取め、一切の陋規は概して禁止を行われんことを乞う」たのである。一本によれば三十九年のことであり、他本では四十年とされている。⁽¹⁾彼のこの考えは、吾々の目からみると極めて正しい。しかし當時の一般的な考え方からすれば、すこぶる異質的なものであつた。どうして受け入れらるべくもない。果たして、疏は部に下されて議せしめられたが、結果はただ、加派は厳しく禁止せよというだけで、「明収火耗は行うを准^{ゆる}されなかつた」のである。私徴入己を利とする者たちの意見が壓倒的に強かつたことを物語るものに外なるまい。ついで四十一年ごろのことである。王原なるものが工科給事中となつた。そのころ山西省平陽府知府に馬忠賛というものがおり、「天下の錢糧の加一の火耗をもつて正供に作爲されんことを請」うた。正規の課税に引きあげようという徹底した意見である。康熙帝も一おうはこの意見にひかれたのであろう。帝はと

くにその事の可否を、州縣官の経験ある科道官(言官)に諮問した。王原もその諮問をうけた一人であつたが、彼はその不可を奏言した。帝もこれを是^{よし}として議はついに寢^やんだという。⁽²⁾かれ王原が州縣官の心を心とするものであつた限り、「加一」として「正供」にされることが、彼および彼らのためにいわゆる甘^{あま}くなかつたことは言うまでもない所であらう。

ある文献によると、康熙年間に耗羨の「歸公」を議するものがあつた。しかし聖祖は、官俸の薄いところを、有司が耗羨を失うと民から虐取する結果になり、地方の公用にも取辦するに従^よしくなくなるのを慮つて、その議を寢^やめて行わなかつたという。⁽³⁾前述二つの事件のどちらかを指したものとみて間違ひはあるまい。

康熙帝はその後、火耗の問題に對する態度を終世變えるところがなかつた。その最もよい證據は、その治世の最後のとし、すなわち六十一年の十月甲寅、全天下的な錢糧の虧空問題について臣僚に下した上諭のうちに認められる。當時、錢糧に虧空のあるのは各省みな然りであつたが、なかでも特に甚しいのは陝西省であつた。そこで康熙六十年、

陝西の督臣（年羹堯）撫臣（噶什圖）たちは、虧空した各官を題奏して參劾するとともに、この虧空した銀兩を追出^{とりだ}してそれを兵餉に充てんことを請うた。ところがその後、追比^{とりだ}がうまく行かず、彼らはどうする事もできない。巡撫の噶什圖は密奏して、通省に火耗を加えてそれによつて虧空を完め^{おと}めたいと申し出た。（同省の州縣では、火耗が毎兩につき加二三錢なるものあり、加四五錢なるものありであつたのを、本官の用度を量留するほか、その餘はみな全省の虧空を捐補させたいというのであつた（九月戊子上諭『實錄』）。大事なのは帝自身のこの申し出に對する態度である。

この摺（密奏）は、朕もし批發せば、すなわち朕より加徴せしむと謂わん。もし批發せざるも、又たこの事は已に曾つて奏明せりと謂つて、竟^ついに自から「火耗を」私派せん。定例、私派の罪は甚だ重し。「火耗」の一項は特^ただ、州縣官の供應 甚だ多きを以つての故に、正項の外において略々些微を加えてもつてその不足を助けしむ。原より「私事」に屬せり。若し「公然」その請うところの如くその加添を聽さば、必ず正項と一例に催徴^{さいてい}して將^{まさ}に肆^{また}にして忌憚^{きはん}するなからんとす。噶什

圖の奏摺をもつて申飭して批發する所以なり（『實錄』）。帝はけつきよく、陝西督撫は虧空を追比することができない。錢糧を請撥することも敢えてしないでは、萬一緊要の軍機があつた場合には遲誤せざるを得ないだろうというわけで、議政大臣に交與し、戸部の庫帑を動かしして解送させることにして一おうの型をつけている。それにしても、止めるではなし許すでもない、康熙帝の火耗問題に對する態度の軟弱さといまいさとは、まことに驚くべきものがあるであらう。順治帝に見られた、あの「小民」に對する善意と不正に對する嚴しさよ、どこに行つたとも言いたくなる。

しかも、同じ火耗の問題について、のちには幾分とも康熙帝的なあいまいさに逆戻りしながらも、初めは毅然として順治帝の昔に歸ろう——といつても、火耗を禁じようとしたのではなく、かえつて公認しようとしたのだが、少なくとも、マンシェウ人的な善意と嚴しさにおいてその祖父の昔に歸ろうとしたものこそ、康熙帝の子息たる雍正帝であつたのである。

(b) 陋規・捐俸の禁止と楊宗仁の提解法

耗羨すなわち火耗の提解歸公——それまでは州縣官によつて私徴され、私自に處分されていたものを、改めて公的に徴收せしめ、その一部は時として州縣に存留させるのを除き、他は一切、一省の中央財政機關である布政司の庫に入れてその公的な處分に委ねる。このような提解の歸公、なかでもつとも本格的なものである全提型(二二二頁)のそのの口火が、雍正二年ごろ(實は元年十一月某日)における山西巡撫^④諾岷(諾敏)——彼の到任は同年五月十二日のことであつたが——の上奏によつて切られたものである事は、在來とても一おうはよく知られており、特に近くは岩見氏によつて、在來の日付けに關する多少の誤解をも正して明らかにされたところに屬する。

この場合、雍正帝は一見、この問題に關して受け身であつたかのように見られるかも知れない。事實はしかし、決してそうではなかつた。

雍正帝がその十三年の治世中に果たそうとした政治的課題は相當に多い。しかもそのうちの最も大きな課題の一つに、滿漢畫一の政の實現ということがあつた。畫一といつても、マンシェウの權威の恩恵でもつて、漢人の地位を

滿人なみに引きあげてやろうという事ではない。正にその逆であつた。漢人官僚が父康熙帝の前で胸を張つて闊歩していたのは怪しからぬ。もう少し腰を低くしておれ。滿人官僚だからといつて、天子の前で「奴才」といいつつ卑下する必要はない。もう少し自己の力に自信をもて。こういつた意味での畫一の政であり、要するに前代までの、漢人に對するいわゆる「贅^{いりぞ}媚政治」の劣等感を一掃しようというのが、その狙いであつたのである。結果としてそれが、マンシェウ人的な、小民に對する善意と不正に對する嚴しさの強調になつたこと言うまでもない。

當然雍正帝の目には、その前途に立ちほだかつていた、餘りにも巨大すぎる建造物——風車小屋ならぬ漢人どものぼう、大なる官僚機構の幻影が、さし當つて勝負をいどまねばならぬ最大の怪物として映らざるを得なかつたであらう。(といつて、決して彼をドン・キホーテ式空想家視するつもりはないけれども)。またじじつ帝は、實に勇敢にその敵手に對して立ち向かつていつた。科擧出身者の根づよい大同團結ぶりを嫌つて、しばしば朋黨嚴禁の訓諭をおこない、御製「朋黨論」をわかち(二年七月)、また實際政治面にお

いても、鄂爾泰・李衛・田文鏡など、マンシュウ人か、捐官出身者か、漢旗人の出か、ではないまでも科擧出身者でない、當時の官僚仲間のうちでは異端的なものにのみ重く頼つていた⁽⁶⁾ようなのがその現われである。言うまでもなくこれらは、漢人官僚機構のよつて立つ支柱を、その神經系統的な面において突き崩そうとしたものに外ならない。尖銳も尖銳、尖銳すぎるぐらいな雍正帝である。その支柱に、より重大な意味をもつ循環系統的な面のあつたことを見のがしてはすはない。恐らく即位前から、その點よくよく知り抜いていた事なのであらう。

問題はただ、即位後のいつ、帝がその漢人官僚機構との決戦、とくにその循環系統に對する作戰を現實的な政治課題として取り上げるにいたつたか。もつと端的には、その「いつ」が、かの諾岷の上奏の前であつたか、それとも後であつたかの一點にかかつている。

私はその「いつ」かを、次のような理由から、元年十一月某日の諾岷の上奏以前のことであつたと判斷する。その理由とは、一口にいえば雍正帝が、おそらくはその即位早頃から、少なくとも雍正元年の前半期から、官員に對する給

與體系の抜本的な改革の意圖をもつていたと思われることだが、ただその改革の方法には消極面と積極面とがあつた。消極面とは、これまで官界の常識化していた陋規・餽送の網目を切りほどこき、また不自然きわまる官俸・工食の公捐を禁止しようとするのであつた。その積極面——それがすなわち火耗の提解歸公への志向にほかならない。しかもそれらの消極面と積極面とは、時には不完全な形においてでこそあれ、いずれも元年前半期——少なくとも十一月以前にはすでにその姿を現わしている。けつきよく、細目的にはそれら三つの理由から、私は前記の判斷を下さざるを得なかつたのである。

元年前半期における給與體系の改革について、地方大官中、もつとも雍正帝と協力的であつたのは湖廣總督の楊宗仁である。監生の出とはいへ、半マンシュウ人的な漢旗人の一人である。

元年三月九日、前年、世宗の即位とともに廣東巡撫から湖廣總督に拔擢されたばかりの宗仁が、まだ面識のなかつた新皇帝に對してあいさつの奏摺を寄せた。新帝はこれに對して長文の懇切な硃批諭旨をあたえたが、そのうちで、

帝は「捐助（明らかに俸工の公捐）」のことに言及して次のように言っている。

〔前略〕捐助の一事は尤も朕の悦ばざるところ爲り。審して當用の公務となさば、おのずから應に正項錢糧を動發すべく、もし些小彌縫の事には又た何ぞ必ず奏聞せんや。乃るに不肖の督撫は動もすれば、千萬兩を捐助すと稱し、よつて州縣に勒派して民より倍取せしめ、復た中において利を取る。……その實、捐するところの項は、仍つて國家の錢糧より出ず。これら名實相違・有害無益のことは、爾、亟かに竭力して朕がために革除せよ。〔後略〕

新帝の意のあるところを察知することができよう。

宗仁は帝の意に従つて着々改革の歩を進めたらしく、四月五日付けの請安奏摺に對する硃批には、お前は到任してまだ日もないのに、奏するところ、行うところの數事は深く朕の意に合している。甚だ嘉すべきことだといつて孔雀翎（勲功表幟）の下賜を傳えている。その「數事」のうちの一事が、外ならぬ節禮・陋規の禁革だつたであろうことは、同月二十日の奏摺に、

〔前略〕湖廣はもとより俗は薄にして民は刁、兵は驕にして吏は玩なり。……その故を細究するに、皆な、文武の大官の所屬の官・弁に向かつて「陋規・節禮」を索取するに因り、州縣は必ず横徵・私派するに至り、武弁は必ず虛兵・冒餉するに至る。兵と民とはこれを挾んで奸を逞しうするも、文員・武弁は敢えて過問せざればなり。臣が、節禮・陋規をもつて一槩に厳しく禁革を行い、文員に私派あり、武弁に扣冒の弊あるを許さざる所以なり〔後略〕。

とあるによつて明らかである。この奏も非常に帝を喜ばせた。「他人の場合なら、朕はその言葉を聽いてもその行爲を觀るまでは氣がすまない。お前となると、朕は信じて疑わない」。恐ろしいまでの打ちこみ方ではある。宗仁の前奏におくれること十數日、五月六日には直隸巡撫の李維鈞が、現今、通省各項の「陋規・節禮」をもつて嚴しく禁革を行つた。上司への賄賂は行われず、下屬の費用はおのずから省け、將來の虧空はおのずから絶えよう云々と奏上している。いち早く、その種の禁革のための聖訓を受けたためであらう。

宗仁はついで五月十五日、矢つき早に「俸工」問題についての奏摺を呈上した。その趣意にいう。俸工の一項は朝廷が官員・書役を祿養せんがための恩典である。どうして任意に捐出せしめ貪官の欲壑を填めさせて好いものであらうか。調べてみると、湖廣省では、州縣以上の俸工を報捐してからも十有餘年にもなり、一分・一釐の給發さえない。官役を責成けて枵腹かかえて仕事をさせる。これではどうして彼らを禁しめて、閭閻で需索させないようにする事ができよう。……いま雍正元年からは、一切の官や役に支給すべき俸祿や工食は、自分から全部に明白に曉諭して、それぞれ規定の額面どおりに支領させ、わが皇上の祿養の恩に均沾させるようにしたいと。雍正帝はこれに對しても全然同感の意をあらわし、捐助俸工の一事は、朕がもとより「痛恨」するところであつて、即位以來「しばしば」諭旨を降してすでに諄々誥誡したとさえ言つてゐる。捐俸問題については君臣間の呼吸が一分の隙もなく合つていたのである。

捐俸の停止から耗羨の提解までは、論理的に一步一步の距離でしかない。果たせるかな宗仁は、同じ奏摺のうちで

提解のことにも言及し、次のように述べてゐる。

査するに、従前およそ公事あれば、一つとして州縣をして分捐せしめざるは無く、實は皆な百姓に派累せり。臣いま通長に核算し、ただ州縣をして、得るところの加一の耗羨内より二分を節省、「藩司に解交」せしめて以つて一切「公事の費」に充て、この外には絲毫だも派捐するを許さず。

雍正帝はこの時の宗仁の奏摺に對して、全般的に、「言うところ全く是なり。一つも瑕疵なし」という最大級の嘉賞の硃批を與えてゐる。當然、耗羨の提解についても賛意を怏まなかつたものと見なければならぬ。

この時の宗仁の奏摺には、耗羨の處分に關してはただ公事の費、つまり「公費」の名が見えるだけで養廉銀はない。その後の彼の奏摺にも、養廉のことはおろか、耗羨のことについてさえほとんど言及するところがない。しかも實のところ、問題の五月十五日ごろまでには、すでに、養廉的な使途をも含めての総合的な耗羨の處分計畫が宗仁によつて立案され、實行されておつたのである。このことは、李成龍・王國棟・趙城・徐鼎・王士俊ら、そのご湖廣南北省

に督撫・布政使等として在任した人々の奏摺によつて察知することができる。たとえそうした奏摺はなかつたとしたところで、捐俸の停止から耗羨のとくに「公費」としての提解までは、論理的にみて至極近距離だつた。それと全く同じように、陋規・餽送の禁絶から養廉の設定までも、思想的には一筋道であつたわけである。署山東巡撫岳濬の口吻を借りるなら「それ養廉は君上の下を恤^われむの典にして、陋規は臣子の己れを肥やすの貲^{ひかし}なり。當日は陋規を存して養廉を給せず」の關係であり（六年七月十三日）、禁絶を知れば設定は推知にかたくない。ともあれ、ここでは代表的な文獻を一二擧げておくに止めよう。

まず、湖南布政使の趙城は、六年十一月十一日の奏摺でこう言つている。

湖南所屬の各州縣の錢糧を徵収するや、先きに雍正元年において、前督臣楊宗仁、檄飭して地丁銀一兩ごとに耗銀一錢を加うるを許し、うち「三分」をもつて司に解して以つて地方の公用（および起解部餉の費）に充てしむ。その餘の「七分」は、一分五釐をもつて藩司に給し並びに部餉の解費と作す。六釐は臬司（按察司）

に給し、四釐は巡道に給し、一分は知府に給し、三釐は同知に給し、三分二釐は州縣に給して、各衙門の辦理公務および日用薪水の需と爲せり。

その餘の「七分」がやがて養廉項であつたことは、後にひく、この引用文の續きの部分で明らかだが、そのほか巡撫（雍正五年（七年）王國棟のときは、この場合の養廉と陋規との關係を示唆して、こうも言つている。湖南の司・道・府・州・縣の各官には、雍正元年、額徵錢糧の耗羨をもつて「養廉」に分給してよりのち、一切の「陋規」が革除されて殆んど盡き、まことに「餽送」私収の情弊がないと（『諭旨』六例、王國棟、八六枚表）。

ただ、ここで特に注意せねばならないのは、楊宗仁方式における養廉もしくは養廉的なものが、まだ全然、司庫には「提解」されておらなかつたことである。提解されたのは、通省公用のための二分と起解部餉の費としての一分と、都合三分にすぎない⁽⁷⁾。その餘の七分は、湖北巡撫王士俊が九年十二月（六日）、それをしも前任督臣楊宗仁の定議のままと言つており、「各州縣をしてみずから分送して各衙門の養廉と爲さしめた」のであつた。趙城はそれ

より三年もまえ、前引の文にすぐ續けて、

乃るに不肖の員あり。養廉の一項は、前督臣の檄内に「具摺して奏明せり」の語あるを見て、づいに視て應有となし、忌憚するところ無し。州縣の已に徴せるや、未だ徴せざるやを顧みず、即ちに牌を行して解を催し、あるいは割を致して要求す。甚しくは崇（専）差もて縣に下らしめて坐索・守提するに至れり。……臣請うらくは、嗣後、加一の火耗を徴取せんには、州縣に飭令して正餉（正供・正項）と隨同して數に照らして全て臣が衙門（布政司）に解交せしめ、仍つて三分をもつて留めて公用に充て、州縣まさに得べきの三分二釐も亦た、正數を按じて、即ちに解餉の人役に給して領回せしめん（後略）。

といい、さらに——その餘の三分八釐、つまり州縣を除く各官への養廉分は司庫に存貯する。そしてもし解交の數が給發するに足るようになつたら、各衙門に知らせてやり、人役を差遣して司庫に赴いて具領させるようにしたいと論じている。當時（六年十月十五日）、湖南省の按察使を勤めていた趙弘恩の考え方も全く趙城と同じで、これまでは所屬の

額編錢糧を按じて扣算し、州縣から該管の司道府廳に分交して收受させていた加一耗羨を、槩とめに正餉とともに北南藩庫に解貯させよと主張するものであつた。明らかに火耗の全面的提解（全提型）の主張である。三年後の王士俊の言葉から察すると、彼らのこの主張は哀れやミからやミへと葬り去られたものらしく、湖廣では元年以來ながく、養廉分の司庫提解は行われなかつた模様である。

このようにして、中途半端なものでこそあれ、ともかく耗羨の提解は、元年前半期からすでに、「具摺奏明」のうゑ實行されておつたのである。明らかに雍正帝の給與體系改革の最も重要な一環として。

改革の動きは、元年後半になつても足どりをゆるめない。たとえば、元年六月十七日、廣西布政使として任地についた劉廷璟である。『列傳』その他には見當らぬが、世々國恩を受くと自稱している點、漢旗人の出であつたことは間違いない。赴任にあたつては聖訓を跪請し、また摺子を用つて内奏することを許されたが、着任の月の二十九日にはその第一回目の摺奏を行つてゐる。そのうちで彼は、廣西布政司がこれまで収めてきた、各屬解司の錢糧の加平銀が

〔毎年?〕二千四百餘兩、各屬の節禮銀が一千三百餘兩。これらの二項は、自分は「聖訓」を遵奉して一擧に革除する。(いわゆる「陋規」の革除を嚴命されて來たものであることは疑いない)。ただ桂林・平樂・梧州・潯州の四府の橋稅附費は、布政司が季ごとに約八百餘兩の銀をえて、向に日用の需としていた。……臣に賞給して「養廉」として頂きたいものだが、いかがでしようかと懇願している。これに對する雍正帝の態度は實に微妙を極めたものであつた。

これに類する等の事は、天下の督・撫・藩(布政使)・臬(按察使)、朕の代つて規則を定むるを望む莫かれ。爾らの做去くに任憑さん。只だ朕に「是好」の二字を還さしめて、一切は皆な可なり。もしこの二字の朕より還るなければ、縦え爾、講じ得て天花 亂墜せんも、亦た朕を動かすこと分毫なる能わざるなり。但だ勉力して好官と做るべし。これを謹しみこれを慎しめ。帝のこの、一見消極的にすぎるような「あなた」まかせの態度は、即位頭初の陋規・火耗(二〇四頁)などに對する戰鬪的な態度からは遙かに遠く、かえつて帝自身の書いた耗

羨提解の歴史——といつても實は、雍正六年、安徽巡撫魏廷珍が提解火耗についての具摺陳奏を行つたのを機會に、「外人が(實狀を)知らずに亦た朕の意より出たと考えることを恐れて」、同年四月二十二日(壬寅)、内閣に對して降した相當長めの上諭にすぎぬが、ともかくそれに、

朕の意は原と各省の督撫のみすからこれを爲すに聽せ、行う能わざるの督撫・行うに便ならざるの地方には、朕かつてこれに強いて行わしめざるなり。諸岷舉行ののち、隨いで數省のその意に倣倣……するあり。然もこれ亦た、皆な督撫のみすから奏請を行える者にして朕より諭せしには非ざるなり(『實錄』六八)。

というものと精神的に相通じるものである。

同じ上諭のうちで雍正帝は、諾岷の一擧に對して、内外の官僚の間から激しい反對の火の手の上つたことを傳えている(後述)。その一擧以前においても俊敏な帝は、その意圖する給與體系の改革が捲きおこすであろう、並々ならぬ反對の空氣を察知していたに違いない。要するに帝の前には、官僚、とくに漢人官僚たちの總意が、帝の所信の遂行をさまたげる、ほとんど打ち勝ちがたいような大きな壁と

してそそり立つていたのである。帝としては逸る心を抑えながら、相手の仕掛けてくる技をまつ。「なんじらの做去なやくに任憑まかす」。それ以外に手がなかつたのではないかと怪しまれる。讓歩は讓歩ながら、むしろ戰術的な讓歩とも見なさるべきものであらう。しかも、この讓歩後まもなく技を掛けてきたものの一人は、河南巡撫の石文焯であつた。彼も監生あがりの漢旗人の一人だつたのである。

元年八月二十七日のことである。石文焯は、所管の地方における、虧空錢糧の彌補策に關する意見書を奏摺の形で上つた。これに對する硃批諭旨は、當面の問題に關して相當重要な意味をもつものだが、その全文は次のとおりである。

議するところの彌補の法は甚だ是なり。ただ必ず新任の州縣各官を苦累するを致すなくして、方はめて善舉たり。すべからく一州縣ごとに應まさにうべきの「羨餘（火耗）」の多寡若干なるを通計し、酌量して若干をもつて留めて「養廉」となし、若干をもつて除いて補苴（補苴）となすべし。好言もて勸導し、それをして節用省費、陸續と完補せしむれば、その私を營んで巧取するを禁すべく、

「百姓」を腹削するを致さざるに庶もつからん。もしその出する所と入る所とを量らず、資生糊口に策なからしめて、しかもこれを誡めて「廉潔みずから矢やい、小民を拮据するなかれ」と曰わんか、三令五申すといえども、恐らくは必ずしも心悅誠服して法の如くに奉行せざらん。事は兩全を須すつ。爾なほこれに勉めよ。

ここで雍正帝が甚だ是なり、條件つきでこそあれ、ともかく善舉たりとする——言いかえると、帝に「是好」の二字を還えさせているその彌補の法は、「どうやら補苴分だけの部分的司庫解交だつたらしいけれども」、大筋においては後の諸岷の、いわば本格的な耗羨提解の法と似かよつたものである。また石文焯は、その本格的な耗羨提解においても諸岷の第一の追隨者であつた。それらの意味においてこの硃批諭旨は、給與改革、ないしは耗羨提解の問題への積極的な一歩踏み出しを、帝は帝なりの形で宣言しようとしたものであつたと見るべきである。

ついで元年九月、江西巡撫の裴偉度が、水害の跡始末のため、恐らくは慣例にしたがい、俸工を捐して被水の居民を賑恤したいと請うてくる。帝はこの機會をとらえ、かね

ての持論にしたがつて、官俸・工食の公捐を全面的に禁止しようとした。同月十一日付けで戸部に下した上諭がそれであつて、帝は、各省の督撫が地方に公事あることに直ちに俸工を捐せんことを請うが、もつてのほか「正理」ははずれたものだと斷じ、戸部から直省督撫に行文して永く停止せよと嚴命したのである（『上諭』）。

本格的な耗羨提解への道は、いよいよ踏み固められた。

この踏み固められた路上にたつて、さらに新たなる技の掛け手の出現を期待していた雍正帝。その顔前に立ちあらわれたものこそ諾岷だつたのであつて、帝が耗羨の提解歸公の問題に關して受身であつた——少なくとも本心から受け身であつたと見る必要は少しもあるまいと思う。

(c) 諾岷の提解法をめぐる君臣間の論争

マンシェウ人ノ諾岷が巡撫として山西省に到任したのは、前述のように雍正元年五月十二日のことであつた。『清史稿』本傳の書きぶりによると、彼はそこで、數年間の不作つづきのあとを受けて、どこもかしこも虧空疊々の窮狀に直面する。何とか財政的な立て直しをせねばならぬ仕儀になつてピンと頭にきたのが、康熙年間にかつて提議された

まま沙汰止みになつていた火耗の解提歸公（本節(a)項）の考え方であつたらしい。直接には特に、康熙六十・六十一年ごろの隣省陝西——火耗の重さにおいても（一五六頁）、虧空のひどさにおいても本省と兄たり難く弟たり難かつた、この隣省における年羹堯・噶什圖らの一種の歸公計畫が想い起されたのであらう。この意味においては王慶雲が、

願うに朝廷は、一分(加一)なる者をもつて微かにその〔加耗許容の〕意を示せるのみ。而も大吏(年羹堯・噶什圖)はついに、數倍なる者をもつてこれを昌言せり。

ただに禁すべからざるのみならずして、亦た限るべからざるなり。これその勢い歸公に至らざれば止まず

（『熙朝紀政』）。

といいつつ諾岷の歸公に論及しているのは一おう正しい。

かといつて、湖廣省での楊宗仁方式に全然ヒントなり刺戟なりを得なかつたとは斷言できぬし、また、楊方式のもつ耗羨歸公史上における重要性を無視することもできぬけれども。

諾岷の新らしい計畫がいつから行われたかは餘り明らかでない。もちろんそれが「二年」から——雍正帝の提解史

にすら「雍正二年間」と傳え、その他多くの史料にもそう記されているような二年からではなく、すでに「元年」からして行われていたことは、第一、諾岷の原摺を見たとき明記している後任巡撫の石麟が、その摺奏は元年十一月に行われたと確言しているし（五年十月二十日）、第二、山西布政使高成齡が、「元年」度に提解された火耗についても、いわゆる奏銷黃冊（二〇三頁参照）を帝の手許に上つていることからも明らかである。餘り明らかでないというのは、その「元年」のいつ頃からかに關することであり、『本傳』によると着任早々のようにも思えるし、一方、諾岷の最初の摺奏は十一月に行われているからである。ただ當時の實狀では、督撫たちが自己の權限内で判斷試行したことを、あとから奏摺でもつて允許を請うた例が少なくない。この場合もその試行は、その最初の摺奏より一二カ月、ないしは二三カ月前にあつたのでは無かつたであらうか。

諾岷が元年十一月某日に上つたといわれる最初の奏摺、およびそれに續いて上つたかも知れない諸奏摺は、現在のところではないようである。『雍正硃批諭旨』にも、その『不錄奏摺總目（民國二十九年序、故宮博物院文獻館撰）』にも、そ

の種の奏摺どころか、摺奏者としての諾岷の名をさえ見出すことができない。あるいはその残つていない事自體に意味があり、ここでは雍正帝が「爾らの做去くに任憑す」の態度に徹し切れず、いささか積極的に「諭し」すぎたので、その證據物件を大幅に抹殺する必要があつたのかも知れない。しかし幸わい、彼（諾岷）の下僚や後任者たちの言説からして、彼の計畫の大體ぐらいは想像するに難くない。すなわち、彼の着任當時の山西省では、正項錢糧一兩につき、三錢・四錢にも達する高率の火耗が州縣官によつて私徴されていた。彼はその加耗の率を加二すなわち一兩ごとに二錢と押え、山西全體で耗銀五十萬兩の歸公、すなわち布政使司への解貯を見こむ。その中から養廉銀と公費とに三十萬兩を給し、残る二十萬兩を虧空の穴うめに振りむける。三十萬兩のうち、養廉銀と公費とがそれぞれだけの額を占めていたかは明らかでない。ただ、後任者石麟によると、諾岷の奏摺のうちには「修理城垣衙署」以下數件におよぶ「公事（一六九頁）」的な項目が開列され、それらに對する必要經費は合計六萬四千兩であつたという。これが即ち公費の使途であらう（この項、大體、岩見氏による）。

このような計畫を盛つた諾岷の奏摺が、一も二もなく、雍正帝の承認を得たであろう事はいうまでもない。しかしこの、雍正帝「諾岷の推進しようとする、耗羨の提解歸公策の前途は決して安穩ではなかつた。二年春間、河南巡撫の石文焯が「山西省の例に倣つて」くれたまではまず調子がよかつた。河南省では加一三の火耗銀兩がほゞ四十萬兩。このうちから養廉および各項の雜用・公費に支給した餘りの十五・六萬兩を、司庫に貯えて虧空の穴うめその他に使用するといふのである。⁽⁹⁾

ところがその後、山西布政使として巡撫「諾岷に協力していた高成齡が邸抄（政治公報）をみていると、讀みすてならぬことが目にとまつた。内閣が出させた、火耗の提解を禁してもらいたいという條奏が、いれ、しく掲載されていたのである。腹にすえかねた彼は、きびしい語調でつづられた抗議的な奏摺をしたため、二年六月八日ごろ雍正帝の手もとに呈上した。

この抗議的奏摺の論點はいくつかあるが、岩見氏によると、要は火耗は率を定めて徴収し、これを一旦上司のところに提解し、然るのち適當に分配するのがよいというので

あつた。以下、おなじく岩見氏の手際よい要約をさらに要約しながら、奏摺の論旨を追うてみると、大體つきのとおりである。

(イ) 條奏には、耗羨は州縣が當然得るはずのものだから、上司には宜しく提解すべきではないという意見が述べられている。これに對しては、條奏者は耗羨と節禮^{ツキレツ}とがもともと相互關係にあることを全く知らないものだ。上司に耗羨を提解させなければ、屬官は必ず節禮を呈送するであろう。その贈り物、つまり「餽遺」を禁止してしまえばかえつて弊害を生じるから、やはり耗羨銀兩は布政司庫に提解し、大吏によつて分給するのが一番だ。しかも耗羨を提解しておけば、省としてやむを得ない公費が必要になつた時、その中から支出することもできるという。(ロ) 條奏には、火耗を提解するのに毎兩いくらと限度を定めると、租税の取り立てに人民撫育の意を寓することができないという意見もある。これに對しては、昔日に比べて火耗の大半を減じた山西一省の提解の實情をもちだし、これこそ撫育の一法だと見ごとな反撃ぶりである。(ハ) 條奏には、公けに取つてそれを分給するのは、大臣が屬員をはげます方法ではな

いとも言われている。これに對しては、上司はいくら清廉にしても、やはり幕賓などに必要な費用がある。ある以上は、こつそり「餽遺」を收受させるよりは、はつきり「養廉」を分配する方がよい。その方がかえつて部下に對して厳格な態度がとれるといつて、その意見を却けている。

さらに、(二) 耗羨から虧空の穴うめをすることも、以前のように不公平なゴマカシの處置をするより優つてゐると山西省の現状を述べ、最後に、(四) 全國の總督・巡撫に命令して、諾帳がしたように、省全體で一年に耗銀がいくらになるかを先ず上奏し、年末に養廉として給與したものの公費に支出したもの、虧空の穴うめに使つたもの、それらがそれぞれ幾らになるかを上奏させるようにして頂きたいと言ひ、そして提要的な名對句——私はあえて「名」對句という。よく問題の核心をつかんでゐるからである——

これを總するに、「耗羨」は州縣の己の資に非ずして、應に大吏(布政使)より分撥するに聽すべく、「提解」は乃ち安全の善策にして、實に屬員(州縣官)を厲うくせんがためには非ざるなり。

でもつて、その相當長文の抗議的な奏摺を結んでゐる。

この奏摺に對する雍正帝の硃批諭旨のうちには、格別、高成齡自身——というよりは彼の態度に關する感想を含んでいない。しかしその後三カ月、九月十四日に成齡が請安(御機嫌いかがい)の奏摺を呈上したときには、「朕安し」のほかに、「爾の耗羨の一事を條奏せるを聞す。甚だ嘉すべきに屬す」という嘉賞の言葉を付け加えるのを忘れなかつた。少し時間がたちすぎてこそおれ、『硃批諭旨』では二摺が前後相接してゐるところから考えると、やはり六月の條奏に對する嘉賞であつたと見られる。これによつても、彼の抗議的奏摺がどんなに雍正帝を喜ばせたかが判るであらう。その提要的な名對句のごとき、恐らくは最も帝の胸中の琴線に觸れるものでは無かつたであらうか。

その反面、帝の提解反對論者に對する不快の念は壓うべくもなく、同問題についての議奏を命じた高成齡六月條奏に對する硃批のうちには、その心證が隠すところなく現われている。

總理事務王大臣は九卿・詹事・科道を會同して、平心靜氣、虛公執正、確かに議して具奏せよ。もし「私」意を懷挾するより、以つて任性尙氣、是非をば淆亂す

るに及ぶものは、この一事において、必ず一二の罪を獲るの人あらんぞ。すべからく各々己の見を出だして、明白に利弊を指陳し、稍しも游移するなかれ。もし畫一に定議する能わざれば、兩議三議みな可なり。劉燦（この人物のこと不明）は仍つて班に入れ議に與^{あずか}からしめよ。

「一二の罪を獲るの人あらんぞ」は明らかに一種の威嚇である。

威嚇のもとに會議を開いた總理事務王大臣らは、七月六日にいたつてその結論を覆奏したが、その四角ばつた、表舞台的な覆奏に對する雍正帝の論駁を紹介するに先だつて、その樂屋裏におけるザックばらんな君臣間の論争に照明をあてて置きたい。

雍正帝はその耗羨提解史のうちで、雍正二年間、諾岷が始めて耗羨の提解をおこなうと、たんに晋（山西）省の屬員が怨望したばかりではなく、内外の臣工が皆な異詞をもつたことを記している。主としては同年六月、高成齡條奏の出される前後の事態について言つたものと見てよい。當時、耗羨の提解策は四面楚歌の重圍のうちに置かれていたの

ある。しかもこのさい、その攻圍軍の參謀席に納まつていた人々は、そのとき吏部右侍郎の地位にあり、學問的には佛よりして儒（道學）に歸したといわれる沈近思と、太原府の知府（元年～五年）を勤めていた、漢旗人の出で監生あがりの金鉞とであつた。前者が内廷の臣工を代表していたに對し、後者が本省の屬員を代表していたこというまでもない。

近思は『本傳』によると、元年十一月、大僕寺卿を授けられて仍つて文選司事を兼理し、二年正月、山東鄉試の正考官に充てられ、同二月、吏部侍郎に擢んでられたものであつた。ついで同年七月には尙書阿爾松阿とともに河南省に往いて生員王遜らの罷考事件¹²の審理に當つてゐる。

彼が「殿陛の間」に反對論を展開したのは——どの史料でもその日取りがあいまいであり。あいまいでなければ、もだが、悪くすると、元年冬のことだと紛らわれ易いけれども——當然その二年の二～七月間、とくに六月の高成齡の條奏後のことであつたと考えねばならない。なお沈近思がかつて（康熙四五～五二年、河南省臨潁縣知縣當時）嚴虞惇から「清官とは？」についての訓示を受けた、沈位山その

人であつたこと言うまでもない(一五三頁)。

位山の反對論の根據は、耗羨は額征の(定額正税)餘すところであつて、本と定數がない。いま歸公するとなると額征と異^{ちが}いが無い。日がたつと弊害が滋^はし、耗羨のほかに必ず復た耗羨を加えるようにならう。これでは重ねて民を困めるものだというに在^{いた}つた。康熙六十一年における聖祖の意見(一八五頁)とは似て非なるものだが、しかもこれが識をなしたか、雍正末・乾隆初め以來、ぼつぼつここに指摘されたような弊害の現われてきたことは後述のとおり(第四節^(c))。金鉷の論はそれとはやや重點の置き所がちがい、「公費」の有無、ないしは多少を問題にしていたかのように見えることも後に詳説するとおりである。

どちらにせよ、彼らの反對論にも、一おう尤もらしい根據はあつたのである。ただその根據とするところが、意味論的にみて單なるよそ行き言葉であるに過ぎず、腹の底から出る傍白でなら、かれらの官僚機構をその循環系統の面から無力なものにしようとする、火耗の提解「歸公」その者に眞ッ向から反對せんとするものであつたこと論を俟たない。

それだけにまた雍正帝としても懸命であつた。帝と沈・金兩名との間の應酬は、今日さいわい、數種の文献中にこれを徴することができる。なかでも、全祖望の確かな筆致で描きだされた帝と位山との間の問答は、緊迫のうちにも一脈のユーモアをたたえていて大へん印象的なものである。九卿が耗羨問題を議論するとき、公(沈位山)は言つた。今日、正項のほかに更らに正項を添えようと、他日必ず耗羨のほかに更らに耗羨を添えるようになりましよう。他人はあるいは知らないかも知りません。私は縣令から起家^{たまたま}げたものです。だから、そんな事(提解歸公)は必ず行えないことを知つていますと。世宗は曰つた。お前は縣令だつた時、やはり耗羨を「私^ふ」ねたのかと。公は曰つた。私^ふねたのではありません。これが非^なくては妻子が養えないのですと。世宗は曰つた。お前は「道」を學んだくせに、妻子を「私」するのかと(評者曰く、これは帝の言いすぎだ)。公は曰つた。臣は敢えて妻子を私するものではありません。ただ妻子を養わないわけには行かないのです。もしこれを廢^やめると、それこそ人倫は絶^たですと。そこで世宗は笑つていつた。朕^{わが}は今日こそ沈近思にやりこめられたわい(爲沈近思所難)と。⁽¹⁴⁾

祖望はこの文にすぐ續けて、「是日、衆みな公の爲めに懼る」といい、他の文献にも「公、殿陛の間に力爭し、同列みな爲めに色を失う」と傳えている。けつきよく「然も上は怒らず」¹⁴⁰「その誠割を嘉してこれを責めざるなり」¹⁴¹で無事に収まりはしたものの——（その二年冬間、雍正帝は沈近思に命じて、朱軾とともに自分たちの経験にもとづいた州縣官の心得書を編纂させている。彼らは成書に及ばずして死去し、のち田文鏡と李衛とによつて『州縣事宜』として完成されたが、ともかくこれによつて見ても、近思がかねて帝の信頼を得ていたことは明白である。それほど激論も無事に収まることのできたゆえんか）——當日の兩者間の應酬がいかにエキサイトしたものであつたかは、その傍觀者たちの態度によつても明らかであろう。

位山はそれで好しとして、冷徹な雍正帝をこれまで昂奮させたものは何であつたか。その根本的なものが、前記の問答にみられるような、「私」に對する激しい憎しみ——とくに、漢人官僚におけるあらゆる「利」の源泉、より深くは、政治におけるあらゆる「惡」の根源としての、私に對する燃えるような憎しみであつたことは言うまでもない。

しかしもつと手近かな原因は、「上（世宗）將にその（山西撫臣諸敏の）請いに従さんとす」¹⁴²とか、「世宗すでに行うを許して、猶おも九卿を召してこれを議せしむ」¹⁴³などと言われているとおり——また、私がこれまで説いて來たところでは、そうだつたとしても決して不自然ではないように、初めから帝の意向が、耗羨の提解歸公の實施に傾ききつていた事實そのものではなかつたかと思う。「衆が上意の向うところを以つて敢えて爭わなかつた」とき、ひとりこれと争つて力言した沈位山は、その限りの意味では、自己の所信に忠實な道學者らしい道學者であつたということができよう。

雍正帝の歸公實施への傾きは、金鉞に關する文献のうちにも認められる。公（金鉞）が太原から入謁すると、あたかも耗羨の歸公を廷議している最中であつた。公はその不可なるを奏した。世宗は悦ばないで曰つた。朕はすでに「養廉」を定めている。お前は官に在つて官を「私」するのか（意味ややあいまい。「汝在官私官乎」と。そこで鉞は叩頭していつた。

臣は官の爲めに游說せるには非ざるなり。從來、財の

上に在るは財の下に在るに如かず。州縣は親民の官たり。寧ろその有餘を留めしめよ。「養廉」とは、その家を養つて廉恥を知らしむるなり。家には大小あれば、定むるところの數、詎ぞ能く胥い足らんや。一たび

「公事」に遇わば、動もすれば俯張を致さん。

要するに「養廉」だけに絞られては地方官がやつて行けないと言ふのである。この點、元年八月二十七日の石文輝の上奏に對する硃批に、羨餘の使途を指定して、虧空の補苴のほかではただ「養廉（州縣）」のみをいうのと同様である（一九三頁）。あるいは諸岷の原案そのものも、その硃批の趣きと揆を一つにし、全然「公費」的なものを含まぬか、含んではいても「養廉」中にこめられていたのではなかつたのであろうか。金鉞の言葉はまだつづく。

上意、あに「凡そこれ官辦なれば皆な正供を開支するを許す」と曰わざらんや。但だ司（布政司）院（巡撫）より按敷して以つて戸部にいたり、層々に隔閡がれて、報銷（けっさん）すること甚だ難し。これ従りして州縣には恐らくは苟且の政多からん。

官辦なれば正供をとほ、明らかに、元年九月十一日（丁亥）

付けの俸工禁捐令中に、「もし果たして民の災祲に遇うあらば、該督撫、即ちに應に奏聞して正項錢糧を動支せよ」とあるもの（『實錄』一一）、もしくは、それと類似の意をもつ上諭（一八八頁参照）をさす。金鉞としては、上意もつともながらと實狀を指摘してみたわけである。彼の言葉はしかしまだ核心に觸れていない。その核心のところは次のとおりであつた。

「皇上の意は必行に在り」。臣 請うらくは、養廉のほかに多く「公費」を増し、あるいは縣に存し、あるいは司に存し、北宋留州の法に倣われんことを。事に おいて濟すあるに庶からん。

公事に遇つてもまごつかないで濟むように、公費を多く増してほしいという。案そのものを葬り去ることができねば、「せめて」州縣官の勝手にできる機密費的なものを餘分にほしい、という所であつたのであろう。

同じ文獻は、さらに語をつづけて、たまたま左都御史の沈近思（左都御史はいわゆる九卿の一。雍正五年、即ち彼の最晩年の官）は持論が公と合つていたこと、世宗はそこで山西巡撫に勅して「公費章程」を敷せしめたが、巡撫は上意を

希つて、數を定めるのに他者に較べて優としたことを傳えている。近思に關する文献にも、その抗爭の成果を述べてこういつている。前引「民を困めるものだ（一九九頁）」の直ぐつづきである。

これと争うこと甚だ力めたるも、世宗は以えらく、耗羨は惟だ定數なきの故に、不肖の有司 民に取ることを制なしと。ついに令に著して、「加一」を以つて率となして司庫に提解せしむ。兼ねて位山の言を采り、凡そ民間の「公事」にも仍つて耗羨を用うるを許し、正供に比するを得ざらしめ、その額外に加収し及び民間に私派するもの有らばこれを罪せしむ。

ここに加一というのは、雍正二年、虧空の多い省分でその虧空をどのように清理したらよいかを論じた近思の奏疏のうちで、くりかえし「加一」の耗羨とか火耗とかいつている場合と同じく一般論であつたとおぼしく、もともと火耗の高率であつた山西省ではそれが加二と押えられたことは前述のとおり。位山が公事に言及したのは、やはり退脚後ふみとどまつた「せめても」の一線であつて、金鉞とその持論相合するといわれたゆゑんの一つであらう。

なお前引の文献には、提解した耗羨を「正供」に比するを得ずとするのが、あたかも位山の主張の一點であつたかの如くに記されている。しかしこれは恐らく正しくあるまい。なるほど雍正帝自身は、いわゆる「歸公」の意味を、最初は康熙四十一年における馬忠贊の場合と同じく（一八四頁）、「正供に作爲する」ことだと考えていたかも知れない。帝の、公務には正項錢糧をの思想（一八八頁）からすれば、これは十分ありうることである。しかし帝は早くも二年三月三日、石文焯の奏摺に硃批して、凡そこれらの羨餘は槩して正項と牽混してはならない。國家の正項には常額があつて、全然これを頼りにしていない。もしこれを算して正項とすれば、お前たちは、羨餘は必ず相變らず別に取るであらう（後略）といつている。耗羨はこれを正供に比すべからず——雍正帝流に言い直せば、耗羨は「公項（二〇八頁）にして庫帑（『正項・正供』には非ざるなり）」。この種の命題を沈近思が、どんな思惑からであつたにもせよ、ともかく持ち出したということも有り得ぬことではない。彼のこの種の主張に對して雍正帝が、この項の銀兩は、止だ督撫から収支の數を年終に自分の手もとに奏明させるだけで

(一九五頁の奏銷黃冊參照)、必ずしも戸部に報じて「査核」はさせない。自然「正項」となる氣づかいはあるまいと面諭したので、羣臣は翕然としてこれに従い、その議はついに決定したということ——これまた十分に有りうることはある。しかしこの正項云々の點について、近思が雍正帝に對する最初の影響者だつたという事は、ほとんど有りえないところである。このことは、帝が後年になつても、恐らくは近思らの思惑ないしは下心に反して、「非正項」の三字はどうして朕に向かつて言うべきであらう。公項を侵那するものはこれを正項に較べて尤もよろしく懲戒すべきだ、という態度を堅持した事とともに併せ記憶さるべきだと思ふ。

諸氓^ノ雍正帝的な政策はこのようにして、漢人官僚團の反撃——セミヤミミズになりたくないという逞ましい生活意欲に裏打ちされ、堅固な二大支柱をもつ大機構を背後にひかえた彼らの必死の反撃にあつて、多少とも後退を餘儀なくされる。そうした状態のもとに取り纏められたのが、二年七月六日(丁未)における總理事務王大臣らの公式な覆奏であつたのである。

(d) 督撫の任意事項としての提解法の實施普及
事務王大臣らの覆奏は、さすがに雍正帝の脅しが利いたか、帝に従うと「いま爾らの議するところを觀るに、亦た平心靜氣に屬す」ではあつたものの、「但だ見るところ淺小にして朕の意とまだ合せず」——肝腎の點での遺憾さをどうすることもできなかった。しぶとい漢人官僚集團の心理は、なかなかオイそれと天子の思うようには動いてくれなかつたのである。

雍正帝はその議覆の趣旨に對して、一々手きびしい論駁を加えた。またもや岩見氏に依つてその要點を拾うと、まず、(イ) 州縣が火耗を徵收するのを權利でもあるかのように見なしていた官僚の考えに對しては、火耗は本來とるべきもの(應有之項)ではない。ただ通省の公費、各官の養廉にはここから取らざるを得ないものがある。取らないのが理想だが——(じじつ、帝の即位後まもない雍正元年正月元日、大小の臣僚を誡しめたいわゆる諭旨十一道のなかでは、まだ、いま錢糧の火耗は日によりやく増し、重いものは毎兩加えて四五錢にもなつてゐるが(對布政使)、これは「小民」の脂膏をもつて貪吏の谿壑を飽かしめるものだ

(對知府)、成例のつもりでおられては小民が堪るものか、これからは「斷じて禁止せねばならぬ」(對知州・知縣という風に考えられておつた(『實錄』))——從來の行きがかり上、致し方がないとするものであつた。(四) 各州縣の火耗の率を決めたいという覆奏中の意見に對しては、そうすれば錢糧の多い州縣はよいが、少ない州縣では困る。また率を決めると、將來それより増すことはあつても減ることがない。何ときでも減額のできるよう、率は定めぬ方がよいとの立場をとつた。この點、高成齡條奏の考えと少しく異なる。いな、それと異なるばかりではなく、雍正帝自身の、他の場合の發言とも必ずしも同じでない。私にはそのように思われてならない。なるほど、雍正五年二月甲子、御史陳學海が各督撫に敕下して火耗の舊額を査核し、成規を酌定して「畫一」に遵行せしめるに便ならしめられんことを請うた時には、定額になると裁減できなくなるからと言うようなことで、これを准^{ゆる}していない(『實錄』)。ところが沈近思關係の文獻には前述のように、加一をもつて率となさしめたと伝えられているし、五年冬、江蘇巡撫陳時夏が耗羨の提解を行おうとした時にも、政令の行は必ず

各屬「一體」にして方^はめて均平を得られると諭している。さらに八年三月にも帝は、その火耗一切にも亦た定めて「畫一」の制をつくるべきだ。民間を累らわさざるに幾^{ちか}いであろう。もし有司の輕重に一任したら、必ず耗を重くして民に殃^{わざわ}いするものがあるという。あるいは、帝自身の眞意はあくまで畫一制の施行にあり、ただ、帝自身のいわゆる「兩人が事を奏して朕の批示の迥^はかに異なる者あり。これは則ち人によりて施し、材を量りて教うるなり」であつて、時に人を見て言い方を變えていたのでもあろうか。だとすると、このような問題においてこそ「讀者は當に帝(原作朕)の苦心を體」せねばなるまい。

(イ) 火耗は州縣の應得の項を差ツ引いて存留し、その残つたものだけを提解させたらよい——(すなわち楊宗仁が湖廣省で行つたような、私のいわゆる少提型の提解法(二二頁)——)がよいとする意見。これに對しては、しばらく存留して虧空の穴うめに使うとでもいうなら、國計に益あつてそれも結構。さもないかぎり、やはり一おうは全部を提解させる。その上で分けてやる方が弊害が少ないとするものであつた。(二) 覆奏にはまた、諾岷・高成齡という

お立派な二人に命じて山西省で試験的にやらせてみたらという意見があつた。明らかに、やれるつもりなら、存分やつて御ろうじ、御手並み拜見といつた、冷やかし氣味、ないしはからかい氣味の意地のわるい音調である。ややムキになつた雍正帝はこれに對して、

この言は甚だ非なり。天下の事には惟だ、「行うべし」と「行うべからず」の兩端あるのみ。もし以つて行うべしと爲さば、これを天下に通行すべし。もし以つて行うべからずと爲さば、亦たこれを山西に試みるべからず。譬えば、病を治するに漫りに醫藥をもつてこれに試みるも、能く愈ゆるもの有ること鮮なきがごとし。いま、山西をもつて試行の省となすこと、朕は忍びざるなり(『實錄』二二)。

要するに、諾岷・高成齡らをモルモット扱いするのは御免だといつて、試行の勧告を手ひどくはねつけている。

(イ)から(イ)までの帝の論駁なり見解なりは、(四)についてはともかく、その他は志向的に高成齡の考えと大同小異であり、したがつてそれらの場合の論旨は、むしろ攻撃的一方であつた。威勢がよい。だが(二)の場合のようにムキに

なつてしまうと、相手の思う壺であつて、勝負はまけである。論旨も表面的な見せかけの鋭さにも似ず、内面的には防禦におちる。こうして最後に、(六)火耗の提解は經常可久の道ではないという覆奏の意見に對しては、ほぼ全面的に賛意を表せざるを得なかつた。なるほどここでも帝は、覆奏者たちに對して、お前たちの議したのは「國計」のためなのか。「民生」のためなのか。「州縣官」のためを圖つたに過ぎないのではないかと、一と太刀するといところを浴せかけてはいる。州縣官のためとは、けつきよく覆奏者たち自身のためと同義に歸すること言うまでもない。しかも一方、帝は、いま火耗を提解させるのは、もともと一時的な「權宜の計」であることを言明し、さらに臣僚の良識に懇えるという形で、州縣官までもが亦た傳説的な名宦のようになり、國庫金に穴をあけたり、小民を剥ぎ取るようなことをしない。そして各省の火耗がだんだん輕くなつていき、けつきよく全部廢止されるようになるのが「朕の願い」であると言ひ、著しくそれまでの調子を和らげているのである。

この論駁の上諭を結ぶに當つて雍正帝は、かさねて「爾ら

の議するところは朕の意と合せざる」ことを斷言し、さらに續けて、

もし再議せしめんも、爾らは必ず、朕の諭に遵がつて

「行^ゆうを准^{ゆる}さん」むねを議覆せん。朕も亦た、その

〔耗羨の提解の〕弊なきや否やを保する能わざるなり。

各省の能く行^ゆうものはその舉行するを聽^きし、行^ゆわざる

ものも亦た必ずしも強いざれ。この諭旨ならびに爾ら

議するところの本（題本、後説）をもつて交して内閣に

存せよ。

といつてゐる。

「弊なきや否やを保する能わす」。この一語のうちには、

人を信じようとして人を信じきれぬもののみ持つ弱々し

さがあり、そこはかとなき哀感がただよう。この時あれば

と信頼を寄せていた高成齡に對しても、三年後（五年六月

六日）には、近かごろのお前を觀ると、まるで昏憤^{もろちん}した光景

だと、むしろ口汚いまでの罵倒を浴びせずには居られなく

なる。かと思つと、その罵倒の妥當性を裏書するかのよう

に、山西按察使蔣洞からの手きびしい高成齡批難の奏摺

がとどく。理由にも事缺き、成齡が司庫に提貯された耗羨

公費の一項から、およそ往來酬酢^{つぎあいそんかい}等の費など、ちつとも「公

事」ではないことに取用し、數萬兩以上にものぼる大穴を

あける。かれこれその彌縫策にあせつて州縣官の怨みを買

つてい^ぬと言^ふうのである。ためにしようとする反對派の策

謀だつたかも知れぬが、それにしても成齡にとつて名譽な

ことではない。さきに「弊なきや否や」という弱々しい發

想をさせたものは、帝の腦裡をかすめた、このような成り

ゆきに對する危懼ないしは豫感であつたと見て誤りないで

あろう。

ともあれこのようにして、火耗の提解歸公はついに、少

なくとも法律的には、一つの任意事項として實施——試行

ではなく實施されることになつたのである。

雍正帝にとつては、あの爾らの倣^{なま}去^きくに任憑^{まか}さんの決意

（一二二頁）に次ぐ、第二段目の讓步後退であつた。耗羨提

解の問題は、ここにいたつて完全に「題本の世界から奏摺

の世界に移^{うつ}らざるを得なかつた。題本と奏摺とはともに

臣下から天子あてに呈上された文書のこと。ただ、概して

い^へば題本の内容は公表された表向きの政治であり、奏摺

のそれは封鎖された裏口の政治である。耗羨の提解が、そ

の歸「公」の名にもかかわらず——あえて「私」事にちか
いとまでは言えずとも、ともかく——「正供」としてのこ
となら當然もつていたはずの、當時の常識にいわゆる「國
家」的な性格を缺き、まづたく「地方」的な性格のみを帶
びてきたゆえんに外ならない。雍正帝自身の言葉を借りる
なら、耗羨は止だ「地方中の公用」となすべく、「國家の
公用」となすべからざるものに成りおわつたのである。帝
はこれいらい、耗羨關係のこととなると「専ら各省の總
督・巡撫に一任し、彼らの責任において一切を處理させ、
彼は單に相談に預かるだけとしたが、後にはその相談に
預かることさえも拒否した」。六年四月二十二日の提解史
(二部一九二頁所引)は、要するにこの、帝の政治的態度の公
式的な表明に外ならない。

雍正帝がその即位の初め、火耗を「斷然禁止」しようとし
たことは前述のとおり。彼はまだ百パーセント祖父「順
治帝的であつたのである。しかし一回・二回と漢人官僚機
構の抵抗に譲歩し後退していくうちに、次第に父「康熙帝
のもと居た座の方に近か寄つてきた。ただ總評的な意味で
彼がより順治帝的であつたか、より康熙帝的であつたかを

反問されるなら、私はためらいなく、前者だつたと答えた
い。

「より」どころか、彼は「はるかに」順治帝的であつた
のである。この場合の譲歩といふ後退というのも、聞こえ
こそ惡るけれ、要するに彼の政治家としての勸のよさとい
うか、するさと言うか、一種、節度のよさを物語るものに
すぎない。二年七月六日の上諭の時にも、その程度まで譲
歩し、後退しさえすれば、反對者の鋒先は一おう挫かれる
し、また、督撫以下地方の各官も必ず自分に追隨してくる
ことを十分計算すみだつたのである。じじつ、直隸巡撫「
李維鈞のごときは、上諭と正確に一カ月の八月六日、邸抄
中でその上諭の内容を知つたとして、各省督撫の「當然遵
行せねばならぬ良法」だと摺奏している。當時としては、
まさに響きの相應するがごとくであつた。六年三月ともな
ると、帝は、近日直省の相率いて仿行するものが「頗る多
い」ことを傳え、その四カ月後には、後引のように「多い」
を「ことごとく皆」に改めている。また、帝自身が耗羨の
提解歸公に對して、決して間違つたことをしておらぬとい
う、道義的な確信を堅持していたことは、諸岷らの行爲な

いしは耗羨の提解そのものを、再三「甚だ善し」²⁹「善策なり」³⁰「良策なり」³¹「極美の事なり」³²などと最上級の語辭をつくして褒めたたえ、ことには六年七月十一日、河東總督田文鏡の耗羨提解に關する奏摺に對して、

朕の踐祚より以來、この舉は實に「善政」に屬せり。

今 各省「ことごとく皆な」仿效して爲せり。³³「但だもし、稍³⁴したも不公 治³⁵わざるに涉らば、亦た以つて行³⁶うべからざるなり」。

といつてゐる事によつても明らかであろう。帝が耗羨處理の相談に預かることさえ拒否するようになったのは、一面、反對勢力に對して無用の刺戟を與えることを避け、他面、提解歸公のための軌道がほぼ完成したという確實な見通しを得たために外なるまい。

あるいは、こうも言えよう。雍正帝自身は繰りかえし耗羨の提解歸公の開創は、朕より諭したのではないことを宣傳する（一九二頁の例、その他）。その子・乾隆帝も極めて慎重に、父帝が督撫・臣工の奏請を「俯允」されたとの説を固執して孝子の道を踏みはずさない。この間にあつて乾隆初期の歸公派の人々が、まつたく同じ事に關して、世宗憲皇帝

は「謀成獨斷³⁷」とか「宸衷獨斷³⁸」とか言つてゐるのは、實に印象的な對比である。しかもこの對比においてこそわかれは、雍正帝の耗羨問題についての政略と眞意とを識別することができるとであらうと。

ところで、『硃批諭旨』などを見てみると、公用・公費などの縁語の一つとして「公項」という言葉が出てくる（二九頁）。雍正四年以上の文献にも見えなことはない。しかし大勢からいふと、岩見氏の指摘するところ、五年ごろから一般的に使用され始めたといふう推定することのできる言葉なのである。あたかも耗羨の提解がかなり多くの省で行われるようになった時期と一致する。このことからして氏は、公項とは「司庫に解貯せられた耗羨銀兩を、會計上の地位を主にして稱している趣きが強い」ものと見てゐる。これは正しい解釋である。少なくとも結果論的には、この解釋は全く正しい。例外的に「耗羨」と「公項（充公の項）」とを會計上の費目として對照兩立させてゐる場合（二一九頁）を除けば、その時代の人々——たとえば田文鏡のごときは、正賦のはかに又た「耗羨」があるのは、原³⁹もとと地方の「公項」でもつて地方の公事を辦理せんことを期

しているのだ（岩見氏既引）といつて、耗羨と公項とを全く同一視していたし、また趙城は、耗羨の使い残りに關して、これを「貯司庫」統歸公項。以爲地方公用。たいと言つており、その他多くの、これに類する例證の存在を指摘することができからである。

ただここで少し注意せねばならないのは、肝腎の雍正帝自身における「公」「歸公」ないしは「公項」の概念が、不思議なまでに動搖を繰りかえし、あるいは屈折を續けていたことである。この場合は必ずしも、帝が意識的に「人を見て言い方を變えていた」とは思えない（二〇四頁）。むしろ帝自身の考え方が變つていたのである。帝が最初、康熙前半における宋學と同じように（一四六頁）、公務には正項錢糧をと、もつとも常識的に考えていたころ——つまり、耗羨の提解歸公が初めて問題になるか成らなかつたかのころにはまだ、「公國」、したがつて當然「公項」正項」となるべき位置どりで物を考えていた事はほとんど疑いないところ及早くも二年閏四月二十一日には、河南巡撫石文焯のいう、その需費は統べて「公用項」下において支用せんの一語に對して、「公項」は正に此等の處に支用すべし

との硃批をかえした。同年三月三日の硃批（一九六頁）と同じ趣旨であつて、明らかに「公項」正項の立場である。ついで耗羨の提解がほぼ軌道に乗つた雍正五・六年ごろになると、耗羨を非正項とすることは變らなかつたが、公字の解釋については再び「公項」正項の立場に戻つてくる。虧空の彌補が完了した場あい、それに使つていた耗羨をどう處置するかの問題に關して、「あに公帑（正項）に收入するの理あらんや」とも、「もし歸公して餉（正項）に充つるは斷じてこの理なし。かつ恐らくは相沿う日久しくして遂に公項とならん」ともいうものなどがその一例である。この再三の動搖は恐らく、帝の關心における再三の戰術的な變換をそのまま反映するものであらう。ただし、主權者にけるこの概念的な動搖にも拘らず、一般的には前述のような、公項とは耗羨、とくに司庫に貯えられた耗羨である。それは私項（次頁參照）の反對物ではあるけれども、必ずしもいわゆる正項ではない。まさしくそれらの中間的な一項目だという風な考え方で固つてくる。そして結局、乾隆帝ともなると、

いまだ火耗を解せざるの前、地方の一切の公務は皆な

官・民の承辦するに係り、今は公項を動用せり。「公項」は猶お前の「火耗」のごときものなり。⁸⁵

と公項を定義づけることに成つたのである。隙だらけな定義などとは、このさい言いツこなしにしよう。

ともあれ公項とは、地丁錢糧の火耗、もしくは性質上これに類似する羨餘的な財政収入が、州縣その他から布政司庫に提解され、公費・養廉銀・虧空の穴うめなど、主として地方的な用途に充てんがために貯えられていた經費のことであつた。より簡明には、司庫に提解されて公的な性格をもたされた耗羨、それこそが公項であつたのである。

公項は明らかに一箇の歴史的な概念であつた。雍正期以前には先ずあり得なかつたことであろう。なるほど、たとえば楊宗仁の傳には、康熙五十七八年前、彼が廣東巡撫（五十七年～六十一年）として行つた上疏中の一句だとして、「地方に已むを得ざるの事あらば、當に督撫等の得しところの公項を以つて抵補すべく、數らざれば濟うに公捐を以つてし、必ず課裕をして虚懸せしめざれ」というものを掲げている。雍正以後の知識で書き改められたとも見得なにかぎり、それ以前には、公項の語が全然なかつたとも言

いきれまい。ただ、それ以前には極めて稀であり、たとえ有つたとしても、司庫に提解された火耗の意味をもたなかつたことは疑いない。そのような意味をもつたものとしての公項は、完全に雍正期的であつたのである。

そこで結論的にいうなら、怪物漢人官僚機構のもつ恐るべき集團的な反撥力を壓えつなだめつしながら、康熙期までは州縣官の完全な「私項」——（あまり見なれぬ表現だが、ここでは雍正帝自身が、州縣地方官には實に萬やむを得ない「公私兩項」の用度がある。耗羨を全く革めるようなことは行れるものではないと言ひ、乾隆帝がより直截に、耗羨はまだ提解されない以前には尙お「私項」であつたと云うのによつた）——としてあつた耗羨を、不徹底でこそあれ、ともかく「公項」——當時の人々一般、とくに乾隆帝のいわゆる公項にまで高める。これは雍正帝のするどい判断力と緩急自在な見事な政治力とでなければ、とうてい達成することのできなかつた大きな事業の一つである。帝の死後までもなく反對論者はけつ起し、いわゆる歸公・歸官の論争を繰りひろげた（第四節参照）。これまた、その事業の困難さと、それを仕とげたものの偉大さとの反證にほか

ならない。この事業を達成したことに於いて雍正帝は、決して康熙帝的ではなく、より、順治帝的であつたところか、はるかに順治帝的だつたと言わざるを得ないのである。耗羨提解問題を通しての、帝の小民に對する善意についてはまた後で觸れる機會があるであらう。

(e) 耗羨提解の三類型と各省における加耗率

耗羨の司庫への提解歸公、すなわちその公項化は、雍正元年、湖廣省および山西省にはじめられ、ついで二年から三年にかけて直隸省・山東省へと倣行されていつた。大體において、お膝もとちかい北方省分で早く見ならわれたことは、二年十一月二十五日の浙江糧道蔡仕舛の奏摺に、北方省分では火耗銀兩がすでに藩庫に提貯されたので、交際・陋規はすっかり裁革されてしまつた、と言つてゐるところからも明らかである。そのご南方その他の省分にも提解の風が波及し、二三年間ではば全天下に行きわたつたことは前述のとおり。

この耗羨提解の普及過程を史料によつて實證的に追跡することは、もとより必要なことではあり、興味のないことでもない。ただ、丹念にやるとなると一章の紙數を要する

大仕事でもある。とうてい本稿の手に負えることではない。また現在の私のように、いわゆる私項から公項への推移を主題とするものにとつては、必しもその詳しさを必要ともしない。一應のことなら岩見氏の叙述がよく纏つてゐる。十分である。それでここでは、耗羨提解方式の型と、提解のもつ歴史的な意義をさぐるための一助にもなる、耗羨の徴収率の點を主とし、全雍正期をひと纏めにして平板に叙述しておくに止めたいと思う。できるだけ、年次的に整理することを心がけはするつもりだけれども。

耗羨の提解歸公は、岩見氏もいうように、何分、帝は直接手を下したのではなく、あくまで地方官の責任において行わせたのであるから、加耗の率が異なるのをはじめ、省によつて差異があり、また督撫の交代によつてやり方の變つた場合もある。

まず型の問題だが、耗羨の提解歸公には大別して三つの型があつた。

(i) 全提型 第一は、ある一省中のすべての州縣の耗羨を、一おうは全部布政司まで提解させるといふ、いわば全提型のそれであつた。高成齡條奏にみられる山西省の場合

(二九五頁)や、實現しなかつたとはいへ、趙城が六年冬、湖南省で行おうと努力したような場合(一九一頁)の提解がこれに屬する。

〔山西省の場合〕 本格的な耗羨提解の草分けともいふべき山西省では、その徵收率は前述のように加二をもつて始められたが、その虧空の穴うめの進捗にともなつて率の引き下げが企てられることになつた。三年八月初十日における巡撫伊都立の奏摺に、明四年の錢糧開徵を手始めにして、耗羨を再た酌減して皇仁を廣めたいというものがその切っかけである。山西按察使蔣沔の五・六年ごろの報告によると、前督臣伊都立が議定した新徵收率は加一三であり、これだと、毎年収めるところの耗羨は三十七萬一千餘兩であつた⁴²という。この徵收率の實情については、六年秋間、山西地方を巡察した戸部給事中の宋筠が興味ある報告(九月十三日)を残している。

錢糧の耗羨は加一有三に定議せり。臣の巡察して至るところの州縣には、加一四五・加一七八より以つて加二に及ぶものあり。加一三の數より較らかに多しと雖も、しかも民は俱に相安にして並つて怨聲なし。

規準率と實徵率との開きは、次にのべる河南省の場合よりもやや大きい。その後二年(八年十一月九日)、同省の陵川縣知縣某の重耗^{ウヰ}ぶりが問題化した時にも、巡撫の石麟は、該縣の收耗は實は止だ「加一三」の數なのだが、市販と庫平の誤差などを耗内に算入したので加二の傳説^{ウヰ}も出たのだといつて辯護している。加一三の率は雍正期を通じて維持されたのであらう。

〔河南省の場合〕 さて雍正二年春間、河南巡撫石文焯が「諾岷のなすところに效法して」行つたといわれる提解は(二月三日硃批)、もちろん、州縣の火耗贏餘をもつて一槩に盡く藩庫に歸するというやり方であり、闔省の各官には分別して養廉および一切の公用を給するが、それらは悉く司庫から支應する。とくに各官の養廉は、布政使から季を按じて給與することになつていた⁴³という。このさい彼自身は、徵收率を平均加一三程度とにおいて四十萬兩見當の収入を目ろんでいたが、この加耗率は、四年三月(十日)ごろ河南省を巡察した戸科掌印給事中張元懷の報告に、同地方の州縣では錢糧の火耗として毎兩につき一錢四五分不等を加えているといひ、またその三年後(七年八月三日)、河

東總督の田文鏡が、河南省での耗羨は、一錢一分からおこつて一錢二三四五六分不等にいたり、一錢七分のものともなると十カ處に及ばないというものなどに較べると心持ち低目である。しかし大差はない。その小差は州縣官の隠し所得となつていたものであらう。

本省では耗羨の提解がもつとも順調に行われたものと見え、雍正十一年六月己未の上諭『實錄』に引かれた〔署〕巡撫孫國璽の報告によると、そのとき司庫には、本地の公事に支用したものを除いてもなお銀七十萬兩有奇を存貯していたという。帝はそこで「恩を格外に邀^{まか}」えしめて本年の地丁錢糧を四十萬兩だけ蠲免し、存貯の耗羨をもつて數に照らして撥補還項させることになつた。虧空を耗羨で穴うめすることの、正しく延長線においてある政策には違いないが、しかしこれは、言わば耗羨をもつて正項を補助しようとするものであつて、六年度以降における浙江省の場合（二二五頁）とは正反對の現象であることを注意すべきだと思ふ。

〔陝西省の場合〕 その二年冬十二月、石文焯は、河南巡撫署理浙江巡撫印務から西安巡撫に調補された。翌年五

月、甘肅巡撫に轉じるまでの約半年間の在任である。陝西省は地丁錢糧百三十六萬兩にちかい相當の大省であつたが、ここでも彼は得意の耗羨の處理にあたつたものと思われる。乾隆帝が雍正十三年十二月〔辛巳〕、つまり即位の早々、總理事務王大臣らに下した上諭のうちに、従前、陝西の地丁の火耗は年鑿^さ（康熙六十年五月）雍正三年四月、川陝總督・岳鍾琪（三年四月）七年四月、同上）が先後して定めて「加二」とした。（かつては加二三から加四五に及んでいたことは前述のとおり（一八五頁））。そして一錢五分をもつて各官の養廉および一切の公費に作爲し、その五分は社倉の穀石を採買して積貯を裕くする用にあてる。のち積穀が十分で採買の必要がなくなると、この五分でもつて軍需・盤費の用を添助していたと言つている（『實錄』九）。その方式の火耗の處理こそ、直接的には石文焯の手がけたものであつたと考えられるからである。この場合、火耗の司庫提解がどのように行われたかについても、残念ながら直接的な文献は見當らない。ただ七年九月三日、時の西安巡撫武格が雍正帝から示された、彼に對する批難を含む某氏の奏摺のうちに、陝西では地丁を徵収するのは耗は加二に止まり「俱に

司庫に解して公に充てる」という注意すべき一句がある。

そう思つて見ると、督臣查郎阿・撫臣武格らの明示している、雍正六年度分の西安「布政司の庫貯公用銀兩」に關する數字——舊管・新収の二項で共に約三十二萬、うち共に動用過の銀約二十六萬兩という數字は、いかにも加二全提にふさわしい數字ではある。しかもこの全提方式がまた

——浙江省でこその他の方式をとらざるを得なかつたとはいへ（後述）、本來は全提主義者であつた石文焯の、巡撫としての在任中に舉行されたものだ、と見られるに最もふさわしいこと言うをまたぬ。なお、軍需・盤費の添助にあてられていた五分は、その雍正十三年十二月の上諭によつて、甘肅省における加二耗羨中の五分とともに裁減された。

〔甘肅省の場合〕

ところで、その石文焯が三年五月に巡撫に轉じた甘肅省である。本省では早くも雍正元年、署撫臣（三月？）傅德によつて、州縣から錢糧の耗羨を徵收して各官の養廉とする方針が打ち出され、ついで三年九月（二月）に至り、撫臣石文焯によつてその案が練りなおされた。彼によると、甘肅省の額徴の地丁銀は二十六萬兩有奇。糧は四十九萬石有奇。各州縣衛の徵收する耗銀は共に

四萬餘兩。耗糧は六萬三千餘石。耗銀の全部を司・道・

府・廳・州・縣・衛・所の各官の養廉に充てる。（不足分のためには他の稅規などに財源が求められる）。耗糧はその過半を道・府・州・縣の養廉および書役の工食等にあてのこる二萬七千餘石を存貯して公用に備えるというのであつた。ここでは、提解司庫のことには何ら言及されていない。しかしその後、六年二月（二十七日）、そのころ陝甘布政使の任にあつた孔毓璞はこういつている。甘肅地方では、耗羨を徵收するのに加一五からして加二にさえなるものがある。聞くところでは、前撫臣の石文焯が、甘屬では錢糧が幾らもないので、地方の公事を承辦したり各官養廉などの項があると、「皆なここから取つた」ものだという事だと。前後任者の言葉を合わせて考えると、やはり河南・陝西兩省と同じに、ここでも石文焯は全提型を採用したものと見られる。

そのご六・七年のころには、養廉「増給」のために、彼のこの方式も改めて練り直されることになつた模様である。それに參與した蘭州巡撫許容は、七年三月（十二日）、通省には少くこのできぬ公費があり、毎年銀二萬餘兩は必要

だが、向^きには通省の耗羨内から支給していたといつてゐる。

あたかも、これだけが司庫に提解されていたかのようでもあろう。しかし實のところ、これは單に、司庫に提解された耗糧中の公用分の、變價（換銀）されたものに過ぎなかつたのではないかと思う。陝甘地方での糧價は、三年五月六日の報告では、石あたり約七錢（許容奏摺）、六年十月四日のそれでは每石、六七錢・八九錢不等（杜濱奏摺）。八錢とすれば二萬七千餘石見當で、七錢としても、糧が三萬石にもなれば、あたかも二萬餘兩の數に符合するのである。なお、乾隆帝は前述のように同省の火耗の徵收率を「加二」きつぱりとしているが、あるいはこれも雍正七年、財源捻出のための一種の率上げ措置の結果なのでもあろうか。

〔貴州省の場合〕

陝甘兩省の場合と前後して、おなじ三年の夏秋の間、貴州省では、雲貴總督『高其倬と巡撫事務を署理していた總兵官』石禮哈との間の合議の結果、火耗・稅規・官莊の三項の收入をつきあわせて、各官の養廉と一切の公費を賄おうということになつた。地丁錢糧の火耗は、大體舊來の地方別の徵收率により、平均加一五程度、上限は加二に押えるとして、僅かに二萬兩餘り（條丁分一萬兩。

秋糧分九千兩）。そこで他の二項（稅規が最多で三萬四千兩）にも財源を求めたのである。⁶⁵ しかもこの場合の錢糧火耗がやはり全提で、「一例に提解して」歸公しようとするものであつた。⁶⁶

〔四川省の場合〕

その後一二年——雍正四五年——ごろのことだと思われるが、川陝總督『岳鍾琪は奏請して、四川省における一切の雜派供給を盡く裁革し、ただ加三の火耗のみを存して均しく通省の屬員に與えて養廉とするこゝとした。⁶⁷ 七年八月（六日）にいたつて貴州巡撫の張廣泗は、四川から隸屬換えになつた遵義地方に關してこう言つてゐる。この地方の州縣では、向^きには四川省で、加三を按じて火耗を徵收され、「起解して歸公」してゐたと。當然、岳鍾琪のやり方もしわゆる全提であつたと見なければならぬ。ただし、四川省では錢糧の額高そのものが少なく、加三の耗羨といつても物の數ではなかつたせいから、「正耗！」のほかに毎兩五分・一錢から二錢五分不等にものぼるヤミ耗羨、いわゆる「幫貼」も行われていたという。最高加五五の徵收である。⁶⁸ ヤミの分は當然司庫には提解しないで州縣に存留したものと思われ、實質的には必ずしも全提では

なかつたのだけでも。

四川省におけるこの驚くべき重耗は、いうまでもなく、同じく「驚くべき」程度で行われていた隠田・匿税行爲の反面現象にしかすぎない。雍正八年、大規模な土地清丈の完成とともに、當然是正されねばならぬものであつた事は、その前年八月（六日）、貴州巡撫の張廣泗が、川省清查の原卷によつて、「査丈が清楚すると火耗も遞減できるという議」があると指摘しているとおりである。

地丁銀の額数は清丈の結果、二年度の約二十三萬兩から八年度には一舉に六十四萬兩ちかくに跳ねあがつた。乾隆十八年度の約六十六萬兩と大差はない。この大增額を前にして火耗徵收率は一たん加二五にまで引き下げられたらしい。乾隆帝の二年閏九月丙辰朔の上諭に（『實錄』五二）、川省の耗羨銀兩は、向には公用が敷らなかつたので「每兩に銀二錢五分」を完めていたというものが、かつての加三に裁減を加えられた數字だと思われるからである。帝自身はそのとき、さらに一錢を減去して止だ一五の數を存したのであるが、あくる三年十二月丙申の上諭には（『實錄』八三）、裁減後も不肖の有司の營私行爲の絶えないことを思える、

その憂えの言葉の導言として、

向來、四川の火耗は他省に較べて重しと爲す。わが皇考（雍正帝）および朕は陸續と旨を降し、裁減してすでにその半ばを去りたり。

といつてゐる。その皇考の裁減が加二五までのそれであり、しかもそれが雍正八年に行われたと見ることは、恐らく誤りのない判斷だと思う。全提法そのものとなると、徵收率が加二五になり加一五になつても變るところが無かつたのであらう。

〔江蘇省の場合〕 四川省の場合とはほぼ時を同じうして、雍正五年冬、江蘇省でも耗羨提解のことが論議されるようになった。十一月六日付けの巡撫陳時夏の奏摺によると、この時その提解方法に關して、彼と布政使張坦麟との意見は對立した。巡撫の主張するところは、加一の火耗銀兩四十一萬五千二百五十兩を、雍正六年以降は、「全提の例に照らして」各州縣から正項錢糧と一總に司に解つて經收せしめ、督撫司道府州縣の各衙門に給すべき養廉は、定めた數のとおりに季ごとに給發しようというものであつた。方法そのものは山西・河南等の諸省のそれと全く同じであ

る。しかも結局この方法が實施されたことは、張坦麟自身も、六年正月中に、十二府州縣を傳集して通省の耗羨を加一で徵收、正項に隨同して司庫に起解させるようにしたといひ(二月十五日奏)、また同じころ雍正帝も、陳時夏が人に向かつて、「旨を奉じて、耗羨を全提せしめた」と言ひふらしていたと批難していることからも明白である。七年春にいたつて某人の密奏中に、江南省では……錢糧がこのように徴しにくい。ところが督撫大吏には清釐調劑の方あるを聞かず、反つて通省の火耗を、往日の多寡に論なく加一に畫定して「盡く提解」して公に充てている、と言つてゐるのもその事實を裏書するものといえよう。

〔安徽省の場合〕 江蘇の姉妹省である安徽では、巡撫の魏廷珍が初めは必ずしも全提方式には賛成でなかつたようだけれども、けつきよく六年三月(十九日)にいたつてやはりその方向に踏みきり、七年正月十日の奏摺には、年額實收一百九十八萬餘兩の正雜兩項錢糧に對して、「應提」の加一耗羨銀を十九萬八千餘兩と見こみ、これを通省の公務、ならびに各衙門の養廉その他に振りむけようとしてゐる。

〔直隸省の場合〕 おそらくは七年春間、直隸省の署督臣(七年一月、八年六月)楊嗣が新任の布政使王夔と確議し、在來の方式に改訂を加えて新たに行おうとしたのもこの方式であり、平均加一三弱の耗羨銀は三十萬兩を「一概に司庫に提解」し、通省の公費等にあてることが言うまでもなく、各官の養廉のためにも成規を酌定してこれを分給しようとするものであつた。

(四) 多提型 型の第二は、州縣に必要とされる養廉・公費の分だけは初めから州縣に扣留させ、その残りの各官の養廉分と通省の公費分とは、これを司庫に提解させるという、言わば多提型の方式であつた。

〔山東省の場合〕 われわれはその一事例を山東省に見いだすことができる。本省では在來、ともすると加二・五・加三にもおよぶ重耗が行われていたが、雍正新政の嚴しい掛け聲に脅えたものか、元年末までには著しい徵收率の低下がみられた。同年十二月一日付けの巡撫黃炳の奏摺に、各州縣が錢糧と一處に徵收する耗羨は、みなそれぞれに頓減して、大率ともに加一六七の間にある。これを従前に較べるとひどい違いだ、と言つてゐるとおりである。(田文

鏡が後年（七年八月三日）、山東省では初め耗羨の多寡が一つでなく、一錢二三分のものもあり、二錢以上に至るものもあつたといつてゐるのは、この「頓減」した状態についていつたのであろう。そこで時の布政使佟吉圖（元年二月～二年四月間在任）らは——財源の過小化を恐れて大事を取つたのであろう、徴収率を「加二」の線に引下げるに止め、正項三百餘萬兩について約六十餘萬兩の火耗を収めたところ、官吏の養廉を除くのほか、地方一切の公事においても備辦して餘りあつたという。この時すでに、司庫への提解が行われたことは明らかである。ただこの時の提解の型は、多分その後のものと同じであろうと思われるだけで、文献的にこれを證明することができない。私にはできなかった。

その點まで判つてくるのは、雍正二年七月、すなわち巡撫陳世倌の在任中に、初めて「加一八」の耗羨の提解を行うようになつてからである。そのさい州縣には四分を留めて解費、より詳しくは解餉添平、ならびに公用とすることを聴した。陳世倌自身は同年九月四日、一々金額をも舉げて次のように言つてゐる。

〔火耗は〕向來、各屬、參差して齊しからず。今「加一八」をもつて通算するに約五十四萬兩を得べし。二十萬兩をもつて虧空を彌補し、二十萬兩をもつて各官の養廉となし……、餘の十四萬兩は起解添補および通省の公費となす。

五十四萬兩の十八分の四は十二萬兩である。十四萬兩では四分の數には合わないが、どうして彼がこの金額を擧げたかを詳らかにしない。ともあれ、その四分のうち公用として扣留されたのは布政使張保によると一分で、のこる三分が、後任巡撫塞楞額の證言をまつまでもなく解費であつた。

問題はそれ以外の耗羨をどうしたかである。このことについては、六年九月八日・七年八月三日等の日付けをもつ、河東（河南・山東）總督田文鏡の奏摺にも言及があるが、しかしその事およびそれ以外のことに互り、この有能な總督にも増して至れり盡せりの報知を與えてゐるものを、八年四月十一日における布政使孫國璽の奏摺とする。すなわち言う。

東省の耗羨の歸公は、従前、正銀一兩ごとに耗一錢八

分を加え、一八の内において各州縣は公費銀一分を扣留し、また解費・運費・部飯・庫飯等の項の名色の共に銀三分なるを出だすを聽すのほか、實は耗羨一錢四分を提解せり。

ここまでは田文鏡の、「解費・添平ならびに存縣辦公の銀兩を除くのほか、悉く解司を行ふ」とか「一錢四分は悉く司庫に解して公に充てた」というのと同じことである。しかし、

又た一四の内において州縣の大小を分別して養廉若干を扣除するのほか、餘銀は司に解つて「耗羨」の項下に歸入し、又た解費等の項を出だすを聽せる銀三分の内において、偏僻の州縣は脚費銀三毫を實支し、衝繁の州縣は、脚費銀三釐三毫を實支するを除くのほか、餘銀は月に解司を行つて「充公」の項下に歸入す。

となると、もはや田摺には見あたらない。

しかもこれによると、山東省でも州縣に給與さるべきものは、單にいわゆる公費ばかりではなく、養廉までもが初めからそこに扣留されたものであつたことは明らかである。一方、解費等の残りは返還させたという。けつきよく司庫

を基準にしていえば、一錢四分においては減じ、三分に關しては増したはずであるが、そのあたりの計數が一體どうなつていたか。あまりよく判らない。ただ七年六月（八日）ごろの布政使費金告——（孫國璽によると、費金吾は同年署撫臣として耗羨制に若干の改正を加えている）——が、山東の藩庫の耗羨・公項の銀兩は款項が一つでない。「耗羨」のごときは、一錢四分のものがあり、七分のものがあつた。「公項」（孫國璽の「充公」には扣缺養廉があり、雜項充公があり、撫藩分規があると言つてゐるのが、その間の解釋に光明を與えるものではないかと思う。いわゆる公項の方はともかく、耗羨の方では、一錢四分——養廉銀がゼロということとは山東省ではなかつたので、これは恐らく誤りであり、多分一錢二三分から七分ぐらゐまでが、實際に提解された數字だつたと考えられるのである。

なお、山東省での火耗の徵收率は、七年八月三日の田文鏡の奏請の結果、八年度以降は毎兩に二分を減じて加一六と押えられることになつた。その實施とはば時を同じうして、布政司における耗羨・充公の二項も、耗羨一本に統合されたのかも知れない。孫國璽がその統合を奏請したので

ある。

〔江西省の場合〕 難航ではあつたが、事態はほぼ明白である。しかしこの山東省の場合以上に判りのよい、その意味で典型的な第二型は、かえつて雍正五年春（三月十九日）、江西巡撫¹邁柱の試みた耗羨提解のうちに認められる。彼自身は、「河南・湖廣等の例に比照」してとは言つてゐるが、その實、方式の點ではそのどちらとも完全には一致しない。比照云々は「提解」するということだけに係わるのであろう。ともあれ彼の方式によると、州縣の加一の耗羨のうち、二分を酌提させて通省の公用に充てる。各官の養廉となると耗羨のうちについて分別し、一分五釐とか六釐とか四釐等々という風に提解させる。そのさい、できるだけ公平にいくように考えてやれば、各員が一年間の養廉の資にすることができよう。そのほかの餘剰は、槩して州縣に留めてやつて、州縣官たちがみずから家口を養贍する事ができるようにしてやる、というに在つたのである。

ただこの方式——州縣官に加一耗羨のうちから、糧額の多寡に照らして分別扣留させるとなると、どうしても、多いものは千八百兩にもなるのに、少ないものは止だ四百餘

兩といつた、多寡はなはだ懸殊するを免がれない。そこで七年秋冬の間には、布政使²李蘭・署巡撫事³謝爰⁴らからこれが是正策が提出される。たとえば李蘭の考えは、額徵一萬兩以下の縣分からは耗羨は提解させない。二萬兩以下の縣分は五分、三萬兩以下は六分、四萬兩以下は六分五釐、五萬兩以下は七分、五萬兩以上は七分五釐をそれぞれ提解させ、他は州縣に留めて養廉にさせる。司庫に提解する銀は合わせて約十三萬兩になる——というのである。よほど全提型に歩みよつたものであるが、ただ雍正帝は必ずしもこの説に賛成せず、實行はされなかつたのではないかと思う。

〔江蘇省の場合〕 五年冬（十一月一日）、巡撫⁵陳時夏の意見と對立し、結局日の目を見なかつた蘇州布政使⁶張坦麟の方式とは次のようなものである。すなわち、正雜錢糧の耗羨はみな加一を率とする。毎年應提の耗羨銀は三十萬兩餘（巡撫の數字と異なる）。そのうち二分は留めて州縣の養廉とし、八分は解⁷つて公費にあてる。八分二十四萬兩のうち、約十九萬兩は通省の公務および督撫府廳各官の養廉にあて、残る十一萬兩ほどを虧空の穴うめに廻すというのであつた。

雍正帝をして晋省の行うところと互いに異なると言わしめたもので、疑いもなく第二類の型に屬する。

〔雲南省の場合〕 雲南省はもとと、四川・貴州など

の諸省と同様、錢糧額數がすくなく(約九萬兩)、従つて「火耗も甚だ微なる」⁶⁰ところであつた。火耗だけを宛てにしていては何もできない。康熙時代から「公件」などというヤミ附加税の行われてきたゆえんだが、雍正六年夏(六月十二日)、雲貴總督鄂爾泰は、火耗・羨餘・公件——かつて雍正元年、巡撫楊名時によつて酌減されたもので、康熙期のままの高率なそれではない——および多少の節禮をかきあつめて合計十六萬七千兩ぐらゐの金額を捻出し、これを他の富裕省分なみに養廉その他に充てようとした。この場合の計畫をみると、各府州縣には本地方の公事に辦應するための銀三萬五千餘兩を存留する。あとは布政司庫に起解させて、うち十萬二千餘兩を、按察司・道・府・州・縣官およびそれ以下の官の養廉に見こむ。二萬餘兩が「省中」の公費として用意される。のこる一萬三千(?)餘兩は、これを司庫に存貯して「地方」緊要の公事を辦すべき場合の預備金にすることであつた。これなども型としては

やはり、第二類に入れるより仕方のないものであろう。

〔福建省の場合〕 私はこの論文の第三節で、いわゆる

彭氏系數の平均的な比率を證明するために、福建巡撫劉世明の耗羨歸公の計畫を、引きあいに出したことがあつた。ここで重ねてそれを引きあいに出したいと思う。

彼のその計畫は七年正月二十五日付けの奏摺のうちに見えてゐる。彼によると、そのころまでの本省での公費の支辦方法は、行き當りバッタリで畫一でなかつた。そこで彼は——(といつても、もともと布政使趙國麟の發案によつたものらしく、日付けはおくれるが四月二日付けの國麟の奏摺には、福建の州縣での錢糧の加耗は、従前は輕重が等しくなく、加一から加一六七になるものもあつたが、撫臣に稟請して嚴しく禁革し、概して加一をもつて徴収してもらうことにしたと言つてゐるけれども)——地丁錢糧年間一百五萬兩として、火耗は一おう加一にとどめる。正銀一兩の完納につき九錢の串票^{ふけちり}を給付するのである。しかし併戰^{あわ}(二二頁)などを連せると、けつきよく每兩につき一錢四分にはなる。それを十四股^{くふ}にわけける。一股は批差解司の盤纏^{ちやうちん}および雜項の費用。四股は知縣の養廉に存留し并びに該縣

の公用に充てる。一股は知府の養廉に分給する。その他の八股は盡く司庫に歸し、通省の公用・院司道各官の養廉および虧空の穴うめにするというのである。

これに對して雍正帝は、錢糧の多寡を論ぜず一律に四股だけをのこすでは、州縣として苦しいところもあるであろう。その點、詳酌せよとは注意してこそおれ、計畫そのものには大賛成であつた。ほぼそのまま實施されたと見てよいであろう。この場合——知府にばかりは、もちろん距離の關係からだが、州縣から一股分を送り届けさせている。

ここにやや異色はあるが、大筋においてはこれまた第二類に屬するものであつたと言わねばならない。

〔奉天府の場合〕 同じ七年の夏、北邊の奉天府でも、各省の事例に照らして耗羨中より養廉を酌給し、久しく革除されていた節禮・陋規の補いとなつた。六月四日付の署府尹王朝恩の奏摺によると、加一の耗羨銀がほぼ三千四百六十兩。うち一半を酌留して州縣の公用および養廉の資とする。残る一半の約一千七百三十兩を、各屬から承德縣に解赴して庫に貯わえ、そこから奉天府尹・治中・通判・錦州府等の各官に分給して養廉の用に充てさせ

たのである。承德縣庫が他省の布政司庫の代用であつて、これまた第二類の一變型に外ならない。

(ハ) 少提型 型の第三すなわち最後のものは、州縣か

らは原則として、通省の公費にあてるための耗羨、さらにもし必要とあれば、虧空の穴うめにつきこむための耗羨だけを司庫に提解させる。もちろんついでを利用して、布政司およびそれと同城の諸衙門への養廉分まで、その提解分と一しよに運ぶことはありもしたのである。しかしそれはあくまで、州縣から直接それらの諸衙門に送り届けるという建て前にすぎない。州縣分の養廉および公費を初めから州縣に存留することは言うまでもなく、上司諸衙門への養廉等をも、むろん、ある公定された配分率によつてこそあれ、司庫には提解しないで州縣から送り届けるというのがこの型の特徴であり、提解分を基準にするかきり、少提型といつてもおかしく無いような型であつたのである。

〔湖廣省の場合〕 この型の代表的なものが、雍正元年いちちはやく楊宗仁によつて實行され、そのご大體そのまま行われてきた湖廣省（湖北・湖南）での耗羨提解方式であつたこと言うを俟たない。

〔直隸省の場合〕 あくる二年八月、直隸巡撫の李維鈞

が前述のように(二〇七頁)、邸抄中で例の九卿の議覆に對する上諭を読み、火耗の提解は各省督撫の遵行せねばならぬ良法だとして、さつそく本省内での實行計畫にとりかかった。耗羨の提解によつて、省内虧缺銀四十一萬三千兩の未完分二十一萬三千餘兩は二年内に完補する。あわせて道府州縣官に養廉・公費を確保する、というのがその大綱であつた。もつと詳しくいうと、直隸省の諸府・直隸州のうちで、錢糧火耗の輕微なものは提解を免する。その他の諸府・直隸州の額徴の糧銀は約二百二十萬兩。その耗銀は約二十三萬兩。平均して加一強の徵收率にあたる。このうち六萬兩は道庫に留貯して虧空の穴うめに使う。他の五萬兩も同じく道庫に存貯して通省の公費にあてる。さらに二萬兩は道府各廳の養廉の資とする。残る七萬餘兩⁶⁰は、これを養廉として大中小の州・縣・衛に分別し支給すると言ふのであつたのである。

これらのうち、明白に「道庫」に留貯し、もしくは存貯するといわれた計十一萬兩が、他省でならば指しすめ「提解司庫」に當らねばならぬことは言うまでもない。直隸省

の諸府はもと六部に直隸し、「守道」がその錢穀の事務を司つておつたのを、雍正二年にいたつて始めて守道を「布政司使」に變えたのである。⁶⁰ そのご、雍正五年閏三月(十二日)、そのころ直隸總督を署理していた宜兆熊も、雍正「三」年度分の耗羨の使途に關してこう言つてゐる。前任(前々任)督臣の李維鈞は奏請して、保定等の六府屬および五直隸州ならびに州屬の耗羨をもつて、銀約十一萬三千兩を「提解」させ、六萬兩でもつて無著の虧空を彌補し、五萬兩をば各項の公用に充てたと。正しくそれである。少しあいまいなのは、その他の九(一)萬兩が果たして一旦、道庫なり司庫なりに提解されたかどうかの點だが、ただ宜兆熊は、同じ奏摺のなかで「四」年度分の耗羨にも言及し、

〔前略〕應に徴すべきの耗羨銀は二十六萬九百五十四兩零。うち内部に起解し及び司・府の平飯ならびに各官の養廉銀一十三萬五千八百十三兩零を除き、「實に司庫に提解するの銀」は一十二萬五千一百四十一兩なり。俱に庫に存して、地方の公事あるに遇わば奏明支用せしむ〔後略〕。

と言っている。問題の九(?)萬兩は、初から道庫(司庫)に
は提解されなかつたと見て誤りはあるまい。

とくに宜兆熊らは、前督臣(三年八月、四年十二月)李紱の
企圖した、雍正五年からは一律に、各州縣の耗羨のうち四
分を提解させて「道府各官の養廉」および通省公事の需と
なし、その餘の六分をその州縣に存留して支用させようと
する方策——つまりは、私のいう「多提型」への切り換え
には反對するものであつた。反對の主たるというか、表面
上の理由は、その「一律」主義を不可とするものではあつ
たが、しかし内心の眞の理由は、むしろ多提型そのものへ
の嫌忌にあつたと見なければならぬ。この點からしても、
督臣李維鈞の實施した耗羨の提解は、湖廣省式の少提型
のものであつたと思われるのである。

〔浙江省の場合〕 同じ雍正二年内に、河南巡撫として
浙江巡撫印務を署理していた石文焯が、浙江省で行つた耗
羨の提解方式も少提型であつたように思われる。

浙江省は、田糧が重くて火耗が輕いとか、公事が繁多で
火耗が輕少だとかで特色をもつた省分の一つであつた。他
省では加一・加二になるところが有つたのに、本省では先

には、大縣では每兩六分、小縣でも八分という有様であつ
た。多くは四五六分不等から、中縣は七八分、小縣でも亦
た止だ能く加一のみであつたともいわれる。そこへもつて
きて巡撫(二年二月、同年八月)の黃叔琳が——もとより、雍
正帝の意を迎えようとしてであつたのだらうが、到任早々、
陋規は革除すみのところに、火耗も勇ましく五六分に切り
下げてしまつた。「槩して五分」をもつて耗としたのだと
もいわれる(修吉圖)。額徵二百六十餘萬兩で每兩五分の火
耗なら(修吉圖)、年間十三四萬兩。五年十二月三日に、
浙江總督管巡撫事の李衛が、浙屬の州縣の舊有の耗羨は、
「十四萬兩有奇」だと斷言しているところから見ると、そ
れはやはり一概に五分だつたのであろう。

いずれにせよ、弱つたのは後任者たちである。(早まり
すぎて後任者に迷惑を及ぼした點、黃叔琳は、廣西省での
巡撫(二年四月、四年正月?)李紱と好一對である)。布政使
「修吉圖のごときは、今さら火耗の徵收率を上げて怨みを
買うのもまずい。こうなれば「俸工公捐」の一手あるのみ
だと雍正帝に、いわば詰め寄つた形であつたが、結局、石
文焯の任にいたるを待つて、とかくの處置を談合すること

になつた。

その石文煒——河南では全提型の耗羨歸公を斷行した彼も、さすがに浙江省ではそれができない。

臣 査するに、豫（河南）省の諸務、辦理して悞なきゆえんの者は、皆な耗羨これ頼れり。浙省は耗 輕くして、豫省と一例にして論すべからずと雖も、然もこれを舍^おいてより外、並^たえて以つて設法辦公すべきの項なし。……臣は修吉圖と細しく斟酌を加え、先ず各州縣の現徴の錢糧内より、兩ごとに火耗二分を量提して以つて公用を濟^なし、餘は盡心竭力、料理妥當なるを俟たん〔後略〕。

三年冬間（十一月二十七日）、浙撫印務を署理していた福敏の報告によると、二年度に提解された二分耗羨銀は六萬一千四百四十八兩（うち已完は四萬一千五百四十一兩零）、あくる三年度のそれは六萬一百六十三兩（未完多し）であつた。毎兩五分で年間十四萬兩に比べるとやや多目だが、今その由つて來たところを詳らかにしない。がともかく福敏によると、この二分耗羨銀は、「原^もと請うて積儲備賑の需とせん」としたものであつたと言う。石文煒のいわゆる「公用を濟^なす」

の言いであつて、要するに彼は、この種の通省公用のために毎兩二分の火耗を提解させるだけで——つまりは、第三類型の歸公程度で何とか形をつけざるを得なかつたのである。

もつとも浙江省では、雍正六年度以降、雍正帝の發案——いわゆる格外の施恩として耗羨事情に重大な變更が加えられることになつた。五年十月己酉の上諭（『實錄』）によると帝は、毎年十四萬兩ぐらゐの耗羨では、督撫・將軍以下百二十員の用度公費を賄なうには足りないとする。そして杭州以下の九府の額徴銀、すなわち「正項」銀二百五萬兩のうち十分の一の補助を決意する。そのうちの半分・約十萬兩は、各官に賞給して養廉とするため「俱に司庫に提解」せしめ、該撫をして官職の大小・府州縣地方の繁簡を酌量して公平に數目を派定して奏聞させる。餘銀約十萬兩は存して公事の用とする、というのであつた。正項をもつて養廉・公費を補なう。養廉銀・公費銀の制度が、權宜的なものから恒常的なものへと移行しつつあつたことを物語るものに外ならない。（なお、そのご三年の八年十月壬子には、軍需（對ジュンガル部征討）を辦理する省分に對しては、そ

の事務の繁簡を計つて正項の帑銀三十萬兩、あるいは二十萬兩を留めんことを請わしめ、その公務が簡少で錢糧また富饒に屬する省分には十五萬兩あるいは十萬兩を酌留させて、督撫藩から府や州の庫に酌發して州縣の「急切な公事の用」に備えさせることになつた（『實錄』）。補助金制の一般化である）。と同時に、その項からの補助金がみな司庫に提解される。このことは、本來一度は司庫に集めらるべき正項である以上、當然だといつてしまえばそれまでだが、しかしこの場合のそれは、これまで州縣に存留されていた耗羨分をも、同時にみな司庫に提解させるようにした事をも含意するものとして特に注意されねばなるまい。

浙江省における提解法も、ついに第三型から第一型へと切り換えられることになつたのである。ただし浙江總督李衛は、雍正七年前後に、同省では毎兩に一分の耗羨を（州縣に）留めて解費にすることを聴^きしていたという。解費は全提型にも避けえない存留分にはかならない。

〔廣東省の場合〕 ついで雍正四年夏、廣東省でも公費・養廉銀を設定しようとする機運が動いてきた。直接その衝に當つたのは巡撫楊文乾と布政使常賚とだつたが、

前者は四月十四日付けの奏摺のうちで大體次のような考えを述べている。すなはち、粵省で公務を辦理するためには、これまでは毎年六七萬金を必要として火耗のうちから提用していた。この金額は年間四萬兩まで切り詰めることができるし、またその程度なら火耗以外から工面することができる。火耗に頼らねばならないのは各官養廉の一項だが、その場合はこんな計算になる。州縣が火耗を徴収するのは、毎兩に加一と定めたところで、戰頭・併封（二三頁）などを連^づけて細かいものを合算すると、毎兩に一錢三四分になる。いま司庫に（正項錢糧を）起解するときの平頭を三分（金高にして三萬一千餘兩になる）に抑えろと、州縣にはまだ加一以上のこる。そこから部議による戰船捐修の費一二分と、按察司など上司への養廉の費二三分を差ツぶく。それでも州縣には、毎兩五六分のものが實存しているから、養廉には事缺かないというのである。

もつとも、彼のこの考えが、そのまま實行に移されたかどうかは少し疑わしい。その相談相手の常賚か、文乾の摺奏するより十日餘りも前（四月二日）にやはり摺奏を行い、

通省には必有必需の公項ありて、毎年約計するに四萬

餘兩。皆な各屬の内より、每兩につき「四分を提解」して以つて公用に充てたり。

と言つていたし、しかも六年十月八日には、時の署理布政使^{王士俊}がこれと口裏を合わせたかのように、

粵東の丁地錢糧の藩庫に解交するものは、毎年一百萬兩に滿たず。向^ま經には督撫議定して、每兩に「火耗四分」を扣し、各州縣をして藩庫に解貯して以つて一切の公用に充てしめたり。

と明言しているからである。^四これで見ると、年間四萬兩まで切り詰められた通省公費は、一切いわゆる四分耗羨で賄うようになつたと見るべきであろう。そのため、他の計畫がどのように動いてきたかは不明だけれども。

いずれにせよ、布政司庫(藩庫)に提解されたのは、その每兩につき四分の耗羨だけであつたのである。問題の州縣上司分の養廉がどう處理されたかも知像にかたくないわけだが、じじつ楊文乾はその點に關して「按察司および道府廳員には、今、養廉の費を幫助せんことを酌定し、州縣をして各自に繳^{きよ}め送らしむ」といつている。紛れもない少提型の特徴に外ならない。

廣東省では、そのご六年冬十一月にいたつて、耗羨の徵收率およびその提解の方式に變革が加えられた。名は「加耗一錢四五分^四」ないしは「加一五六^四」でも、實は加一七八では意味がない。そこで思ひきつて加耗は每兩一錢六分に吊りあげ、他に奏銷・刑名二項の部費として九釐を加える。そこで司庫への提解だが、これについては七年暮(十二月二十七日)の奏摺中で總督^{郝玉麟}が

本司(布政司)の火耗を提取するや、每兩につき止だ「七分を提して」以つて「院司の養廉」ならびに通省の公用となす。又た九釐もて奏銷・刑名の飯費となすを除き、その餘は尙お耗銀九分を存し、即ち該州縣に應得の養廉の數を扣留して多寡勻給せり(後略)。

と傳えている。いわゆる「七分」が、かつての通省公用分の「四分」と、またかつては按察司および道府廳員への養廉として豫定されていた「二三分^四」との合計數であつたと疑いない。提解法はついに、第二型に切り換えられてしまつたのである。

〔廣西省の場合〕 最後に廣東省とは西隣りの廣西省では、前任巡撫^{李紱}の行きすぎた火耗裁減で公費の捻出に

くるしみ、けつきよく巡撫郭銑——（かつて耗羨の提解
そのものに激しい反對の意を表した太原知府金洪（二九八
頁）と同一人である）——が、六年七月六日、額徵錢糧三
十餘萬兩ないしは三十五萬兩^四に對し、每兩につき、二分の
耗羨だけを提解させて通省不時の需に備えることになつた

という。彼のかねての持論から言つても少提型であつたこ
とは言うまでもない。
以上、各省における耗羨提解についての所見を、理解し
易いように表示しておくなら次のとおりである。

型	省 分	年 次 (雍正)	火耗徵收率 (%)	火耗銀額 (萬)	火耗提解率 (%)
全	山西†	1	20	50.0	——
	河南	2	平均 13	40.0	——
	陝西	3	20	27.0	——
	甘肅	3	15~20	4.0	——
	貴州	3	15~20	2.0	——
	四川†	4	30	(6.9)	——
	山西*	4	13	37.1	——
	江蘇	5	10	41.5	——
提	安徽	6	10	19.8	——
	浙江*	6	5	14.0	——
	直隸*	7	平均13(-)	30.0	——
	四川*	8	25	(16.0)	——
多	山東†	2	18	54.0	13~7
	江西南	5	10	(15.0)	4.5以上
	雲南	6	?	<16.7>	?
	廣東*	6	16.9	(15.0)	7
	福建	7	10+4=14	14.7	8
	奉天	7	10	0.34	5
	山東*	8	16	49.0	?
少	湖廣	1	10	(21.0)	3
	直隸†	2	平均10(+)	23.0	4.8
	浙江†	2	5	14.0	2
	廣東†	4	13~14	(12.0)	4
	廣西	6	?	?	2

(注) ここに示した火耗提解率(%)とは徵
收された火耗銀額に對するものではなく、
もとの錢糧全額に對するものである。す
なわち、全火耗銀額から州縣存留分を扣
除したもの、もとの錢糧全額に對する
パーセンテージである。廣西省のように、
いわゆる火耗提解率だけが史料に見えて
火耗徵收率のわからぬ省分があつたせい
もあり、かたがた、できるだけ原史料の
表現をそのまま引き移そうとした結果に
外ならない。なお、全提型については、
徵收率と提解率とが一致する。ここでは
後者を省略した。火耗銀額のうち(カッ
コ)内のは『會典』『清通考』等にみ
える雍正二年度(四川*)のみは同八年度
の地丁錢糧額によつて算出した數字であ
る。省分欄の†印および*印は、型もし
くは徵收率等に改變の加えられた省分
における改變前(†)と改變後(*)とを示す。

耗羨提解の三つの型のうち、歸公の線に沿うてもつとも本格的であつたのは、いうまでもなく第一の全提型である。

第二の多提型まではまだ好い。第三の少提型ともなると、その點ではすこぶる御座なりなものであり、言つて見るなら、封建諸侯をそのまま縣知事に居直らせたようなものであつた。在來州縣官がしていた火耗の私徴入己、ないしは陋規・節禮の餽送などの實績を、徴収率などに幾分かの規制を加えるだけでほとんど其のままに認め、名だけは新たに「提解歸公」と銘打つただけのものに過ぎない。ともかくこの型は歸公法らしくない歸公法であつた。湖廣省においても後では第一型への切り換えが強く主張され、現に廣東省と浙江・直隸兩省とでは、それぞれ第二型および第一型への切り換えが斷行されるに至つたゆえんでもある。同時に、第三型が湖廣總督楊宗仁によつて、時間的にはもつとも早く行われながら、雍正帝自身は重ねがさね、火耗の提解が山西巡撫諾岷の「創始」になることを言明し、ついで楊宗仁にその功を歸しようと思せず、また雍正五年、蘇州布政使張坦麟の立案した第二型提解法(二二〇頁)に對しても、山西で行うところと互いに異なると殊批し、やや不

機嫌を示した氣持ちも諒解するに難くないであらう。

型は三つもある。率はばらばらである。雍正帝の望んでいた「畫一」という状態には餘りにも遠い。いわゆる専制君主——そのもつ威力の限界をまざまざと見せつけられた感じがしないでもない。にもかかわらず、この錢糧耗羨の提解歸公の斷行は、雍正帝のズバ抜けた政治力ならではの到底なし得なかつた、大きな事業の一つではあつたのである。その事までを、ひとは疑つてはなるまい。

(f) 雍正帝の滿人的善意と加耗の低減・平等化

山西巡撫諾岷が、雍正元年いち早く耗羨の提解歸公を試行し實施したのは、同省の虧空熾々たる窮狀に直面したためであつた(一九四頁)。二年春、彼にならつて忠實な提解歸公を行つた河南巡撫石文焯も、四十萬兩の火耗のうち十五・六萬兩を虧空の穴うめに見こんでいる(一九六頁)。同じとし、第三型の御座なり提解を實施した直隸巡撫李維鈞の狙いとするものの一つも、省内の虧缺銀の未完分を二年以内に完補することであつた(二三三頁)。雍正期の耗羨の提解歸公が、少なくとも直接動機的には、虧空の穴うめという財政的・國家的必要から發足していたこと、

この事は何びとといえども否み得ない所であらう。

私は先に、雍正帝が、官員に對する給與體系の抜本的な改革の積極面として、火耗の提解歸公を行つたと言つておいた（一八七頁）。あたかも帝の、怪物漢人官僚機構に對する挑戰意識が耗羨提解の直接の動機でもあつたかのよう。また私は、耗羨の公項化を達成したことにおいて、雍正帝ははるかに順治帝的であつたとも言つておいた（二二一頁）。あたかも、帝の小民に對する善意こそ、耗羨提解の直接の動機であつたことを匂わせるかのように。

虧空の穴うめ、官僚機構に對する挑戰、および小民に對する善意——これらの三者は、現象形態としてはもちろん、一おう別々のものであつたのである。しかし康熙的な官界の陋習——先ず均平（私項）を徴してから正課を徴し（二六二頁）、税課の缺額を視て分の當然のところとする（一五九頁）、と言つた事が平氣で行われていた、康熙的な陋習に對する反對者にとつては、それらの三者は、はじめから因果的に密接不可離に結ばれたものであつた。穴うめから善意までの間には、何ら箱屋の論理式の迂廻法を必要としなかつたのである。この事については、雍正・乾隆間の人々のあい

だに少なからぬ證言を見いだすことができるが、ここではそれらの代表として河東總督田文鏡のそれを例示しよう。耗羨未歸公前における地方財政の實狀についての立論に外ならない。

臣査するに、耗羨たる、いまだ歸公せざりし時には原と「各州縣」の得るところに係れり。各上司は、その耗羨を得有せるに因つて、餽送・節禮の外において恣意に勒索し、名を藉りて捐を派つ。但だに州縣分文だも己に入るを得ざるのみならず、往々入るところ出するところに敷らず、遂に正項を「虧空」し、倉穀を糶賣し、至らざるところ無きにいたる。地方に一たび公務あるに至れば、仍つて里民に派て、「小民」累を受く、これ耗羨いまだ歸公せざりし情弊なり（六年

七月十一日奏摺）。

「州縣分文不得入己」——これは田文鏡の持論の一つで、他に「州縣が加耗・加派しても、その利は全く州縣の手に入らない」（六年九月八日）というのも同じことである。この點すこしく誇張があるか、少なくとも、特殊例を一般化したすぎた嫌いがあるか、そのどちらかであるを免がれぬが、

それを除けばこの一文は、よく問題の三者關係にすぐれた展望を與えたものだと言ふことができよう。

この鳥瞰圖的な展望を、さらに簡素な公式の形にまとめるなら次のようにも成らうか。

(イ)「國」に碍^{また}げなく、「民」に碍^{また}げなく以つて「歸公」すべきの項あり。

(ロ)上は「正項」を動かさず、下は累を「百姓」に貽^{おこ}さず、以つて可久の計(『公項』)を爲すべし。

官僚機構によい規制を加え、公定された適正な給與體系を官吏たちに甘受させる。そこで始めて國家の正項に障害なく、小民の生計をも壓迫しない。そういつた意味でこそ、例の三者は、密接不可離に三位一體的な關係を結成しておつたのである。

その三位一體的な關係の一角——虧空の問題については、岩見氏の今後の詳しい研究の遂行を期待したい。ここではただ、雍正四五年ごろ虧空の穴うめが一段落をつけた場合にも、いわゆる耗羨の提解は決して一時的な「權宜の計」として廢止されることはなく(二〇五・二二五頁)、かえつて耗羨は地方官民のものだから官民の用に歸すべきだ。虧空

の穴うめがすんで餘裕ができたなら、第一には官員養廉の資を増添すべきであり、第二には民間火耗の數を再減すべきだという論理のもとに、經常的な制度に移行していつたことを指摘するに止めておこう。他の一角、とくに給與體系については、輪郭的なことぐらいなら、すでに前文に述べた。養廉銀の精密な分析ともなると、これまた岩見氏にお願いしたいと思う。ここではもつぱらその最後の一角、すなわち耗羨の提解を通してみられる、雍正帝の小民に對する善意の問題だけを取り上げて、それをもつてこの節の締め括りに當てることにしよう。

この場合における帝の善意は、これを二つの尺度によつて計量することができる。その計量さるべき對象については、それが帝自身の示唆もしくは指導に出たものである場合は問題がない。ただ帝は、意識的に火耗問題に對する表面的な容喙を避けていた關係上、そうした場合は存外すくない。臣僚たちの創意發案にかかるものを帝の善惡の反映とみることは、このさい許されて然るべき假定的な解釋であらう。

さて、(イ) その尺度の第一は、在來の無軌道な火耗の徴

収に對して嚴しい率的な制限を加え、すすんでは、さいらい不文律的に行われていた、一定的もしくは平均的な徴収率を低減しようとしたことである。率的な制限の結果は前表に標出したとおりである。繰りかえすまでもない。徴収率の低減についていうなら、山西省では、正項錢糧一兩につき三錢・四錢にも達する高率の火耗が私徴されていたのを、かの諸岷は加二に、伊都立は加一三に押えてしまつたし、河南省でもまた、従前は加一八・九から加二程度の火耗を徴収する州縣もあつたのを、石文煒・田文鏡らが逐一に確查して平均加一三程度になるまで裁減し、かつ劣員らの私かに重賤を置いて火耗を暗加することなからしめ、萬一そのような事態が発生すれば納戸の控告するのを許している⁸³。陝西省では在來加二三から加四五というひどい火耗であつたものが加二と一定された(二二三頁)。山東省でも従前の火耗は、加二五・加三不等といつた相當の搾り方であつた。これを加一六七から加二程度で抑えようとする動きが雍正初年からあつた模様であるが、けつきよく陳世倌は、恐らくその中をとつて加一八と定めたのである(二一八頁)。直隸省についても同様の現象がみられる。この地

方では、從來とも火耗が他省に較べて軽く、北五府では納糧一兩につきただ七八分から一錢不等のみ。南四府ではやや高いが、それでも一錢から一錢四五分不等であつた⁸⁴。李維鈞はこの實況に對處して、北五府ではそのまま徴収させる。南四府では二三分を量減する⁸⁵。そして全省を平均加一強で抑えたのである(二二三頁)。四川省における加三の火耗も、それ自體としてはひどく高率だが、しかし一切の雜派供給を盡く裁革してからのことであり(二一五頁)、綜合的な意味ではやはり小民負擔の減少を狙いとするものであつた。その四川省や山東省では、耗羨提解の實施後、さらに徴収率の切り下げを行つたことは圖表にも示しておいた通りである。

もちろん、好い事ずくめではなかつた。表高「加一」の耗羨が、衡り屑^{はか}などをも入れると實は加一四五不等にもなつたこと(二二三頁)、この事は、技術的に不可避の點もあるので餘り問うまい。また、廣東・福建兩省の場合のように、初めからその名目的な「加一」等々を標榜せず、實質的な徴収率から各種の數字を割り出していた省分と、雍正九年(十二月六日)、湖北巡撫王士俊がその點をはつきりさ

せるまでの、湖廣省のような省分との間の不統一——それも先ず大目に見ることができよう。

悪い事でない、つまり困つた事とは、例えばこうである。

浙江省では従來火耗の徵收率が著しく低く、小縣でも毎兩一錢になるかならないかであつた（二三四頁）。ところが撫臣¹¹石文焯によつて火耗銀二分の提解が實施されると、有司各官のうちには、ついにそれを好いことにして火耗の増加をはかり、名は八分・一錢でも實は一錢以上になり、甚しきは一錢三四分不等になるものもあつた⁸⁰という。山東省でも、火耗は一おう加一八とその徵收率を抑えられていたにも拘らず、州縣では加二・加二五・加二七八不等を徵し、耗重くして民力支えすであつたと田文鏡は傳えている。雍正六年九月（八日）のことであつた。江南省でも加一の額外に再添して加一五六七八不等になるありさま。乾隆帝のときは、蘇州・松江・常熟・鎮江の四府のような重賦（正項）の地の耗羨が、従前の五分から加一にも倍増したことを特に問題として⁸¹いる。また廣東省でも八年二月（十六日）ごろには、提解耗羨によつて火耗が轉^いいよ加増するを致す傾向があつたといわれる（王士俊奏摺）。

これらはむしろ、親の心を子知らずの部類に屬する。雍正帝の善意にとつては、いわば責任外の事例ばかりである。しかし困つたことには違いない。これらの困つた事例の場合と、帝の善意が筋目正しく實現された場合——そんなことは實際上ほとんど有りえなかつたであろうが、少なくともそれに近い實績が擧げられた場合、との貸借對照表^{ペラレンスシート}がどうなつていたか。

興味あることだが、もとより數字的にはつきり攔めるはずがない。ただ常識的に考えても、雍正帝ともあろうものが、缺損¹²ふくみの資産内容にまつたく氣がつかず、氣がついてもそのまま放置しておくといつた氣遣いはほとんどない。じじつ帝自身は火耗の舊有の數を輕減できるものだと信じていたし、また乾隆帝のごときも、その五年正月乙丑、前代における耗羨提解の實績を概評するというような形でこう言つて⁸²いる。

〔前略〕皇考¹³世宗憲皇帝たる、……あるところの一切の陋規は悉く裁禁を行つて以つて民困を紓^ゆべ、〔また〕直省督撫の請うところを俯允し、舊有の耗羨の一項をもつて額數を酌定、用^もつて各官の薪水および地方辦公

の需に資せしめられたり。名は「提解耗銀」なりといえども、これを従前の「私派私収」に較ぶれば、固よりすでに「數倍を輕減」せり。奉行よりの後、官員には拮据の憂いなく百姓は需索の累を免がれ、吏治・民生、稱して兩便となす。これ實に中外の共に知り共に見るところの者なり（『實錄』一〇九）。

親の事績に對する子の批評だという點、いく分割り引きして考えられる必要がある、また「輕減數倍」も表現としては随分あいまいな表現ではある。さらにいわゆる「徵多報少」の弊があり、記録の上でだけ「減」と出ているような事例も少なかつたとは言えない。しかし、それらを一おう考慮に入れた場合においてさえ、火耗納付者の負擔が、雍正帝の治世をとおして、それ以前とは較べ物にならぬほど輕減されたものであつたことは、たれしも疑い得ないところであろう。乾隆初期の人孫嘉淦はこれを「その〔耗羨の〕已定の數を計して、これを未だ定めざる以前の數に較ぶるに、尙おその少半に及ばず。しかれば是れ迹は加賦に近くして實はこれを減せるなり」と要約している。問題のバランスシートには、決して缺損ではなく、明らかに利益が

計上されておつたのである。

(四) 耗羨問題についての雍正帝の善意を計量すべき尺度の第二は、有力な紳衿・豪強の輩をも、無力な一般小民と火耗徵収の面では一列にとりあつかひ、兩者に對して同一の、その一定され、もしくは低減された徵收率で臨む——つまりここでも言わゆる畫一の政を實現しようとしていたこと、それである。康熙期には、有力者と一般小民との間におけるこの點についての不公平が顯著で、餘風の存するところ、雍正期にも各地にこのような習慣の残つていたことは前述のとおりである（一八二頁）。しかもその雍正期、河南省の事例を傳える田文鏡の場合は——荒木敏一氏によつて指摘された、同じころの彼の「紳衿・里民一例に差に當らしむるの例」の強行とともに——明らかにその不均衡を是正しようとするものであつたし、江蘇省の事例を傳える陳時夏の場合も同じように、紳衿・富戸と百姓とを一例に加一をもつて率としようとするものであつた。そのころ、耗羨提解の型の問題では意見が巡撫（陳時夏）と對立した布政使の張坦麟も、いまの問題については全く相一致していたものとみえ、あるいは「民戸」と「宦戸」とを論ずることな

く、正雜錢糧の耗羨を輸納する時には「俱に」加一をもつて率とさせるとか、あるいは「紳衿」と「民戸」とを分かつた、⁶⁵「一例」に……加一をもつて率として……自封投櫃させるなどといつてゐる。今のところ、他にこれといった類例を見出してはいないけれども、しかしこれらが、雍正期のつよい時代精神を背景とするというか、少なくとも雍正帝——全天下的關心をもつ帝の厳しい意向を眞ともに反映するものであり、その意味では決して數箇の特例でなかつたことは、これまた雍正期の實績を概括しうる立場にあつた、乾隆初期の歸公主義者の一人である錢陳羣が、

〔前略〕これを聞けり、康熙年間の耗羨は州縣〔これを〕私徴し、⁶⁶往往郷愚のみ多く輸して、縉紳・胥吏・豪強にはその自便を聽せりと。しかれば今の「一體に輸納」せしむるは、いたつて公道なり。

と言つてゐるのによつても明らかである。

以上二つの尺度をもつて、雍正帝の耗羨問題に對する態度——提解歸公の軌道に乗せるまでは、苦心慘膽とでも評すべきであつたその態度を振りかへつて見るなら、そこには帝の、小民の生計に對する並々ならぬ善意が感じられる

のではないであらうか。

帝の大きな業績の一つに、いわゆる地丁銀（丁地銀）制の擴大施行といふことがある。もともと別々の税糧として徴収されていた丁銀（人頭税）と地銀（田賦）とを一まとめにし、前者を地畝の大小によつて納付させようとするものであつた。康熙期から一部の省分では行われていたが、これを全直省に及ぼしたのが外ならぬ雍正帝であつたのである。もつともこの場合も、イニシアティブをとつたのは帝ではなくて、かへつて臣僚であつた。帝も初めは「成例を更張」するものとして二の足踏んだものらしい。しかし結局はその推進者となつた。ところでその發意者である直隸巡撫李維鈞は、元年七月十二日、地丁銀制擴大のもつ政治的意義を強調して次のように言つてゐる。

直隸の丁銀は「窮民」を偏累せり。もし田糧内に攤入るれば實に「地なき」貧民のために益あり。臣の現に具題して請いつつある者は、但だ「有力の家」は皆な樂うところ⁶⁷に非ざれば、あるいはその請いを阻遏するものも有らん。況んや部中は止だ成例を知るのみにして變通を肯んぜず。必ず議して准さざらん。仰いで皇

上の乾斷^{かんたん}もて臣が請うところを允^{ゆる}されんことを祈る。

……臣は縣令・州牧たりしの時、確かにその「丁銀の」弊を知れり。曾つて山東・江西・四川に在つて、これ（攤入田糧内）を行ひ皆な善かりき。

ここにも、窮民・貧民の生計のためにしてやろうという、善意の充ちあふれが感じられる。事實、そのご間もなく行われた九卿中の數名——維鈞のいわゆる「有力の家」を代辯したのであらう彼らの反對密奏のうちにも、まずもつて、「地を按じて丁を輸せしむるは、原より窮民を優恤せんとするの善意^{せんに}に屬^{ぞく}す」の一辭を費さざるを得なかつたゆえんに外ならない。

私としては、雍正帝の他の業績の一つであり、やはり阻遏者の多いところを帝の「獨斷」もて實施の運びに立ちいたつたといわれる（二〇八頁）耗羨の提解歸公のうちにも、當時の人々が、この丁銀の田糧内攤入において感じたと同ような善意をこそ汲みとるべきだと思つたのである。

文化の著しく進んだ時代、民度の著しく高まつた場所では、皇帝制のごときはほとんど無用の長物である。歴史の進行・事態の改革に對して邪魔や妨碍にこそなれ、刺戟や

原動力になる氣遣いはない。少なくとも積極的な存在理由はもち得ないであらう。しかし、そうではない時や所では必ずしもそうは行かない。皇帝制がそれ自身、道義的にみて善と評價さるべきものであるか、惡と評價さるべきものであるかを私は知らない。もし前者であつたとするなら、それはしばしば惡に對する防壁として、たとえ後者としたところで、それが時として、より以上の惡に對する堡障としての積極的な存在理由をもち、それ相應に歴史の進行・事態の改革に對して刺戟や原動力になることも有りえたこと——その一つの優れた例證をわれわれは、雍正帝の小民に對する善意のうちに認めることができなかつたであらうか。

四 歸公派と歸官派との抗爭

(a) 乾隆初期における耗羨の歸民・歸官・

歸公論

耗羨提解の主要な目的の一つであつた養廉銀の給與制が、たとえばかの地丁銀制と同じように、雍正期を機として案出され、もしくは擴充されながら、ついに清朝一代を通じての制度になり終つたものであつたことは人のよく知ると

ころである。

養廉銀制の親制度としての耗羨の提解歸公制は、では、雍正期からその次代・後代にかけて、何らの波瀾もなく繼承持續されていつたものであろうか。

決してそうではなかつた。後代へのことは、このさい論外にしよう。次代、すなわち乾隆時代への推移が決して平穩無事では有りえなかつたのである。細まかしい原因は多し多しを指摘することができよう。しかし所詮は、雍正帝の小民に對する善意が、漢人官僚たちの銀に對する熾烈な欲望と兩立することができない。その間のけわしい矛盾も、さすがに雍正帝の在世中には——何ぶんにも、當時の社會で最も惡すれていたはずの胥吏連さえシユンとしてしまひ、誇張もあろうが「風清弊絕」にちかひとまで言われた御時勢のこと、帝の強烈な政治力に押えられて表面化しないままで潜在する。たとえ表面化する場合にも、提解歸公に伴なう缺陷を、當りさわりなく摘撥する程度にすぎない。たとえば江南省に關して某人が、往日の多寡を論じないで加一と量定したことの不合理を衝き、⁽²⁾ また浙江總督李衛が雍正六年冬(十一月二十二日)、これは必ずしも「火耗」に

ついてではないけれども、各省の督撫たちが競つて陋規の「歸公」を行う風潮に對して、その虚偽性を發きたてて居るようなのがそれである。しかも一旦、雍正帝の死によつて、在來の政治力の重壓が除かれると、あたかも胥吏連がまたはびこり出したのと軌を一つにして、潜在して内にわだかまつていた矛盾がセキを切つたように表面化してくる。こういうのが、その大筋の原因だつたのであろう。⁽³⁾

乾隆帝の即位を機會に、耗羨歸公の法に對する反對論、ないしは批判論が俄かに湧きおこつてくる。この事については帝自身が、「朕の御極以來、すこぶるその〔耗羨歸公の〕便ならざるを言うものあり⁽⁴⁾」とか、「近ごろ臣工の意を觀るに、すこぶる現在おこなうところの例をもつて便ならずと爲すものあり⁽⁵⁾」という形で、繰りかえし明言するところである。

私には、その「便ならざるを言う者」、つまり反對論者・批判論者がだれとだれとであり、その論據はどんなものであつたかを、一々根本文獻について検討してみるだけの餘裕がなかつた。けつきよく反對論・批判論が壓倒されたせいか、反對論の反對論、つまり歸公主義者側の文獻が、手

近かなところ『經世文編』などに収録されているにも拘らず、反對論者側のそれは、それほど手近かには見當らなかつたからである。ただ、歸公主義者側の記録を反證にとつて考えると、反對論者側の論據とする所がどんなものであつたか、大體の見當ぐらひは付かぬこともない。

耗羨歸公に對する反對論者は二類に大別することができ、歸民派と歸官派とである。そのうち歸民派とは、言つてみるなら、雍正二年七月當時における雍正帝の願ひ——各省の火耗がだんだん輕くなつていき、けつきよく全部廢止されるようになるのが「朕の願ひ」だ（二〇五頁）といつた、その言葉尻を逆手にとつたような説をなすもので、耗羨は當然「民」に返還せねばならぬと主張するものに外ならない。歸公派の一人である錢陳羣はこの一派を、民の爲めに偏^{かた}よるもの、つまり歸民派の人々は耗羨は裁^やめてしまふと曰^いつているが、これは「迂儒の見」だ⁽⁶⁾と輕く片づけ、他の一人である御史趙青藜はこの一派に、歸民の説をなすものは義においては甚だ正しく、利においては甚だ薄^{おと}きい。しかし時においては未だ暇あらざるところがあり、勢いにおいては行^いひ難^{がた}いところがある云云、といつて、バカ

丁寧な反駁を加えている。後者も要するに、「迂儒の見」だの演義語にすぎない。

歸民派の反對論は、その論據が非現實的であつただけに、それほど有力であつたと思へない。根深い勢力をもつていたのは、何といつても歸官派の方であつた。趙青藜はこの派の主張をこう要約している。すなわち、「公をもつて公を濟^すう」、つまり耗羨を歸公するとなると、上の人に對してそれだけ一布置^{てま}を多くする。「私をもつて私に還^{かへ}えし」、「州縣の」官吏に自分でこれが通融をさせたらどうであらうと。乾隆帝もこの派の人々の心理にメスを加えて、彼らは「耗羨」をすつかり（州縣の）本官に與え、「司權^{みつきと}」は悉く内より遣^はわしたいと意圖し、そうしてこそ多く養廉を得て、食用を豊裕にすることができると考えているのだと斷定している。さらに注意すべきは、錢陳羣がこの派の主張を規定して、その官に偏^{かた}よるものは、宜しく「康熙年間」に照らしてその（耗羨の）自取^{みづか}を聽^きすべきだと謂^いつていっているという事である。果たせるかな、いわゆる歸官派とは、「雍正」的なものを否定して「康熙」的なものに還^{かへ}らうとする、一つの政治的な動きを代表するものであつたのである。そう

いえば、司権は悉く内より遣わす——關稅の取り立てのため、中央官や内官からいわゆる關差を派遣する。これも明らかに、雍正帝が關稅事務を多く地方の「督撫」に委任したことに對する反動として、康熙の昔に還ろうとするものであつた。そしてこれが、漢人官僚團にとつての主流派的な動きであつたこと、それは、耗羨歸公の發足當時の實狀を振りかえつただけでも思い半ばに過ぎるものがあるであらう。

歸官派の歸公反對論には、人により時によつて、雑多な論證が據り用いられたようである。加賦、つまり附加税だからいけない。⁽⁹⁾ そうした單純な論據もないではなかつたらしい。この項（耗羨）を除かなければ、久しい後にはきつと正税だと視なすようになり、耗羨の外に又た別に耗羨を生ずるだらう。⁽¹⁰⁾ 沈近思以來の論法も相變らず勢いをもつていた。さらに康熙年間には「耗羨」がなかつたので「清官」があつた。雍正期についてはその逆が眞として當てはまるという説——實狀を知るものにとつては噎飯ものだが、この説など、當時としては最もひろく主張されていたらしいことは、趙青藜・錢陳羣および孫嘉淦（最右翼で歸官派にち

かい）ら、歸公派がいずれもその反對辯證に努めていることから明瞭である。

しかしそれら、およびそれら以外に有つたかも知れない、凡ての論據にも増して根本的な論據は、つまるところ、養廉・公費の給與だけでは手許が不如意だ、窮屈すぎるということであつたのである。

この事はしかも、實は彼ら反對論者ばかりが感じていたことでもなかつた。耗羨の歸公以後——ある意味では雍正帝の「諾岷的政策の行きすぎとも言えるかも知れぬが、いわゆる公費の面においても、はたまた養廉の面においても、相當窮屈化していたことは事實であり、したがつて、反對論者とかその又た反對論者とか言つたところで、兩者の間には、一おう共通の話しあひの廣場もないではなかつたわけである。

官僚たちの手許不如意の状態については、たとえば望溪先生「方苞のごときが、乾隆初期に書いた「積習を矯除して人材を興起せんことを請うの劄子」⁽¹¹⁾のうちで次のような議論を展開している。

〔前略〕耗羨歸公してより以後、州縣の繁劇なるものは、

養廉 千數百金に至れるも、猶お以つて幕客を延いて公事を辦するに足らず。在内の諸司は加俸一倍なるを蒙ると雖も、猶お以つて屋を僦り僕を賃い馬に秣し車を供するに足らず。伏して願わくは天下の耗羨および經賦（常賦）の餘るところを通計して詳しく籌畫を加え、必ず州縣をしてその公事に備うるを得、諸司をしてその身家を贍わすを得しめられんことを。然る後一たび贓私を犯さば、法を嚴しうて貸さざらん。

乾隆帝もある上諭のうちで、「耗羨」の用に敷る處は二三省にすぎず、足りない省分では相變らず「正供」を撥してこれを補つていたことを指摘している。^(四)（前説の浙江省方式（二二五頁）が普遍化していたものとみえる）。これは帝の他の上諭に、地方一切の公務には今は「公項（火耗）」を動用しているが、公項が足らないので、「正格」を動支されんことを請うものが幾らあるか判らない、^(四)というものに相應じるものであつて、公費面における窮屈さを立證するものに外ならない。養廉面の窮屈さについても、やはり乾隆帝が、

いまだ養廉を定めざりし以前には、外官には尙お餘贏

ありて以つて意外の費に供したり、すでに養廉を定めし以後は、さらに「餘貲」の以つて（司道の書吏らの）苛索に應ずるなし。これを百姓に取らずんば、はた誰れにか取らんや。⁽¹⁴⁾

と言つてゐる。また歸公派の論客趙青藜が、辦公の費、つまり「公費」が足りずに正格を動支するようになることは損益の義で判斷するとか、官吏の「養廉」ともなると、始定の諸臣が矜愼にすぎたせいで本當に敷らない、とか言つてその對策を考えてゐるのも同じことである。

乾隆帝はその六年二月乙巳の上諭のうちで、康熙時代には官紀がひどく亂れ、火耗や關稅も官員私欲の對象となつてメチャクチャに食い荒らされていたが、父雍正帝の時代にいたつて世風がガラリと一變したことを述べ、さてその上で、滿漢の官員たちにとつて用度が充餘（あちあま）ということとは能きなかつた。しかし甚く貧しいとか甚く富んでいるという別はなくなり、かつ後日の身家の患いを貽さなくなつたと傳えている（『實錄』一三六）。然も甚貧・甚富の別なし。あらゆる部面において「畫一の政」の實現を堅く期してゐた雍正帝にとつては、正しくこれこそが耗羨歸公、

とくに養廉銀制定の一つの狙いであつたのであり、その意味では、かなりの程度まで帝の企畫は成功したのだと見る事ができよう。ただ乾隆帝は同じ上諭の冒頭で、近ごろ見ていると、居官者の家計が多くは艱難を覚え、しかも旗員の場合が甚しいといつて、官僚間における貧困の一般化を認めている。用度・充餘なる能わすの状態が、何らかの事情によつてより一層惡化せしめられた結果なのであらう。その事情が果たして、帝自身の推定していたような、虧空の連帶辦濟だけであつたかどうかは疑問である。正しくは、そのほか物價の動き——乾隆十三年のある文獻に、康熙年間には稻穀が登場する時には、每石二三錢に過ぎなかつた。雍正年間には四五錢が必要で、もはや二三錢の價はなかつた。今は五六錢が必要で、もはや三四錢の價はない^(四)という、この概括に象徴されているような物價の動き、さらには官紀の在り方(餽送關係)、生活態度の傾向などから、総合的に歸納判斷されねばならぬが、ともかくも、乾隆初期にいたつて、官僚一般の生計が苦しくなつてきていた事は、否むべからざる事實であつたのである。

こうして歸公派と歸官との間には、その官僚たちの手許

不如意の状態に對する共同認識という、一おう共通の話し合ひの廣場もなければなかつたのである。しかし實際上、彼らの間には話しあいがつく事はなかつた。一方は「耗羨には已^ヤむべからざる所あり。歸公の法には變うべからざる所あり。但だその流弊を思つて、預じめこれが防をなす當^ベし」——一おう雍正的政策を肯定した上、その弊害だけを除去する立場をとつたのに對し、他方は全面的にそれを否定して、康熙的政策に還らうとするものであつたからである。

歸公派は讀んで字のごとく主「公」派であつた。これに對して歸官派は主「私」派であつた。兩者が兩々相容れざるものとして相爭わねばならなかつたのは、むしろ當然のことであらう。

(b) 歸公派の勝利と耗羨提解法の存續

耗羨問題をめぐつて三派、とくに歸公・歸官の二派が相爭うようになつたのは、乾隆帝の口振りから察すると、おそらく帝の即位以來の現象であつたのであらう。とくに帝が、即位後もない雍正十三年十一月癸亥、耗羨の「溢收」を嚴禁するという形で問題を提起したことが『實錄』七、

これまでは潜在してくすぶつていた抗争を發火點に導いたものと思われる。しかし、結果的にみて、その傾向——その小火に油を注ぐような事になつたものは、乾隆五年正月乙丑、各省の司庫に存貯された公項の實態を知ろうとして、帝がその詳細な報告書の呈出を指令したことはなかつたかと思う。

當時の上諭（『實錄』一〇九）によると、雍正帝の治世の最末期、つまりその死去の前二カ月の十三年六月にも、かつて公項が必ずしも盡くは實用に歸してはいないのを憂えて、清查させようとしたことが有つたという。じじつ『世宗實錄（一五七）』は同月乙亥の條に、その事についての戸部に對する詳しい上諭を録載している。雍正帝にとつては、その生前における最重要施策の一つに對する、總決算的な意味をもつ上諭に外ならない。多少横道にそれる嫌いはあるけれども、ここでその大要を紹介しておくことも冗ではあるまい。上諭はまず、

各省の從前 公を辦するや、項の動かすべきなし。上下ともに相いに捐應し、官民ならびにその累を受く。即し各官薪米の需のごときは、皆な該地方の耗羨より

取給せるも、しかも地方は大小一つにあらず、多寡また均平ならず、往往その守る所を固くする能わざりき。これ人々その弊を洞悉せるものなり。

とて歸公以前の實情を説く。次いではいつものように、諾岷の請いによつて提解耗羨の法が始まり、のち各省の督撫が次第に效法したことを言い、さらに、この法を行つてから吏治が稍しく澄清なるを得、閭閻は咸な擾累を免れ、この中の利益は内外の共に知り共に見るところだ、と自信にみちた斷言である。一轉してその欠陥に言及する。

乃るに數年以來、朕の留心體察するに、外省布政使中についに庸劣無識の人あり。この項の銀兩をば視て重輕するに足るなきの物となして、その民脂・民膏たるを念わす。あるいは那補借支し、あるいは任意に費用す。前任は含糊に交代し、後任は深求に便ならず。ついに國計・民生に關わりあるの項をもつて、漸やく紙上の空談と成して、督撫もまた查察せず。かくの似くなれば日久しくして愈々清楚にし難からん。

雍正帝にしてみれば、だんだん制度の「不妥い處」が現われてくる。そして將來、人に口實を貽すようでは、どう考

えても、最初耗羨の提解を准した本意ではなかつたのである、

そこで上諭の結論部である。原文はかなり長いが、孫嘉淦によつて要約すると、けつきよく年を按じて冊を造り、正項錢糧に隨同して部に送つて核銷させようというのであつて、明らかに、雍正二年における、沈近思に對する面諭（二〇三頁）、ないしは契約の破棄を意味するものであつたのである。その後まもなく雍正帝は崩じて乾隆帝が立つ。新帝は考えた。耗羨は正項とは同じでないし、従前は原より章程があつたわけでもない。且つは年を歷ることもすでに久しい。各省の規條は一つでなく、官員の更換したものも多い。ましてや恩詔がしばしば頒かたれ、たとえ拖欠があつたところで、當然寛免の例にあるべきだと。そこで、その時は諭して、清查を暫らく停止させることにしたのであつた。ところがそのご様子を見てみると、どうも思わしくない。冒濫の兆しが見える。清理するなら今のうちだといふので、その五年正月、帝は戸部に命じて各省の督撫に行文させ、地方必需の公費について款項を分晰にして章程を立定し、部に報じて覈明の上、彙奏して存案させる。そ

れ以後は務めて、一年内の額徴の公費について、完・欠・雜支と餘剩・未給との各數目を逐一に款に歸する。各官の養廉には、正署・起止の月日、應得の分數、ならびに扣除の空缺というふうに詳悉に登記する。その収數・支數についても内譯をはつきりさせ、清冊を造つて戸部に咨送して核銷させる、という事にしたのである。微細な點まで雍正十三年法の引き寫しにすぎぬが、それにしても、ほとんど正項のそれにも匹敵する、嚴格な査核制度の實施に外ならない。

こうして各省の耗羨は戸部の湖廣司の掌るところとなり、これを取るに定數あり、これを用うるに定款ありの嚴重さとなつた。沈近思（雍正五年死）でなくとも、歸官派である限りは、いきり立つのが當然である。じらい甲論乙駁の状態がつづいたらしいが、しかしそれが極點に達したのは、何といつても乾隆六・七年のことであつた。七年四月乙巳（十六日）の上諭（『實錄』一六五）をみると、そのころ乾隆帝が、この問題の處理に關してどのように苦慮し、どのように心肝を碎いていたかがよく窺われる。こんなことが言われている。各省の辦理耗羨の一事については、朕は、民に

不便なところもあろうかと恐れた。そこで今年〔四月一日庚寅朔〕の廷對の時には、策問のうちにもこの問題を入れてみた。ところが諸生の奏對には敷衍するところがない。あつたとしても、成文を敷衍するにすぎず、全く實事に當るものはない。^(四)甚しきに至つては、耗羨とは何事なるかを知らぬものさえあつたと。こんなことも言われている。また〔四月六日乙未〕旨を降して九卿・翰林・科道ならびに外省の督撫たちに詢問し、衆論を合して一是を求めようともしてみた。ところが近ごろ諸臣の奏對をみると、ついに耗羨の一事の外において旁牽側引し、狂瞽の見をもつて無稽の言をなし、答えるところが丸で問うところでは無いようなのである。たとえ耗羨のことは論じていても、ついにその原委^{ほんまい}を知らず、どうにも施行することができない。潘乙震が開捐を請い、路斯道が鑄幣を請うがごときに至つては、もつとも荒謬の極だと。乾隆帝自身は、たとえば六年二月乙巳の上諭のうちでも、火耗等の問題に關して、

朕は仰いで皇考の貽謀遠略を承け、一切の章程 惟だ守つて失わざるあり。問々あるいは法久しくして弊生ぜんも、隨時に酌量調劑すれば可なり。もし輕々しく

更張を議せんと欲すれば、ひとり勢い不可なるのみならず、亦た朕の薄徳、力 能わざるところ有り。これをもつて内外大小の臣工ならびに八旗に曉諭してこれを知らしむ可し(『實錄』一三六)。

と宣言していた。全くいわゆる歸公派臣僚の考え方と同じであつた(二四五頁以下)が——といつてももちろん、帝の方がカニで、臣僚の方がカニの穴掘りであつたに違いないけれども——臣僚一般の動向は、なかなか帝の思うようにならぬと言うのが實狀だつたのであろう。

兩派の抗爭はしかし、結局は歸公派の勝利に終つた。歸公派は乾隆帝をバックにもつものであり、その意味では權威派でもあつた。論争は結局、權威派の順當な勝利に終つたともいふべき所であらうが、ともかく、七年四月乙未の上諭を機として行われた年内兩度の内外臣僚たちの奏對は、壓倒的に歸公派に有利であつたようである。現在『經世文編』(卷二十七、戶政二、理財下)に収められている孫嘉淦の「耗羨を辦理するの疏」と、錢陳羣の「耗羨を條陳するの疏」とは、日付けに一日の違いこそあれ(前者六日、後者七日)、いずれもその四月六日の上諭に對する歸公派としての奏疏

に外ならない。(もつとも同じ歸公派とはいへ、孫嘉淦のときは、前注のように、よほど歸官派にちかい、もともと沈近思的な、強いられたる歸公派であつたらしいけれども)。同じく歸公派の一人である彭端淑の「耗羨私議」も、作としてはやはりその頃のものであらう。このように歸公派の言い分だけが今日までよく保存されていること、その事自體が、論争におけるその派の勝利を物語るものではあるが、じじつ乾隆帝は、再度の奏對に對する同年十一月乙丑の上諭のうちで次のように表明している。

今、諸臣の回奏を據けたるに、大抵みな以爲えらく、章程ひとたび定まり、官民久しく已に相安なり、復た替易を議す宜からずと。衆論 僉同じ。その中に偶偶一二事を條陳せるものもあるも、旁枝末節にすぎずして耗羨歸公の本務に關わるなきなり。朕 再四思維するに、耗羨 下に在れば、州縣は入るところ既に豊かにして以つて任意に揮霍すべし。上司は養廉 出するなくして以つて餽遺を收納すべし。公を假りて以つて私を濟し、上行つて下倣うに至るや、又た言うを待たず。……この事、當に「衆議」に従い、仍つて「舊章

に由る」べし。特に諡旨を頒かち、中外臣民をしてこれを知らしむ(『實錄』一七八)。

御史趙青藜の「耗羨は仍つて公に歸せんことを請うの疏」には、乾隆十一年の日付けが與えられている。この數字に誤りなしとするなら、論争の餘震は十年代にも及んだものと考えねばならない。しかし、少なくとも本格的な震動状態に關するかぎり、この七年十一月の上諭をもつて、一おう終止符を打たれたものと見て誤りないであらう。

歸公派論客の論調、わけでも歸官派に對する論駁はなかなか面白いものである。ただ私の今の論旨には、それほど深い關係があるとも思えない。詳しくは直接『經世文編』について讀まれることを希望し、ここでは、彭端淑の歸公主義の主張ぶりと、孫嘉淦の、耗羨歸公制それ自身のもつ本質的な矛盾の指摘とその對策とを擧げて、歸公派全體の考え方を代表させておくことにしよう。

彭端淑はいふ。耗羨の名は何時から起つたかを知らない。わが朝が定鼎すると、これを官に歸したが、民はその弊に勝えなかつた。世宗以來はじめて公に歸して養廉を加えたこれは萬世不易の法である。今あるいは議して昔のごとく

官に歸せんという。私は大いに可よしくないと思う。……今日の耗羨を議するゆえんのは、民が貧だからに過ぎない。民が貧しいからといって耗羨を官に歸するのは、譬えば、薪を抱いて火を救おうとするようなものである。……民は必ずしも富まないで、その害はますます甚しいであろう。……あるいは宜しく民に存すべきだという。私は又た可よしくないと思う。……その耗羨となるものは、大約多くて數錢、少ないものは數分にすぎない。しかるに銖銖と積んで、ついに百餘萬を累ねるのである。これを民に存したところで、民には濟たしにならない。……耗羨を加えたところで民は必しもこれによつて貧しくならないのに、耗羨を去ると、國用はあるいはこれによつて減じるのである。だから耗羨を公に歸するのは、これ萬世不易の法だと。そして彼は耗羨を公に歸するに及んでも、現實的には、民の必ずしも貧しからざるにあらざる事を承認する。ただ彼はその原因を、耗羨問題以外に求めようとするのである。

孫家淦が乾隆四年において指摘した矛盾とはこうである。「國家」の善政をひけらかすためには、時に正供の蠲免も必

要である。しかし、「地方」官吏の生命の綱である耗羨までを同時に免除することはできない。雍正七年六月乙酉の定例に、その「水旱」によつて蠲免するものは、その耗羨をも「正項と」一併に蠲免するが、およそ「特恩」もて蠲免するの項では、その耗羨はやはり徴収して、各官の養廉・「公費」にする（『實錄』八二）とあるものであつて、嘉淦みずからの言葉で表現するなら、

耗羨は正供と別あり。正供を徴収するや、耗羨は尙お革除せんことを思う。今は正供を免じて耗羨を免ぜざれば、是れ耗羨かえつて正供よりも重く、政體において未だ協わざるものあり。²⁴⁾

というわけであつたのである。彼としては——當然、雍正十三年十一月、乾隆帝が貴州の耗羨を免じた例を楯にとつたのであらう、正供と一概に耗羨をも豁免し、やむを得ない養廉・公事の需だけは他から適宜に撥補するように希望し、また結果もその希望のとおりになつたのであつたが、²⁴⁾ともかくこれなども、缺陷は缺陷として是正しながら、雍正時代の舊章を守り抜こうとする、當時の歸公派の一面を物語るエピソードだといふことができよう。

(c) 耗羨の正項化と清末の漢人的康熙の復活

歸公派と歸官派との論争——それがけつきよく、歸公派の勝利に終つたことは前述のとおりである。雍正は康熙を壓倒した。マンシェウ的なものが漢人的なものを屈服させた。短期的にみるかぎり、これらの事實に間ちがいはない。ただ、長期的にもその通りであつたかというに、必ずしもそうとは言えない。

長い眼でみて、雍正的者と康熙的者と、それらが攻守とを變えるの端緒は、實に耗羨の正項化の問題にあつた。雍正十三年もしくは乾隆五年において、雍正帝の沈近思に對する契約が破棄され、耗羨の正項化の第一歩が大きく踏み出されていたことは、これまた前説のところに屬する。これよりして、定例日ごとに密なるを加え、動支あるごとに、多寡を問うことなく必ず先ず部に報じ、准^{やう}されなければ敢えて擅動はしない、とはかの孫嘉淦の言葉である。彼はつづけていう。正項と同じく冊を造つて報銷し、例に合わなければ、駁して追賠せしめられる。一たい督撫が地方の公事を辦ずる際には、後でこそ例とすべきではないけれども、一時はそうしない譯にはいかず、部に報じたところ

で開銷を准されはしないけれども、事情はどうしても已むを得ないようなことがある。(一種、機密費とでも言うべきものであらう(安部)。耗羨銀兩のお蔭でそれらも通融接濟ができ、官は賠しないで、その累は民に及ばなかつた。

今、地丁錢糧に隨同して報銷するとなると、「正供とはや差別することができない」。凡そ地方公事の止むを得ないことで、又た准銷されそうもないものは、必ず賠^{たてかえ}墊しないければならない。上司が賠^{たてか}えると、屬員から償いを取ろうとして餽送の路が開かれる。屬員が賠えると、百姓から償いを取ろうとして、賦を重くして徵收し、因公科歛の端がおこる。そうなると、「耗羨が正項になり、耗の外に耗が加わる」という弊害は、どんなに峻防したところで、その流れには止めることのできないものがあると。耗羨正項化の成りゆく先を、まことによく、筋目立てて説明したものと云うことができよう。

このさいの孫嘉淦自身は、「年終奏聞の舊例」すなわち雍正二年以來の舊例(二〇三頁)を復活して、造冊報銷の新例に換えようとするものであつた。沈近思的だと言わざるを得ないゆえんである。もつとも、彼のこの希望はかなえ

られたとも見えない。例えば乾隆二十四年三月(辛巳)のあの上諭(『實錄』五八二)には、山東巡撫の奏疏中に「捐墊」という字様があつたのを捕えて、これは、外省では古くからやり續けてきた惡習だ。およそ地方で動用したからには既に「公項」なのである。當然「核實報銷」せねばならないと言つてゐる。乾隆五年の新例が、そのまま勵行されてきたものであることは疑いない。舊例の復活のときは、當然あり得なかつたと見るべきであらう。

新例の勵行によつて耗羨の歸公制は——確實な意味で「またもや」と言うべきか、「初めて」というべきかは疑問だけれども、ともかく、奏摺の世界から題本の世界(二〇六頁)に移籍せしめられることになつた。それは今や、ほとんど公々然たる國家の一制度となつてきたのである。たださすがに、「耗羨は正項錢糧と同じでない」——この根本的な考え方は、その後も急には消え去つてはいかない。たとえば乾隆五十年の日付けをもつ一上諭にも、依然としてこの考え方が繰りかえされており、そのことは、ほどなく引證する所について見られるであらう通りである。二十九年(一七六四)に勅撰された『會典』および『會典則例』

のうちに、まだ養廉・公費等に關する法規や事例を見出すことができないのも、やはりそうした考え方が支配的であつたことの反證なのであらう。『會典』および『會典事例』のうちに、それら耗羨關係の項目が姿を現わすようになるのは、よく知られてゐるように、嘉慶二十三年(一八一八)の勅撰にかかるそれらを以つて始めとする。「凡そ賦を徴して、耗羨あれば公に提す。耗羨には皆な常あり。浮は毫忽を以つてするも則ちこれを罪す」とはその『會典』正文の規定である。

しかもその乾隆・嘉慶の間にあつて、耗羨正項化の一そのの推進に重要な一役を演じたと思われるものは、乾隆五十年における、耗羨の處理に對する「國家」的な干涉統制の強化である。そのころ臣僚のうちに、各省の耗羨は務めて正項錢糧に隨同、一同に州縣から司庫に報解せしむべきだと論じて、奏摺を上るものがあつた。かつて四十七・八年間、山東布政使陸燿も同様のことを條奏したことがあつたという。帝はこれを戸部に下して議覆せしめる。戸部はかつて陸燿の場合に「准行」を議覆しており、今度は「すでに議に依つて行えり」と覆奏した。このことに關して帝

は同年八月壬午、次のような上諭を内閣に下している。

朕惟うに、各省の耗羨は、正項とは同じからずと雖も、然も斷じて、正項錢糧は全完して獨り耗羨を欠するの理なし。總じては、正項錢糧に隨つて一體に司庫に申解せざるに由り、州縣ついに已に徴せるをもつて民欠と作爲し、從中那移して、もつて取携自便なるべきを希圖すればなり。……おのすから應に藩司に著落して、各州縣に催令して隨同に報解せしむべし。もし官吏の侵那あらば、惟だその藩司をこれ問わん。『實錄』

一二三六

同時に、それまでは放置されていたらしい、私のいわゆる少提型および多提型の提解歸公に對しても、斷然たる措置がとられることになった。言葉はすぐ續く。

再た各省の州縣官には、耗羨内において、みずから養廉を動支抵算するを行うものあり。耗羨歸公は原より各官の養廉の爲めにす。但だ官員みずから収めて自から支うれば、そのうち、恐らくは影射冒混の情弊あらん。この後は應に一併に禁止し、儘數司に解らしめて、のち再び司庫より動支給發を行つてもつて弊

混を杜ぎ、並びに該督撫をして、年終において明晰に部に報じて查覈（を受け）しむべし。

總じてこの五十年方式は、雍正六年十一月、時の湖南布政使・趙城の主張した全提法（二九〇頁）と全く同じことである。全提型での一本化が、耗羨に對する「國家」統制の強化を意味するものであつたことは、改めて説くまでもない所であらう。耗羨はついに、雍正帝が時として考えたような、本當の意味での「公項（二〇九頁）」——私項に對する眞の公項になつてしまつたのである。

耗羨の全提一本化、ないしはその正項化・眞の公項化に伴なつて、耗の外に耗を生ずるの弊は必至であつた。避くべくもない。そしてその新耗は、たちまち、ヤミの子として「餽送」「陋規」の資に轉化された。もちろん一口に餽送・陋規とはいへ、孫嘉淦が理論的にその筋みちを追跡したような、いわば初生的なものばかりだつたとは限らない。雍正帝の揮つた灼熱の電氣メスの冴えにもかかわらず、官界の内面奥ふかくには、どうしてもそのメスの届かない餽送・陋規のガン腫がのこつていた。このガン腫の痕跡が、耗羨正項化の進行という好條件にめぐまれてグングン繁殖

する。そういう意味での、いわば再發的なものの方が、むしろ遙かに多かつたのではないかと思う。そしてその財源を工面するためには、加耗のほか、國初以來それと並んで行政窓口業務における三惡を形成していた私派・勒詐の風（二二五頁）も、再び盛んになつて一般化したものと見なければならぬ。

ともあれ、乾隆末から嘉慶・道光およびそれ以後、要するに清朝も末期になると、錢糧の虧空はまた疊々たる有様、餽送・陋規は公然と行われるといつた風で、なんとも名狀したい情形であつたことは、『經世文編』の各種續編にみえる財政關係の諸記事を一べつただけでも想像がつくばかりではなく、とくに官界の腐敗ぶりについては、『官場現形記』に鋭い分析を加えた橋樸氏の名篇「支那官僚の特殊性」があつて、從來とも人のよく知るところであつたのである。

要するに清末になると、康熙的なヤミ給與の體系が、まともや漢人官僚機構の二大支柱の一つとして復活されたのである。たとえ正俸との比重の點では——すでに本俸以上に高額な、雍正的な養廉銀が正項に繰りいれられてしまつ

た後のことである。ヤミ給與とはいえ、とうてい往時のそれには及ばず、その意味ではあるいは縮小された規模においてに過ぎなかつたかも知れぬが、ともかく康熙的なものが再生産されたのである。「三年清知府。三代雪花銀」——いくら清廉な知府でも三年勤めあげると、子孫三代が樂に食つていけるだけの銀がたまる。俗諺でそのように皮肉られた、その反面、官僚や吏僚にとつては笑つても笑つても笑いの止まらぬような御時勢が再開され、そしてあらゆる企業のうちでも、官吏稼業がズぬけて利潤率が高く、したがつて近代的な資本主義の萌芽など、もし有つたとしたところで、とうてい健全には育ちつこない土薄き世界が再現されたのであつた。康熙は窮局において、雍正に打ち勝つたのである。打ち勝たれたものは常に惡しざまに評價されねばならない。打ち勝たれたものの、それが宿命なのである。われわれはその一例を、宋の王安石の新法において見、また他の一例を、道光（一八二一〜五〇）期の人・湯成烈のいわゆる、

雍正の間、丁を地に伴わすや、民は按糧攤丁に「苦しんで困を加う。」火耗の公に歸するや、官は正耗並解

に苦しみ、平餘（二四頁参照）を加えて「民は困しみを重さぬ」。乾（隆）・嘉（慶）の際には、司の平餘ますます重し。

における、雍正的なものにおいて見ることが出来る。その實、眞に批難され、惡しざまに評價さるべきものは、かえつてあの、再生産された、ないしは再生産されつつあつた康熙的なものにしか過ぎなかつたのである。

そしてこの再生産された康熙的なものの情性——これが、國共政府をけつきよく破滅に導びいたものであつたこと、またこれこそが、中國共產黨の、それに對する果敢な闘争をつづけながら、みずからの國造りの歩を進めねばならなかつた當の相手であつたこと、これらはともに、われわれの餘りにも身近かに見聞きした事でもある。詳しい解説を必要としないところだと思ふ。問題のガン腫の再生・繁殖を全力をあげて豫防防止しないかぎり、中華人民共和國といえども、その前途は決して安泰ではあり得ないだらうという一事を除けば。

* * *

私はかつて、「清朝と華夷思想」⁽²⁾と題する小論のうちで、

思想的な立場から清朝史の動きを概観したことがある。要するに、清初の順治・康熙の時代には、辮髮・胡服の強制令に象徵される順治初期の強烈なマンシュウ主義をのぞけば、一體に中華主義的な色彩がつよい。雍正時代にいたつて急激にマンシュウモンゴル主義の傾向がつよまり、それは乾隆時代にひきつがれる。しかしそれ以後にはまた、前二期（順康熙と雍乾期）のイズムの止揚形態としての中華主義の復活がみられる、というのであつた。

私がいま、錢糧の附加税としての耗羨の問題という、財政史ないしは政治經濟史の面から考察した結果も、期せずしてそれと全く同じことであつた。見方・考え方に誤りがないかぎり、同じになるのが當然である。違つてきたら困るわけだが、それにしても、長くもない雍正帝の治世十三年間が、清朝史上どんなに重要な意味をもつものであつたかは、その動きの概観を顧みることによつても自から明らかとならう。

（了）

附注

〔例言〕本文中、奏者の氏名および奏上の日付けの明示され、しかも出典の名稱を標記していない奏摺は、すべて『雍正硃批諭旨』からの引用である。なお、本文もしくはこの附注で注記する必要がある場合の『雍正硃批諭旨』は、これを『諭旨』と略稱する。そのほか『實錄』あるいは『某祖・某宗實錄』は『大清某皇帝實錄』の、『類徵』は『國朝著獻類徵初編』の、『清通考』は『皇朝文獻通考』の、『文編』は『皇朝經世文編（賀長齡輯）』の、『東研』は『東洋史研究』の、それぞれ略稱である。

一、地丁錢糧と火耗・羨餘

- (1) 安部健夫「清代における典當業の趨勢」『羽田博士頌壽記念東洋史論叢』所収、參照。
- (2) 顧炎武撰「錢糧論」、『文編』二九、戶政、賦役一所収。
- (3) 『清通考』一三、錢幣考一、案語。
- (4) 『諭旨』一七函、郝玉麟、七年十二月二十七日。
- (5) 羽田亨編『滿和辭典』六一頁、「軍用の錢と糧米」。
- (6) 『世祖實錄』一〇六、順治十四年正月甲子。
- (7) 基本的な考證文獻は王慶雲撰『熙朝紀政』四「紀丁隨地起」の條であるが、その他の研究論文については平凡社版『世界歴史事典』二三、史料篇・東洋、二四四頁參照。
- (8) 『清通考』一三、錢幣考一。
- (9) 徐文弼撰「論驛傳之害」、『文編』二〇、吏政、大吏所収。
- (10) 『康熙會典』戶部一五、庫藏二、錢法の條。

(11) 『姚端恪公文錄』一（一八枚裏）。

(12) 張穆撰「顧亭林先生年譜」による。

(13) 乾隆五十三年重修の『德州志』によるも、德州の税賦の實徵銀數は三萬二千兩程度である。康熙期の二萬九千兩は當然その當時の税賦の「全額」であつたとみられる。

(14) 注(2)に同じ。

(15) 顧炎武の長甥・徐乾學が殿試第三人及第の榮譽をかちえたのは康熙九年のことであつた。ところが乾學の『憺園文錄』卷二に見える「書錢糧論後」によると、彼はその時の對策のうちに、「錢糧論」二篇の論旨をとり入れたという。となると、顧氏の「錢糧論」は錢建て徴支制の徹底化のはかられた康熙十年以前の作となつて年次がすこしズレる。

(16) 『類徵』一九、宰輔一九、徐本傳。カッコ内は『清通考』一三、錢幣考一、によつて補う。

(17) 靳輔撰「靳文襄公奏疏」七（二三枚表）。

(18) 『諭旨』一一函、高其倬、三年四月二日。

(19) 納稅者のおさめた税銀の封をひらく際にでる目減り分のことか。黃六鴻撰『福惠全書』七、錢穀部「拆貯」の條に「拆封」の項がある。なお本文一二四頁をも參照。

(20) 「光緒會典事例」一七一、戶部、田賦、催科。

(21) 『清通考』一三、錢幣考一。當時の錢貴の狀態については、たとえば『高宗實錄』七、雍正十三年十一月癸丑の條に「目下仍然錢少價昂。則有司奉行不力。顯然可見」とある。

(22) 「國初於是年定銀七錢三之例。嗣後。銀錢交納。仍各隨民便。」

雍正十一年。復以民間正賦。概行交銀。經安徽巡撫徐本奏准。凡小戶零星。及大戶尾欠錢糧……」。

② Thomas, T. Meadows, "Chinese and their Rebellion", pp. 24, 27.

②④ 銀錢の比價とはいえ、現実的な經濟現象としては「鑄造貨幣たる錢と自然の儘なる銀塊等と實際の貨物との三つのものの價格が需用供給の關係に依り……三角的に消長する」(加藤繁『支那經濟史考證』下、四四二頁)と指摘されたような三角關係に注意せねばならぬ。なお同じことについては、小竹文夫『清代における銀・錢比價の變動』『近世支那經濟史研究』所収、とくに、八一～八二頁参照。

②⑤ 注②④の第一文獻に同じ。

②⑥ 『高宗實錄』一一五、乾隆五年四月丙戌。

②⑦ 岩見宏『銀差の成立をめぐって』『史林』一六五號。とくに第二節。

②⑧ 安部健夫『元時代の包銀制の考究』『東方學報』京都二四冊、二六一頁。なお、康熙十八年二月、田六善なるものが疏言して、「……至金元。以銀兼錢與鈔而並行。明之中葉。乃專資於銀。闖逆(李自成)變亂。銀或沈於江河。埋於山谷。貪吏又欲爲厚藏之計。致民窮財盡。……」というものも、いわゆる欲望説の正しさへの一證左となろう(『類徵』四五、卿貳五、本傳)。

②⑨ 新輔前引書、七(五三枚裏)。

③① 『類徵』七一、卿貳三一、趙弘恩傳(二二枚裏)。

③② 『高宗實錄』七、雍正十三年十一月癸亥。

③③ 『福惠全書』六、錢穀部、「革官銀匠」の條や、『諭旨』七函、王士俊、雍正六年十一月十五日條などによると、清初、康熙から雍正にかけてのころには、布政司のある省城には、何座かの「官銀匠」の舖がおかれ、州縣には「役」として徴用された銀匠がいて、税賦として納められた碎銀の傾銷、その他銀關係の仕事に當つていたものようであるが、しかし時には弊害の多い「官銀匠」をやめ、いわゆる「凡そ納戸の傾銷はその自便を聽す」で、それらの仕事を民間銀匠の手で行わせたこともあつたらしい。

③④ 『諭旨』二函、楊文乾、四年四月十四日。

③⑤ 同上、三函、費金吾、七年六月八日の條には「藩庫併尾餘平銀兩」の語がある。これも零星の銀數を併わせはかるときにでる餘分のことであらう。

③⑥ 同上、一八函、石麟、六年二月二日。

③⑦ 同上、九函、鄂爾泰、六年三月二十八日。

③⑧ 同上、五函、趙坦麟、六年七月三日。

③⑨ 『文編』二七、戶政二、理財下、に見える朱某撰「戶部平餘案略」には、「平餘」と「餘平」とを同じに使つてゐる。「平銀」といつた一例は、『世宗實錄』一〇〇、雍正八年十一月戊子。

④① 『諭旨』一〇函、田文鏡、八年四月二十七日。

④② 同上、一一函、孫國璽、八年四月十一日。

④③ なお、「平餘」のことは、『東研』本號所掲の宮崎市定博士の論文中にもつと詳しく論及されているはずである。

④④ 『類徵』四四、卿貳四、魏象樞傳(三四枚表)。また湯斌撰『湯

子遺書」九、告諭、「嚴禁徵收錢糧勒索火耗私派之弊以恤民艱以清賦稅告諭」。

(43) たとえば『世宗實錄』五九、雍正五年七月甲子。

(44) 錢陳羣撰「條陳耗羨疏」、『文編』二七、戶政二、理財下所収による。

(45) 『類徵』二四九、僚佐一、張光烈傳。

(46) 『諭旨』七函、王士俊、九年十二月六日。

(47) 同上、二函、陳時夏、六年正月二十九日および五年十二月二十四日。

(48) 同上、五函、杜濱、七年閏七月二十日。また、同上、六五函、武格、七年七月九日。

(49) 同上、一函、孔毓珣、三年九月九日。

(50) たとえば、同上、一四函、高其倬、七年二月八日。

二 康熙期—州県官の耗羨の私収

(1) 『諭旨』四函、高成齡、二年六月八日。

(2) 『碑傳集』八二、黃世發傳（一四枚裏）。

(3) 『類徵』二二一、守令七、官朝京傳。

(4) 第一節、注(4)に同じ。

(5) 清・趙青藜撰「耗羨請仍歸公疏」、『文編』二七、戶政二、理財下。また『皇清奏議』四四所収。

(6) ここでいう「天下」とは、拙著『中國人の天下観念』（ハーバード・燕京・同志社・東方文化講座第六輯）で説明しておいたような意味でのそれで、「中國」というに同じ。

(7) 陳廷敬撰「請嚴考試親民之官以收吏治實効疏」（康熙二十四年

正月二十四日）『午亭文編』三〇所収。

(8) 『諭旨』一六函、楊昢、十一年四月二十六日。

(9) 同上、一〇函、田文鏡、六年二月三日。

(10) 『清國行政法』一下、五四頁。

(11) 注(9)に同じ。

(12) 『諭旨』四函、劉世明、七年十一月十七日。

(13) 服部宇之吉「支那地方官の職務」、『増訂支那研究』二三頁・二九頁。

(14) 『諭旨』二函、陳時夏、五年十一月六日。

(15) 注(10)に同じ。

(16) 『諭旨』五函、法敏、四年六月四日。また同上、六函、王士俊、七年七月二十四日。

(17) 書吏（胥吏）については、在來『清國行政法』中にも解説がないではなかつたが、詳しくは本誌所掲の宮崎博士の論文を参照のこと。

(18) 『類徵』二一六、守令二、周廷鳳傳。

(19) たとえば姚某撰「覆方本府求言札子」、『文編』二三、吏政九、守令下、所収。

(20) 凌如煥撰「敬陳風化之要疏」。同上、守令下、所収。

(21) 彭端淑撰「耗羨私議」。同上、二七、戶政二、理財下、所収。

(22) 第一節、注(4)に同じ。

(23) 稻葉岩吉『清朝全史』上、三八七～八頁による。以下も同書による箇所が少なくない。

(24) 後出の天津總督「賂養性のほか、順天巡撫」柳寅東、同じく宋權

らが加派の排除を献策した模様である。

(29) 『清國行政法』 一下、二八八頁。

(28) 宮崎市定『東洋に於ける素朴主義の民族と文明主義の社會』一八六頁による。

(27) たとえば『世祖實錄』五、順治元年五月庚寅。

(26) 『康熙會典』戸部八、賦役一、徵收。

(25) 『世祖實錄』九、順治元年十月甲子の條。また一五、同二年三月丁卯。

(24) 『類徵』一三三、諫臣一、王亮教傳。

(23) 『世祖實錄』八五、順治十一年七月壬子。

(22) 『類徵』二一八、守令四、補錄、郭文雄傳。

(21) 同上、五〇、卿貳一〇、于可託傳。

(20) 衙役犯贓以下、『光緒會典事例』八二〇、刑律、受贓による。

(19) 『類徵』五七、卿貳一七、徐乾學傳によると、彼は康熙三十年

ころ、「火耗を加収」して問題になつた山東省濰縣知縣「朱敦厚を徹底したかどで革職の處分を受けている。

(18) 稻華岩吉『清朝全史』上、五〇二頁。原文は文語体。

(17) いわゆる「錢糧考成則例」については『世祖實錄』一一三、順治十四年十二月壬申の條参照。

(16) 『類徵』四八、卿貳八、湯斌傳。

(15) 同上、四五、卿貳二、朱之弼傳。

(14) 張玉書撰「紀順治間錢糧數目」『國朝文錄』八、張文貞の條所収による。

(13) 『文獻叢編』二三輯所収、「順治四年奏議稿本」中の「戸科給

事中劉顯績爲錢糧繁目宜裁事題本」。

(12) 魏象樞撰『寒松堂集』二(四一枚表)。

(11) 『聖祖實錄』二四〇、康熙四十八年十一月丙子。

(10) 陸隴其撰『三角堂文錄』一。また『文編』二八、戸政三、養民、所収。

(9) 『類徵』六、宰輔六、宋德宜傳。

(8) 同上、二五四、僚佐六、汪楷傳。

(7) 同上、一三四、諫臣二、丁泰傳。

(6) 同上、一六〇、疆臣一二、于成龍傳。

(5) 宋學撰「條議畿東十事」『西陂類稿』三八、所収。

(4) 同様の指摘は康熙帝の上諭のうちにも何度かくりかえされている。たとえば、四十九年十月癸未のそれに「今部中每週一事。輒議令地方官。設法料理。皆掩飾美名。實則加派於地方耳」の

ごときがそれである(『聖祖皇帝聖訓』四、聖德)。

(3) 「請停銅鈔採辦詳文」『西陂類稿』三九、所収。

(2) 張玉書撰「請杜設法名色疏」『文編』二六、戸政一、理財上所収による。なお、『類徵』五二、卿貳一二、王國安傳には、

「竊戸の場合についてだが、やはり「正派一兩。有加至十兩餘者」と傳えられている。

(1) 『諭旨』三函、佟吉圖、二年八月二十八日。

(1) 注(1)に同じ。

(1) 『諭旨』四函、石文焯。三年七月二十四日。

(1) 同上、一函、孔毓珣、二年六月七日。

(1) 『世宗實錄』六六、六年二月丙申の條。

- (58) 『諭旨』一二函、安修德、七年十一月二十四日、その他。
- (59) 『類徵』二二〇、守令六、魏令君傳。
- (60) 同上、二五〇、僚佐二、張璲傳。
- (61) 同上、五〇、卿貳一〇、王隨傳。
- (62) 黃六鴻撰『審典革』、『文編』二三、吏政九、守令下、所収による。
- (63) 『類徵』一六二、疆臣一四、錢銑傳。
- (64) 趙申喬撰『批衡山縣詳濫項等費作何設施由』、『趙恭毅公牘藁』七、所収。
- (65) 『聖祖實錄』一八三、康熙三十六年五月丙申。
- (66) 『類徵』五七、卿貳一七、徐潮傳。
- (67) 岩見玄「雍正時代の公費に關する一考察」、『東研』一五ノ四・八五頁參照。
- (68) 趙申喬撰『批寶慶府同知再詳解新寧縣經承陳超凡等候訊由』、『牘藁』七、所収。
- (69) 『類徵』六五、卿貳二五、陳瓊傳。
- (70) 『高宗實錄』三五二、乾隆十四年十一月庚申。
- (71) 『類徵』一五八、疆臣一〇、于成龍傳。
- (72) 同上、一五七、疆臣九、彭鵬傳。
- (73) 岩見玄「明代地方財政の一考察―廣東の均平銀について―」、『神戸大學』研究』三、參照。
- (74) 『清通考』四二、國用考四、俸餉の條、乾隆元年八月上諭。また『清國行政法』一下、二八六頁および『光緒會典事例』二四九、戸部、俸餉の條。
- (75) 『世祖實錄』六四、順治九年四月丁未。
- (76) 『寒松堂集』三(二七枚表)。
- (77) 注(68)に同じ。
- (78) 『類徵』五一、卿貳二一、張伯行傳。
- (79) 『諭旨』一〇函、田文鏡、八年二月一日。また、同上、一六函楊永斌、十二年三月六日。
- (80) 同上、五函、宜兆熊、四年四月一日。
- (81) 同上、四函、朱綱、三年四月十一日。
- (82) 同上、一五函石成峨、一枚裏(日付不明)。
- (83) 同上、一四函高其倬、九年十一月十日、硃批。
- (84) 同上、一二函、楊錕、三三枚裏―三四枚表(日付不明)。
- (85) 同上、" 四三枚裏。
- (86) 『高宗實錄』一六四、七年四月庚寅朔の殿試の策題には、「康熙年間。無耗羨。雍正年間。有耗羨。無耗羨之時。凡州縣莅任。其親戚僕從。仰給於一官者。不下數百人」といつている。平均四十人は控え目に過ぎたかも知れない。
- (87) 注(7)の論文、『東研』一五ノ四、七六頁。
- (88) 李光地撰「請嚴定承審虧空處分疏」、『榕村全集』二六所収。
- (89) 『壽張縣志』のように「徭役」の條を設けているものは、しかし、多いとは言えない。
- (90) 『諭旨』一〇函、田文鏡、六年九月八日。
- (91) たとえば、康熙二十四年九月六日の日付をもつ陳廷敬の「請嚴督撫之責成疏」のうちにも、「上官廉。則吏自不敢爲貪。上官不廉。則吏雖欲爲廉。而不可得。云云」と論じている。「午

亭文編」三一所収。また、前文一六二頁所引の『清史稿』諸岷傳を見よ。

(92) 『類徵』一五二、驍臣四、林起龍傳。

(93) 同上、四五、卿貳五、朱之弼傳。

(94) 李光地撰『榕村全集』二六。

(95) 第一節注(44)に同じ。

(96) 『類徵』四五、卿貳五、田六善傳。

(97) 柴潮生撰「理財三策疏」『文編』二六、戶政一、理財上、所収。

(98) 注(96)に同じ。

(99) 『世祖實錄』一七、順治二年六月乙亥。一〇六、十四年正月戊辰。一三一、十七年正月壬申等。

(100) 『聖祖實錄』二八二、康熙五十七年十一月戊戌。

(101) 『諭旨』二函、陳時夏、五年正月二十八日。

(102) 『類徵』七一、卿貳三一、任蘭枝傳。

(103) 『諭旨』五函、張坦麟、六年九月七日。および同上、一八函、尹繼善、七年十一月十三日。

(104) 同上、五函、莽鵠立、三年六月二日。

(105) 『類徵』一八、宰輔一八、孫嘉淦傳。

(106) 注(95)に同じ。

(107) 『諭旨』一〇函、田文鏡、三年九月二十九日。

(108) 同上、三函、修吉圖、二年八月二十八日。

(109) 同上、二函、陳時夏、五年十一月六日。

(110) 『寒松堂集』二(四一枚表)。

(111) 郭琇撰『華野疏藁』(二五枚表)。

(112) 趙申喬撰「特參劣員以清吏治疏」『趙恭毅公牋藁』二所収。

(113) 注(98)に同じ。

三 雍正期—司庫への耗羨の帰公

(1) 第二節の注(92)に同じ。『類徵』は「四十年」に作る。

(2) 『類徵』一三五、諫臣三、王原傳。

(3) 『清史稿』列傳八一、諸岷傳。

(4) 『諭旨』五函、高成齡、三年二月八日。

(5) 安部健夫「清朝と華夷思想」『人文科學』一ノ三、二二—三頁。

(6) 宮崎市定「雍正帝」とくに、五、「總督三羽鳥」の項。

(7) 『諭旨』八函、徐鼎、七年三月八日。

(8) 注(4)に同じ。

(9) 若見宏「公費の一考察」『東研』一五ノ四、九三—四頁。

(10) 原文には「近聞邸抄。見内閣交出請禁提解火耗之條奏」とある。

「交」の字の意味が少しあいまいだが、今は使役形と解釋しておいた。

(11) 『類徵』六七、卿貳二七、沈近思傳に引かれた、杭世駿撰「神道碑銘」による。

(12) 荒木敏一「雍正二年の罷考事件と田文鏡」『東研』一五ノ四、参照。

(13) 『碑傳集』二三、沈近思傳に引かれた『測海集』。

(14) 『類徵』六七、卿貳二七、沈近思傳に引かれた全祖望撰「題神

道碑後」による。

(15) 注(1)に同じ。

(16) この部分のみ『清史稿』列傳七九、本傳によつて増入。

(17) 『碑傳集』二三（六枚表裏）。

(18) 『諭旨』一五函、鄂昌、十二年五月十八日。刊本に「公啓」の「公」字を硃筆で抹削して「項」字を添加する形になつてゐるのは誤りであらう。

(19) 孫嘉澍撰「辨理耗羨疏」『文編』二七、戸政二、理財下所収。

(20) 『諭旨』七函、王士俊下（五七枚裏）。

(21) 『世宗實錄』六八、雍正六年四月壬寅。

(22) 『諭旨』四函、傅泰、八年三月十七日。

(23) 宮崎市定「雍正硃批諭旨解題―その史料的价值―」『東研』一五ノ四、三〇頁参照。

(24) 『諭旨』七函、蔣洞（二十枚表）。日付なきも五年六七月ごろの奏摺。

(25) 宮崎市定、上引論文、『東研』一五ノ四、二四頁。

(26) 『諭旨』四函、塞楞額、五年八月二十六日。

(27) 同上、一二函、魏廷珍、六年三月十九日硃批。

(28) 同上、五函、張坦麟、五年十一月一日硃批。

(29) 『世宗實錄』六八、雍正六年四月壬寅。

(30) 同上、六一、雍正五年九月戊辰。

(31) 注(26)に同じ。

(32) 例は多い。例えば、『高宗實錄』一七八、乾隆七年十一月乙丑。

(33) 前者は本節注(19)に同じく、後者は第一節注(44)に同じ。

(34) 『諭旨』一二函、趙城、六年十月十一日。

(35) 雍正帝の好んでつかつた決まり文句の一つに「上不誤公。下不累民」というのがある。（例えば『實錄』六一、五年九月乙卯・同上、六八、六年四月壬寅等）。この場合の「公」と「民」との對比は、例えば本文二三一頁上段に引く(4)文獻の「國」と「民」、(4)文獻の「正項」と「百姓」との関係と並行的な関係にあつたと見ることができよう。

(36) 注(30)に同じ。

(37) 注(29)に同じ。その他、同書、八九、七年十二月癸卯。九〇、八年正月丙申等。

(38) 『高宗實錄』一三六、乾隆六年二月乙巳。

(39) 『清史稿』列傳七九、本傳。

(40) 注(29)に同じ。

(41) 王慶雲撰「紀耗羨歸公」『熙朝紀政』四、所引による。

(42) 『諭旨』七函、蔣洞（三七枚表）。

(43) 同上、四函、石文焯、三年六月十三日。

(44) 本文中に注記の上諭、および『高宗實錄』二三、乾隆元年七月甲寅。

(45) 蘭州巡撫許容は雍正六年の甘肅省の額徵銀を「二十一萬二千餘兩」と傳えており、これと差がある（『諭旨』一六函、同人、七年四月十五日）。

(46) 以上は、『諭旨』一四函、高其倬、三年六月二十八日、および同上、一函、石禮哈、三年八月三日による。

(47) 前注の第一文獻に同じ。

- (48) 『諭旨』九函、鄂爾泰、五年十月八日硃批。
 (49) 同上、一五函、張廣泗、七年八月六日。
 (50) 安部健夫「米穀需給の研究」、『東研』一五ノ四、一三五・一五五頁参照。
 (51) 『清通考』三、田賦考三。
 (52) 同上、四、田賦考四。
 (53) 注(52)に同じ。
 (54) 『諭旨』一函、范時繹、七年二月二日附載。
 (55) 同上、三函、修吉圖、二年八月二十八日。
 (56) 同上、一五函、岳濬、六年七月十三日、および同上、六函、張保、四年三月十日による。
 (57) 同上、六函、張保、四年十一月四日。
 (58) 同上、四函、塞楞額、五年一月二十四日。
 (59) 同上、一一函、謝旻、七年十一月九日。
 (60) 同上、六函、李蘭（一五枚裏）。
 (61) 同上、一四函、高其倬、三年九月二十日。
 (62) 「公件銀」のことは『諭旨』中にも習見するが、比較的主なものとしては『類徵』『碑傳集』にみえる楊名時傳を参照のこと。
 (63) 前出、雲南省の場合も、この直隸省の場合も、収支の金額の帳尻が合わぬが、あるいは、その収入分は帳簿上の耗羨額をかげ、支出分は實収のそれによっているためでもあろうか。
 (64) 『雍正會典』二四、戶部二、州縣一。
 (65) 注(65)に同じ。

- (66) 『諭旨』六函、甘國奎、二年十一月二十四日。
 (67) 同上、四函、福敏、三年九月二十日。
 (68) 同上、一三函、李衛、五年二月十七日。
 (69) 同上、四函、石文焯、二年十月十五日。
 (70) 同上、一五函、郭銑、六年七月六日・十月十一日。
 (71) 注(68)の李衛の奏摺に対する硃批のうちには「日前、修吉圖竟有加耗之請。朕痛加責飭」の句がある。修吉圖の本意は必ずしも明らかではないが、ともかく彼がこのときはげしく帝に詰め寄つたことは疑いない。
 (72) 田文鏡等撰、『州縣事宜』『宦海指南五種』所收、四六枚表。
 (73) 『諭旨』七函、王士俊、六年十月八日。そのほか、六年十一月十五日・七年七月二十四日等の條参照。
 (74) 同上、一七函、郝玉麟、七年十二月二十七日。
 (75) 同上、七函、王士俊、七年十一月十日。
 (76) 同上、二函、楊文乾、四年四月十四日。
 (77) 注(70)の十月十一日の條。
 (78) 岩見宏「公費の一考察」、『東研』一五ノ四、八八頁。また、注(81)にみえる『研究』誌、六五頁をも参照。
 (79) 『諭旨』一三函、李衛六年十一月二十二日。
 (80) 同上、五函、常賚、四年四月二日。
 (81) たまたま、一九五八年二月發行の神戸大學『研究』誌上に發表された岩見宏氏の「雍正財政史の一面―錢糧の虧空とその整理―」がその所期の研究にあたる。参照あたい。
 (82) 『世宗實錄』六八、雍正六年四月壬寅。

- (83) 例えば『諭旨』一〇函、田文鏡、二年十一月九日。
 (84) 同上、二函、李維鈞、二年三月二十三日。
 (85) 『世宗實錄』一七、雍正二年三月丁酉の條に、「直隸巡撫李維鈞。摺奏現行地方事宜各款。……一。減火耗每兩二三。以紓民力」とある。

- (86) 『諭旨』三函、福敏、三年九月二十日。
 (87) 同上、一函、范時綽、七年二月二日附載。
 (88) 『高宗實錄』七、雍正十三年十一月癸亥。
 (89) 『世宗實錄』五三、雍正五年二月甲子。
 (90) 第三節注(19)に同じ。
 (91) 第三節注(12)に同じ。とくに『東研』一五ノ四、一〇八ノ九頁。
 (92) 『諭旨』五函、張坦麟、五年十一月一日。
 (93) 同上、六年七月三日。
 (94) 第一節注(4)に同じ。
 (95) 『諭旨』二函、李維鈞、元年十月十五日附載。

四 帰公派と帰官派との抗争

- (1) 『高宗實錄』八九、乾隆四年三月甲子。
 (2) 第三節注(8)に同じ。
 (3) 乾隆七年四月一日における殿試の策題には、その一因を説明してこういつている。「自雍正年間。耗羨歸公。所爲諸弊。一切掃除。而游民之借官吏以謀生者。反無以餬其口。農民散處田間。其富厚尙難於驟見。而游民喧闐城市。貧乏已立呈矣。……」(『實錄』一六四)。官吏に對する寄生者たちが「耗羨歸公」の反對論の後ろだてをすることは十分にあり得ることである。

- (4) 第三節注(3)に同じ。
 (5) 第三節注(38)に同じ。
 (6) 第一節注(44)に同じ。
 (7) 第二節注(5)に同じ。
 (8) 注(4)に同じ。
 (9) 孫家淦(第三節注(19))は「議者猶嘗以爲加賦。可謂耳食者矣」といい、趙青藜(第二節注(5))も、「豈歸公爲加賦。而此(歸官)遂不爲加賦乎」といつて、當時の議者の論點を傳えている。
 (10) 前注第二文獻に同じ。
 (11) 方苞撰『望溪先生集外文』二所収。
 (12) 注(3)に同じ。
 (13) 注(4)に同じ。
 (14) 注(1)に同じ。
 (15) 楊錫紱撰「饑民食疏」、『皇清奏議』四五所収。
 (16) 孫家淦の語(第三節注(19)に同じ)。
 (17) 文獻は前注に同じ。
 (18) 第三節注(41)に同じ。
 (19) この部分は『高宗實錄』一七八、乾隆七年十一月乙丑の條によつて補う。
 (20) 第二節注(5)に同じ。
 (21) 第二節注(105)に同じ。
 (22) 『高宗實錄』七、雍正十三年十一月甲寅。
 (23) 第三節注(41)に同じ。
 (24) 『類徵』一八三、驥臣三五、陸燿傳等にて補う。

(25) 嘉慶・道光期以後の清朝財政とくに「虧空」の状況については、愛知大學の鈴木中正氏に研究發表の豫定ありと聞いて、期待している。

(26) 橋樑『支那社會研究』昭和十一年、東京、日本評論社刊行、所収。四二八～五四六頁。

(27) 官吏とは要するに、いわゆる「國家」のための税課取りたて代理業の現場(州縣官)と事務(州縣以上の内外官)とのようなもので、康熙期およびそれ以前には、「火耗」がその際における最大の請負手數料であつたのである。

(28) 同人撰『治賦篇』『皇朝經世文續編』三四所収。なおその文は、『清國行政法』六、二七頁にすでに引用されている。

(29) 第三節注(5)に同じ。

「米穀需給の研究」正誤表『東研』一五卷四號所載

頁	誤	正
一三六下	と符合する。	とは。符合する。
一三八表	(福建省の存留糧および果計) 128,000	127,000 (累計數も改める)
一五九上	いわれる。湖南	いわれる。湖南
一六〇上	大災や凶作	天災や凶作
一六三下	省分の一つである、	省分の一つである。
一六七下	熟米	熟米
一七八上	細米	碎米
一七四下	大觀すると	大觀すると、
一九三下	民間所出三米。	民間所出之米
二〇四上	(本文一四五頁)、	(本文一五四頁)、
二〇八下		

補訂(1) 熟米を「だつくまい」と訓むことについては、森鹿三教授

から疑問が提出された。たしかにこれは私の聞きちがいにによる誤りである。實はある中國人留學生の人にお尋ねして書いたのであるが、その人は明らかに「つきこめ」のつもりで教えてくれたのを、私自身が取りちがえていたのである。なお別に、煮た米をも「熟米」といつたらしいことは、例えば、『類徵』一七八、疆臣三〇、馮鈴傳に「…撥解左江鎮標協營兵食。向俱係煮熟穀米。…但穀經煮熟。米必味淡力薄」というによつて知られる。

(2) 『東研』一五ノ四、一六八頁上段。安徽歙縣における異常な米價高を、有名な「徽州商人」の出身地である當地に特有な理由によるものであるかのように疑つておいたが、しかし『論旨』六函、伊拉齊、八年三月二十六日の條に、「〔徽州〕境內山多田少。戶口蕃庶。一年收穫。不敷半載之食…」というのによると、必ずしもそんなことでも無かつたやうである。なお、伊拉齊が同じ奏摺で「如廣產米穀。舟運易達之鄉。固應積貯。其產米甚少。舟運難通之處。更宜多貯」といつているのは、別段めずらしい發言ではないが、しかし、『東研』一五二頁上段の表を讀む際には、一應參考にされてもよい史料であらう。

(3) 一三五頁下段、一五九頁上段等で、私は、江西省關係のF-A數値算出のための資料には、大きな誤差があるであらうことを疑つておいた。これも私がうつかりしていたので、江西省などが、いわゆる鹽鈔銀の徴派の必要上、婦女の丁口をも編

審していたことは、かなりよく知られていたことであつたのである。ふるくは、江西のほか福建および廣東でも婦女鹽鈔銀の徴派が行われたが（『清通考』一九、戸口考一）、乾隆十一年に、婦女の編審を停止されたのは江西の一省である（同

雍正二年の縉紳・中樞全書（その三）

象徴の仕方は例えば第一枚の表に内閣大學士の銜名を列しているが、その第三行に

武英殿大學士兼吏部尚書加二級富寧安

廂監旗人癸丑とあるように、一人分を二人に分けて、

而も共通に使える文字はそのまま残しておくといつた風な窮屈なものすらある。姓名の下に字と籍貫と進士及第年とを記す。

中樞全書は全一冊、前書と同大で、一三四丁の外に、京城巡捕三營等の八丁を含む。見返しの右欄に「按月刊補」とあり、中欄は書名で、右欄には「金鑑齋梓行」とあり、發行所が異つているようにも見えるが、但し表紙には文陞閣とある。恐らく文陞閣が金鑑齋の版木を譲り受けたものであろう。而して表紙には兩書とも「雍正甲辰冬季」とあれば、季毎に改版したかと思われるが、今ここに、「按月刊補」とあるを見ればまた、

上及び『實錄』。雍正時代にも、江西省のみが婦女丁口を含んでいたためにF-A数値が異常に下つていたのであり、それがないければ當然、湖南省につぐ數値をもちえたことであらう。

毎月改版したようにも取れ、何れが眞實か分らない。中樞全書で面白いのは武官の俸給の記事があることで、武官は

正一品俸銀九十五兩八錢一分二厘薪銀一百四十四兩であるが、但し武官には勤務手當がつく。例えば提督には

提督支一品俸薪外歲給蔬菜燭炭銀一百八十兩心紅紙張銀二百兩案衣家伙銀一百兩

とあり、俸薪合して二百三十九兩なるに對して手當は四百八十兩に上つている。これを文官の一品が俸銀百八十兩だけなのに比べて格段の相違である。武官優先はどうも日本だけではなかつたようだ。

京大本は前二書だけで、序文の廣告に見える輔政全書が見當らないのは惜しまれる。更に第一冊の表紙貼紙によると

則例全書

計肆函共貳拾肆本
案季增補

なるものもあつた由である。

〔宮崎〕

Emperor Yung-chêng and Ta-i Chüeh-mi Lu 大義覺迷錄

Hidemi Onogawa

The Ta-i Chüeh-mi Lu was published by Emperor Yung-chêng, who became much concerned with the Tsêng Ching 曾靜 affair. The Tsêng Ching affair was motivated by the thought of Lü Liu-liang 呂留良 on the "difference between the Chinese and the Barbarians" and "Kingly Government." What was Lu Liu-liang's thought? How Tsêng Ching became influenced by his thought? The Tsêng China affair was also due to the rivalries between the cliques within the Ch'ing court. What was Emperor Yung-chêng's attitude toward the rivalries? The author tries to show that the Ta-i Chüeh-mi Lu, which was written for the sake of guiding the people's thought, was at the same time intended to give Yung-chêng's view on these rivalries.

On Hao-Hsien 耗羨

Takeo Abe

The term hao-hsien or huo-hao 火耗 means the loss in weight caused in the process of minting the silver coins. After the payment in silver of the land and poll taxes became the rule at the middle of the Ming dynasty, a kind of additional tax called huo-han came into existence. Generally speaking, it was about 10 per cent of the amount of the regular taxes, but sometimes it reached 30 to 50 per cent. While the regular taxes constituted the income of the Government, the huo-hao was taken by the rural tax collectors, who used about 20 per cent of it for administrative purposes, another 20 per cent for their own living, and the rest for bribery to their superiors. The latter gave, in turn, part of it to officials in the Central Government. From the economic viewpoint, the whole bureaucratic system of the Ch'ing Government was operated on the basis of this huo-hao income. Emperor Shuo-chin tried to abolish the practice in vain, while Emperor K'ang-hsi was compelled to recognize it semi-officially. The present author attempts to clarify why and how Emperor Yung-chêng made efforts to use the hitherto privately appropriated huo-hao for the benefit of the Government treasury, and to what extent was he successful in his endeavors.